

博 多 71

—博多遺跡群第109次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第629集

2000

福岡市教育委員会

IIAKA

博

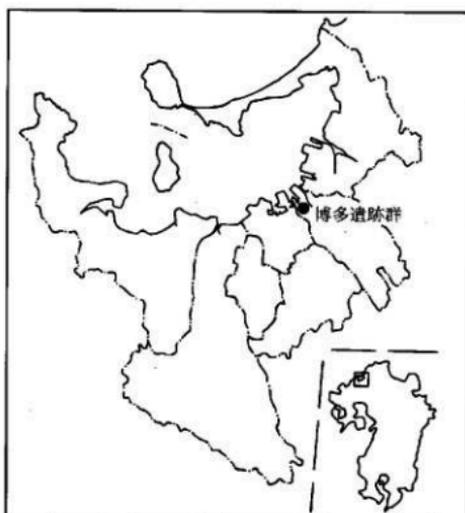
TA

多

71

—博多遺跡群第109次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第629集



遺跡略号 調査番号
HKT-109 9822

2000

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書はビル建設に伴い調査を実施した博多遺跡群第109次調査の成果を報告するものです。今回の調査では古墳時代から中世にかけてのまちの跡を検出するとともに、多数の土器や輸入陶磁器が出土しました。これらは当時の博多地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、費用負担など多くのご協力を賜りました株式会社岡部マイカ工業所をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 西 憲一郎

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会がビル建設に伴い、福岡市博多区博多駅前1丁目155-2において発掘調査を実施した博多遺跡群第109次調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
9822	HKT-109	301.1㎡(3面)	1998.7.9~11.30

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣、参加学生が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は平川敬治、小川光彦(琉球大学大学院生)、榎本、星野恵美が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は榎本が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は星野、榎本が行った。
7. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°40'西偏する。
8. 遺構の呼称は井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、埋葬関連その他の遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
9. 本書に記述する各遺物の説明、分類については以下の文献を参考とした。

(土師器)

山本信夫「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』1990年

(輸入陶器)

福岡市教育委員会「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊』1984年

(輸入磁器)

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」『九州歴史資料館研究論集 4』1978年

山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』京陽社 1995年

(瓦)

井澤洋一「筑前における中近世瓦の分類試案(上)・(下)」『福岡市博物館研究紀要 第5号・第6号』1995・1996年

10. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 本書の執筆および編集は榎本が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	5
1. 概要	5
1) 調査経過	5
2) 調査の概要と基本層序	5
2. 遺構と遺物	10
1) 井戸(SE)	10
2) 土坑(SK)	34
3) 溝(SD)	62
4) 埋葬関連遺構(SX)	71
5) その他の遺構(SX)	75
6) その他の遺物	76
IV. 結論	81

挿 図 目 次

第1図	博多遺跡群位置図(1/25,000)	3
第2図	第109次調査区位置図(1/1,000)	4
第3図	調査区北東壁面土層実測図(1/40)	6
第4図	第1面全体図(1/150)	7
第5図	第2面全体図(1/150)	8
第6図	第3面全体図(1/150)	9
第7図	SE001実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	11
第8図	SE001出土遺物実測図(2)(1/2、1/4)	12
第9図	SE038実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	13
第10図	SE039実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3)	14
第11図	SE039出土遺物実測図(2)(1/1、1/3)	15
第12図	SE041実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3)	16
第13図	SE041出土遺物実測図(2)(1/3、1/4)	17
第14図	SE042実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3、1/4)	18
第15図	SE043実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	19
第16図	SE046実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3、1/4)	20
第17図	SE047・048実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	21
第18図	SE049実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/2、1/3)	22
第19図	SE353実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/1、1/3、1/4)	23
第20図	SE354出土遺物実測図(1/1、1/3)	24
第21図	SE354実測図(1/40)	25
第22図	SE355実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3、1/4)	26
第23図	SE356実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3)	27
第24図	SE356出土遺物実測図(2)(1/3、1/4)	28
第25図	SE357・358実測図(1/40)	29
第26図	SE357・358出土遺物実測図(1/3)	30
第27図	SE231実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3)	31
第28図	SE231出土遺物実測図(2)(1/2、1/3、1/4)	33
第29図	SK002・015・021・022・072・078実測図(1/40)	35
第30図	SK002出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	36
第31図	SK015出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	37
第32図	SK015出土遺物実測図(2)(1/3、1/4)	38
第33図	SK021・022・072・078出土遺物実測図(1/3)	39
第34図	SK081・097・118・302・307実測図(1/40)	40
第35図	SK081・097・118出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	41
第36図	SK302出土遺物実測図(1/3、1/4)	42
第37図	SK307出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	43
第38図	SK040・044・214・216・352実測図(1/30、1/40)	44

第39図	SK040・044出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	45
第40図	SK214・216出土遺物実測図(1/3)	46
第41図	SK352出土遺物実測図(1)(1/3)	47
第42図	SK352出土遺物実測図(2)(1/3、1/4)	48
第43図	SK352出土遺物実測図(3)(1/3)	49
第44図	SK352出土遺物実測図(4)(1/2、1/3、1/4)	50
第45図	SK352出土遺物実測図(5)(1/3)	51
第46図	SK352出土遺物実測図(6)(1/2、1/3、1/4)	52
第47図	SK232・235・379・402実測図(1/40)	53
第48図	SK232・235・379・402出土遺物実測図(1/2、1/3)	54
第49図	SD003・016・017・019・304・306実測図(1/40)	56
第50図	SD003・016(1)出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	57
第51図	SD016出土遺物実測図(2)(1/4)	58
第52図	SD017・019・304(1)出土遺物実測図(1/3、1/4)	59
第53図	SD304出土遺物実測図(2)(1/4)	60
第54図	SD304出土遺物実測図(3)(1/1、1/4)	61
第55図	SD305実測図(1/50)および出土遺物実測図(1/3、1/4)	63
第56図	SD306出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	64
第57図	SD306出土遺物実測図(2)(1/4)	65
第58図	SD032・033・045実測図(1/40)	66
第59図	SD032出土遺物実測図(1/4)	67
第60図	SD034実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3、1/4)	68
第61図	SD033・045出土遺物実測図(1/3、1/4)	68
第62図	SX217実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	69
第63図	SX050実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/2、1/3)	70
第64図	SX234実測図(1/50)	71
第65図	SX233実測図(1/40、1/100)および埴輪出土位置図(1/300)	72
第66図	出土埴輪実測図(1/3)	73
第67図	SX031・035・036・037・301実測図(1/40)	74
第68図	SX031・301出土遺物実測図(1/3、1/4)	75
第69図	ビット・攪乱出土遺物(1)(1/3、1/4)	77
第70図	ビット・攪乱出土遺物(2)(1/2、1/4)	78
第71図	包含層出土遺物(1)(1/1、1/3、1/4)	79
第72図	包含層出土遺物(2)(1/3、1/4)	80

図 版 目 次

図版 1	(1)1面南西部全景(東から)	(2)1面北東部全景(南東から)
図版 2	(1)2面南西部全景(東から)	(2)2面北東部全景(南東から)
図版 3	(1)3面南西部全景(東から)	(2)3面北東部全景(南東から)
図版 4	(1)SE039(南西から)	(2)SE043(北西から)
	(3)SE049(南西から)	(4)SE049井筒(南西から)
	(5)SE046(北東から)	(6)SE047(北東から)
図版 5	(1)SE353井筒(南東から)	(2)SE356(南東から)
	(3)SE357(南東から)	(4)SE231(南東から)
	(5)SK040(東から)	(6)SK214(南東から)
図版 6	(1)SK307土層(西から)	(2)SK352(北東から)
	(3)SD016(北西から)	(4)SD019土層(南西から)
	(5)SD032-033土層(南西から)	(6)SD045土層(南西から)
図版 7	(1)SD304(北東から)	(2)SD306土層(南西から)
	(3)SD305(南東から)	(4)SD305土層(北西から)
	(5)SX050(南西から)	(6)SX050遺物出土状況(北東から)
図版 8	(1)SX217(南東から)	(2)SX301(北西から)
	(3)SX233(南東から)	(4)SX233土層(北西から)
	(5)SX234(北東から)	(6)SX234土層(東から)

I.はじめに

1. 調査に至る経緯

1998(平成10)年1月13日付けで株式会社岡部マイカ工業所代表取締役岡部弥太郎氏より本市教育委員会宛てに博多区博多駅前1丁目155-2(面積:913.22㎡)におけるビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号:9-2-458)。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることや、当該地での別申請者による過去の試掘調査(1989年8月30日および1990年4月4日実施)の成果から書類審査を行い、地内全面に遺構が存在することが明らかとなった。この結果をもとに両者で協議を行ったところ、地内南東側の建物建築部分496㎡については遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、1998年7月9日より発掘調査、翌1999年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

2. 調査の組織

調査委託:株式会社岡部マイカ工業所

調査主体:福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括:埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任) 山崎純男(現任)

同課調査第2係長 山口謙治(前任) 力武卓治(現任)

調査庶務:文化財整備課 谷口真由美

事前審査:同課事前審査係長 田中壽夫

同係主任文化財主事 杉山富雄

同係文化財主事 屋山洋(前任) 加藤隆也(現任)

調査担当:同課調査第2係文化財主事 榎本義嗣

調査補助:小川光彦(琉球大学大学院生)

整理補助:平川敬治 小川光彦

調査作業:一ノ瀬周三郎 岩佐亘 金子國雄 熊本義徳 小林義徳 坂田武 渋谷博之 関哲也

永松好伸 米倉國弘 石橋アル子 金子澄子 唐島栄子 酒井康恵 杉村百合子

辻美佐江 永松伊都子 永松トミ子

稲田健二(福岡大学学生)

井本俊亮 花島拓 山口耕平 山元真美子(以上別府大学学生)

池田絃子 河田恭子 坂口佳子 浜田裕美(以上九州産業大学学生)

整理作業:西島信枝 松尾真澄 小林由美(中村学園大学学生)

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで株式会社岡部マイカ工業所をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は東区箱崎から博多区聖柏、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至る。この砂丘の形成時期については少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘微高地には第1図に示した範囲内で、南側から博多遺跡群、吉塚遺跡群、聖柏遺跡群、吉塚祝町遺跡、吉塚木町遺跡、箱崎遺跡が知られている。

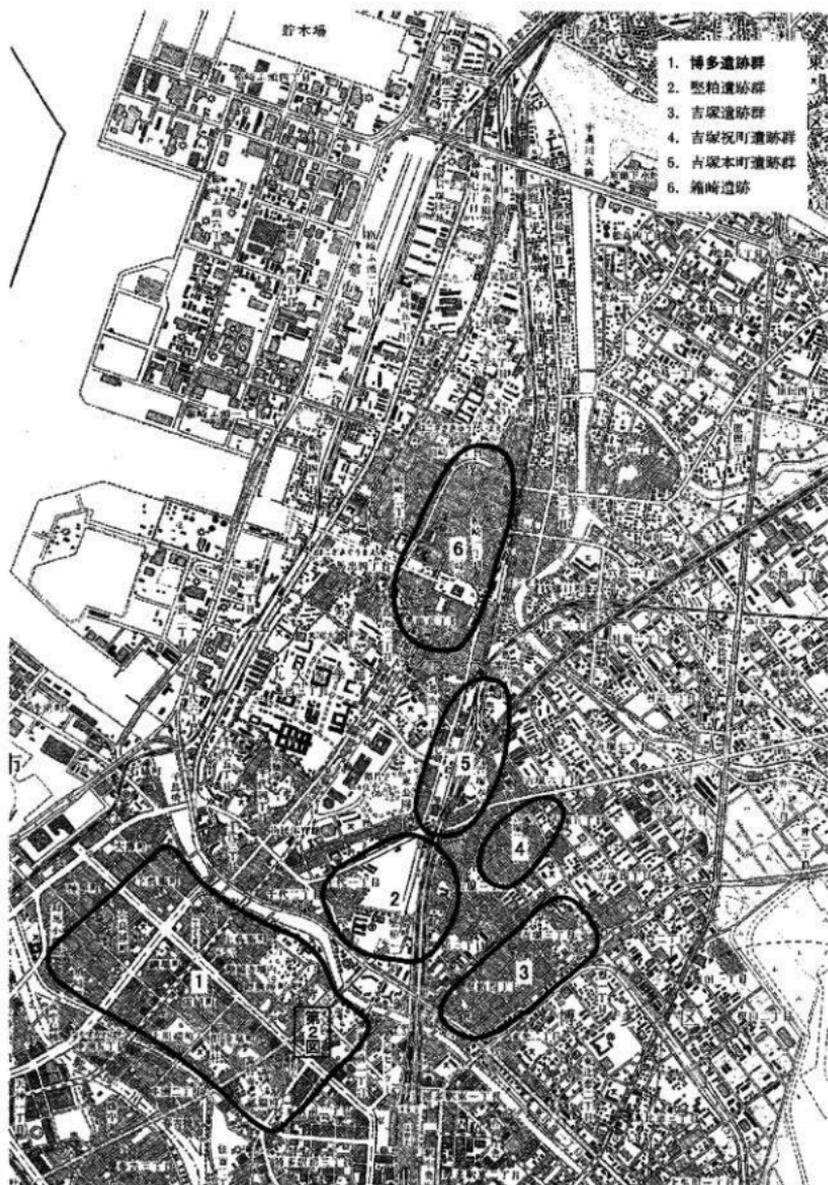
本遺跡群の立地する砂丘は博多湾のほぼ中央に面し、東側を近世に開鑿された御笠川(右堂川)、西側を那珂川によって圍まれる。また、中世までは砂丘南側に御笠川の旧流路が西行して、那珂川に合流していた。この砂丘は博多湾に面して、大きく3列から形成されており、内陸側から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと呼称される。このうち、砂丘Ⅰと砂丘Ⅱは「博多浜」と称されるが、南西側から北東に延びるラグーンを起源とする狭長な谷部によって区分されている。また、「息の浜」と呼ばれる砂丘Ⅲは砂丘Ⅱの前面に遅れて形成された砂丘で、12世紀前半からの低地の埋め立てによって陸地化が進んでいく。

今回報告する第109次調査区は砂丘Ⅰの北東—南西方向に延びる尾根から南東内陸側に下った緩斜面上に立地している。ここでは本調査区の位置する「博多浜」の歴史的環境について概述する。本砂丘での本格的な生活の痕跡は、弥生時代中期前半の砂丘Ⅰと砂丘Ⅱを分かち谷に面した頂部において集落および甕棺墓地として認められる。しかし、それらは中期中頃までの比較的短期間に営まれ、その後、終末期から古墳時代前期にかけては砂丘Ⅰを主体とし、砂丘Ⅱの南半に集落の盛行がみられる。砂丘Ⅰ南東側での鉄治関連の工房検出例は該期の本砂丘における生産活動の一端を窺う上で貴重である。また、方形周溝墓に代表される埋葬遺構の検出例も認められる。続く古墳時代中期において特筆すべき遺構は本調査区の南西、砂丘Ⅰ尾根上の第28次・31次調査区で確認された5世紀前葉に位置付けられる全長56m以上を測る前方後円墳(博多1号墳)である。遺存状況は良好ではないものの、基底部には葺石が認められ、円筒および形象埴輪が出土している。なお、墳丘の大半は削平され、主体部については不明である。また、本調査区南側の第37次調査区ではほぼ同時期の滑石製の玉類を副葬した木棺墓が検出されている。該期における博多浜はこれら墓地としての土地利用が顕著で、生活遺構については希薄であるものの、6世紀後半に再び集落としての展開をみる。

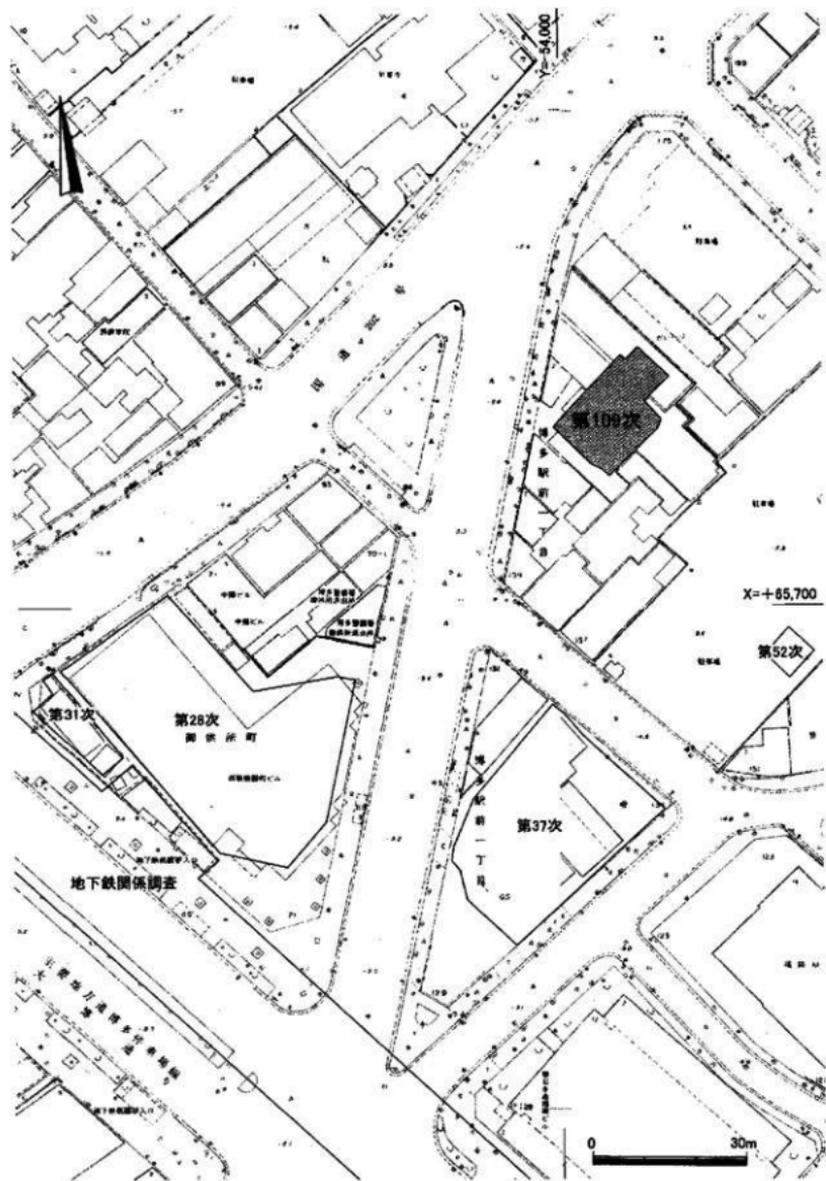
律令期には砂丘Ⅰの頂部において区画溝が出現する。石帯、帯金具、瓦等の出土例から官衙等の存在が看取されるが、明確な遺構の検出には至っていない。平安時代後半から末期には鴻巣館から貿易の拠点が博多浜へと移り、都市としての性格を帯び始める。また、宋商人の居留によって膨大な輸入陶磁器の出土が各調査区で確認されている。砂丘Ⅱにおいて12世紀後半に出現する溝は中世後半に砂丘Ⅰとを連結する基幹道路として継承され、太閤秀吉の町割まで、以後の道路整備の根幹となる。これらの契機は博多綱首の助成により聖福寺、承天寺の禅刹が相次いで建立されたことにある。南北朝時代には博多都市機能の中心は息の浜へと移るが、魅力ある博多の領地をめぐる諸大名の争いは激化し、度重なる戦火が博多を襲っていることは、戦国期の焼土層によっても証明される。その後、九州平定を遂げた秀吉による都市復興および町割が行われ、近世都市博多が幕を開ける。

<参考文献>

- 小林及他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』(九州大学出版会)1998年
- 吉岡秀敏「弥生時代から古墳時代の博多」(『法政』第2号)1993年
- 大庭康晴「中世都市遺跡の調査—博多」(『季刊考古学』第39号)1992年



第1圖 博多遺跡群位置圖 (1/25,000)



第2図 第109次調査区位置図 (1/1,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 概要

1) 調査経過

博多遺跡群第109次調査区は博多区博多駅前1丁目155-2に所在し、調査前の現況は駐車場で、標高は約6mであった。発掘調査は1998(平成10)年7月9日、重機による表土剥ぎ取りから開始した。表層のアスファルトを含め、全ての廃土処理を申請地内で行わざるを得なかったため、まず、調査対象地の約3/5に当たる南西部の調査を実施することとし、残地を廃土置き場とした。後述する各面の遺構および包含層について人力掘削を行い、最終面調査終了後の10月13日から重機によって廃土を反転し、北東部の表土剥ぎ取りを行った。その後残地の調査に着手し、同様に各面の遺構および包含層の掘削を行った。調査は11月30日に重機による埋め戻し、器材撤収をもって終了した。調査対象面積は「1-1.調査に至る経緯」で前述した様に496.0㎡であったが、アスファルト仮置き場の確保や周囲の安全対策、また法面掘削のため、実際の調査面積は301.1㎡であった。

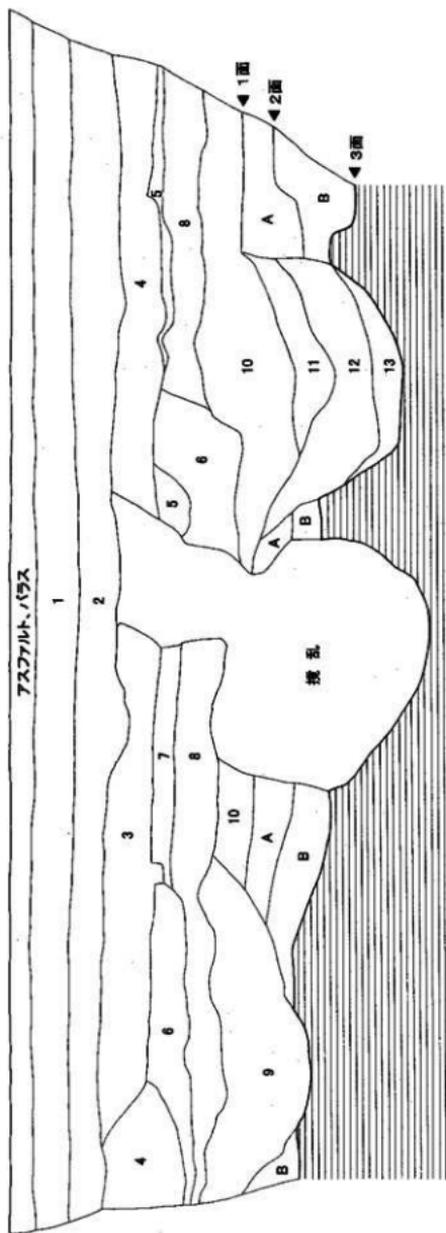
2) 調査の概要と基本層序

本調査区は博多遺跡群を形成する3列の砂丘のうち、最も内陸側の砂丘北東部の砂丘尾根線よりやや南東側に下った緩斜面上に位置している。この砂丘尾根は前述した博多1号墳から本調査区北西部を結ぶ線上にあるものと考えられる。

第3図は調査区北東壁面の土層図である。基本的な層序であるが、表層から8層までは近現代の客土で、5層に見られる焼土は戦災によるものであろう。その下層に広がる10層は近世の包含層で、瓦片を多数含んでいる。以下、A層、B層の包含層が砂丘基盤となる黄褐色砂層上に堆積する。A層は14～15世紀を上体とする遺物を包含する砂質がかった黒褐色土で、ほぼ水平に堆積する。その下層のB層は黄味がかった茶褐色砂質土で、古代から12世紀中頃の遺物を含むが、10～11世紀代の遺物は少量である。その下層は基盤となる黄褐色砂の砂丘面で南東側への緩い傾斜を有している。なお、本調査区内では顕著な整地層は認められなかった。今回の調査は重機によって10層途中までを剥ぎ取り、ほぼA層の上層までを人力によって下げた上で、遺構検出を開始した。標高約4.3m～4.5mを測るこの面を1面(第4図)とし、15～16世紀を主体とし近世に至る井戸、土坑、溝、石垣遺構等が確認できた。なお、1面には近現代の攪乱が多数及んでおり、遺構の遺存状況は良好とはいえない。続く2面(第5図)は標高約4.0m～4.2mを測るB層の上面に設定した。ここでは12世紀後半～14世紀代の井戸、土坑、溝、埋葬遺構等を検出した。3面(第6図)の調査はB層を除去した標高約3.6m～4.0mの基盤砂層上面で行ったが、多数の上面遺構の掘り込みが砂層面におよぶため、遺構の大半は遺存状況が不良であった。この3面では上面で検出遺漏した中世遺構の他に、古代の土坑、古墳時代の前方後円墳および方形周溝墓と考えられる周溝が確認できた。なお、弥生時代については包含層中において中期の遺物が少量出土したが、遺構については確認できなかった。

調査時の遺構番号については001から3桁の通し番号を遺構の種類に関わらず、ほぼ検出順に付した。その番号には欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっては原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。なお、今回は反転調査を実施したため、反転部にまたがる遺構の一部については検出面が合致しないものがあり、その都度付した遺構番号については今回の報告時に一方に統一させている。また、先行して調査を実施した南西部側では001～277(欠番あり)の遺構番号を、北東部側では301～429(欠番あり)の番号を用いている。人力掘削による包含層遺物についてはA層下面までを1面包含層遺物、B層出土遺物を2面包含層遺物として取り上

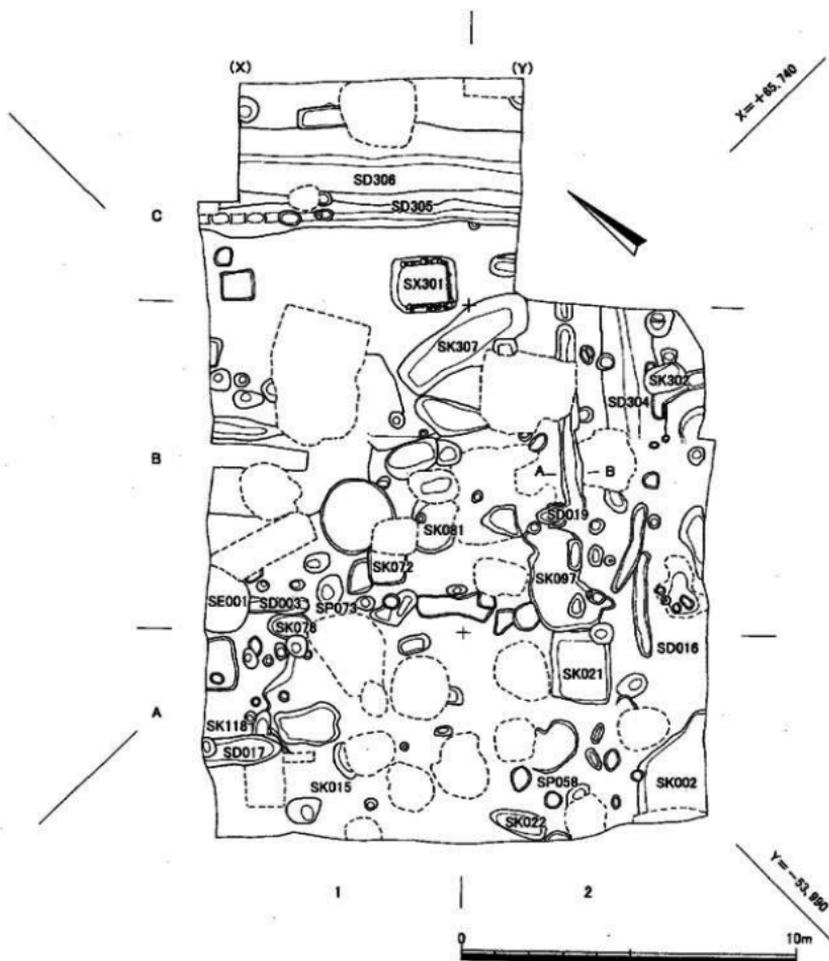
(X) H=6.4m (Y)



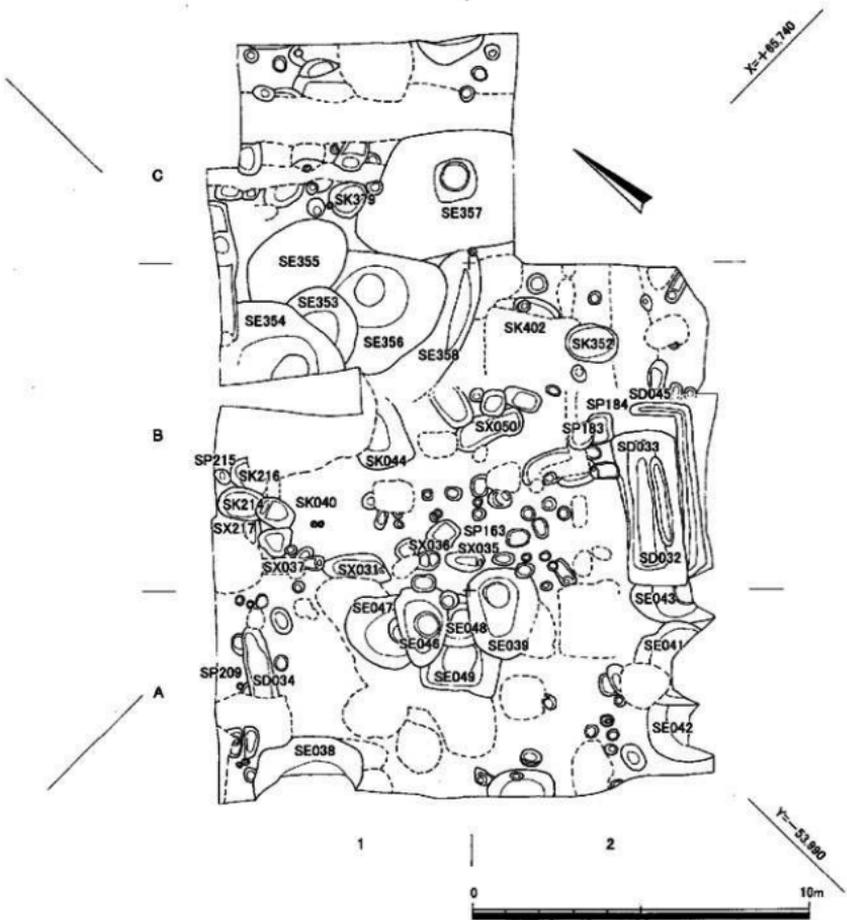
北東礫面土層

- 1 明礫色土
- 2 暗礫色土 (礫土、炭化物、互層含む)
- 3 暗黄礫色土
- 4 暗礫色土
- 5 礫土
- 6 黄礫色土 (下部には薄い炭化層あり)
- 7 黄礫色土上系黄礫色土の互層
- 8 暗黄礫色土
- 9 暗礫色土 (互片含む)
- 10 暗礫色土 (よりやや暗い)
- A 暗礫色土 (やや砂質)
- B 黄礫色土 (黄礫色土)
- 11 暗黄礫色土
- 12 暗礫色土
- 13 黄礫色土

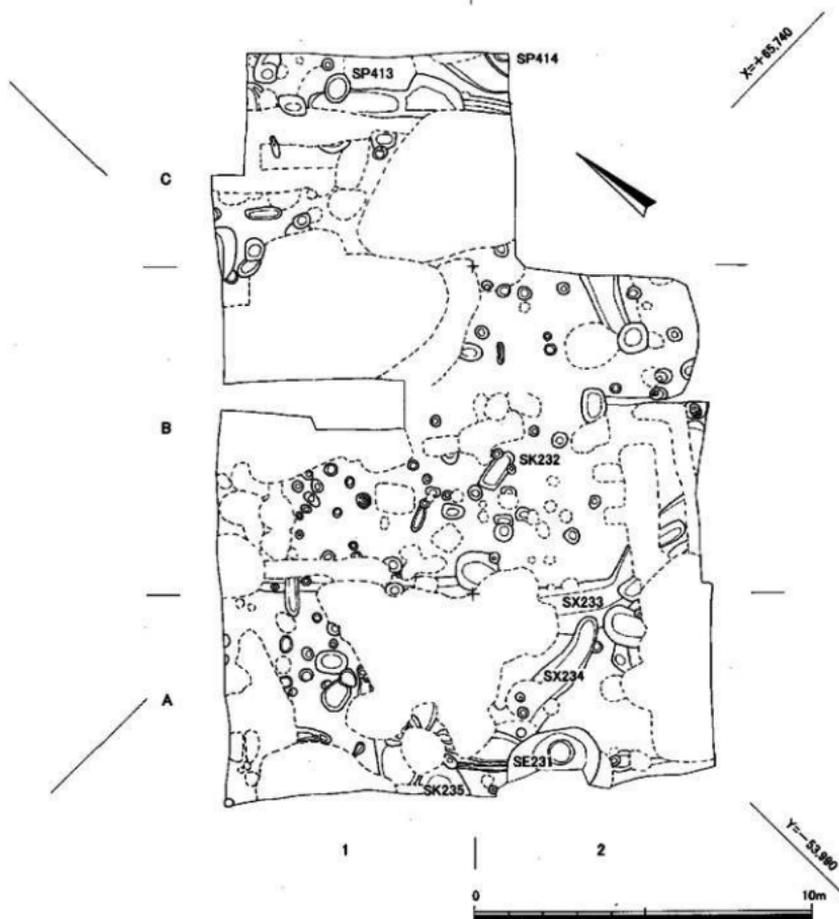
第3図 調査区北東礫面土層実測図 (1/40)



第4图 第1面全体图 (1/150)



第5图 第2面全体区 (1/150)



第6図 第3面全体図 (1/150)

げた。最終面での遺構検出時に出土した遺物については3面遺物としている。また本文中で、調査区内での遺構位置を示す際には調査時の座標軸を基準とした10m単位での英字と数字によるグリッド表記(第4・5・6図参照)を用いる。

2. 遺構と遺物

以下の報告にあたっては遺構種別に大別後、検出面順および遺構番号順に遺構および出土遺物の記述を行う。遺構種類は井戸(SE)、土坑(SK)、溝(SD)、その他の遺構(SX)に区分し、その他の遺構については埋葬関連およびそれ以外に細別している。また、その他の遺物としてピット、包含層、攪乱出土の一部の遺物を取りまとめて記載する。

1) 井戸(SE)

井戸の大半は2面で検出したもので、1面では近世に属するSE001、3面では2面での検出遺漏と考えられるSE231を確認した。2面検出の井戸は12世紀後半～14世紀代を主体とし、A-1・2区およびB・C-1区に著しい重複が見られる。井筒の確認し得たものには、近世の井戸瓦を用いたSE001を除き、木桶を用いている。また、井戸掘り方は円形もしくは楕円形を主体とし、一旦断面逆台形状に掘り込み、平坦面を築いた上で、更に円形坑を掘り下げて、井筒の最下部を据えているものが大半を占める。

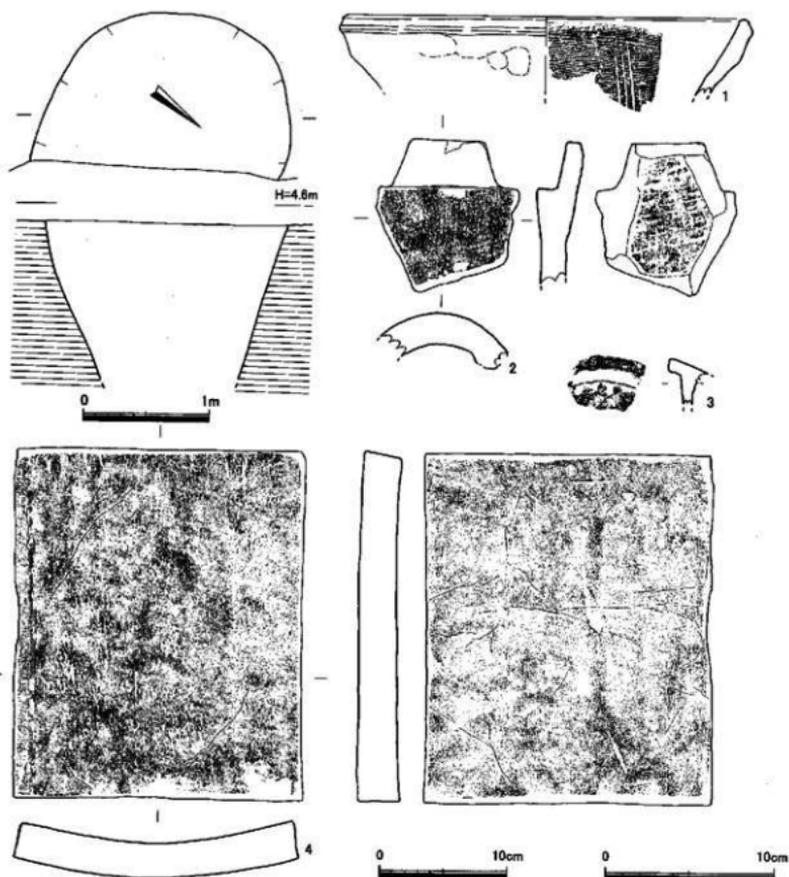
SE001(第7図) 1面B-1区で検出したが、掘り方の北西半部は調査区外に位置している。現況での径は約2mを測る。検出面より約2mを掘削した段階で、調査区壁面が崩壊し、それ以下の掘削を安全対策上中断したため、図化は未掘の状態のままで行っている。覆土のうち、井筒と考えられる灰褐色砂質土内には瓦が崩壊した状態で出土しており、瓦井戸と考えられる。

出土遺物(第7・8図) 1は瓦質の播鉢で、口縁部は玉縁状を呈する。外面は指オサエ、内面は刷毛目調整し、播目が認められる。2～5は瓦である。2は玉縁式の丸瓦で、凸面はナデを加えるが、縄目叩き痕が僅かに残る。凹面には縄痕の跡および布目が認められる。3は軒丸瓦片で、珠文を配する。4・5は井戸瓦で、順に長さ28.0、27.8cm、厚さ3.4、2.8cmを測る。4は幅23.1cmで、狭端部幅と広端部幅の差が見られないが、5の幅は狭端部が22.1cm、広端部が22.8cmを測る。共に凹面および凸面はヘラナデ調整である。6は管状土錘で、重量は5.36gを測る。井戸瓦から17世紀以降の遺構であると考えられる。

SE038(第9図) 2面A-1区の壁面際に位置する井戸である。大半は調査区外に延びており、北東側掘り方を確認できたのみである。現存での径は約3.2m、深さは1.6mを測る。上層付近では井筒の痕跡と考えられる褐色砂質土のプランを壁面際に検出できたが、安全上壁面を法面掘削したため、下端部での井筒の掘り下げは不可能であった。

出土遺物(第9図) 7は瓦器碗で、内外面をヘラ研磨する。8～10は白磁である。8はIV類の碗で、外面は露胎である。9は細く直立する高台を有するV類碗で、内面は櫛描きにより施文される。10は四耳壺と考えられる。短く直立する頸部と折り返しの口縁部を有する。灰オリーブ色の釉が施釉される。11・12は青磁碗で、11は龍泉窯系、12は同安窯系の共にI類に属する。11の見込みには片彫りによる草花文が描かれる。12は櫛目により施文され、外面体部下半は露胎となる。13は輪羽口片で、復元径7.2cm、復元孔径2.6cmを測る。端部は2次的加熱により灰色に変色する。他に回転糸切り底の土師器小皿・坏、瓦等が出土している。これらの出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

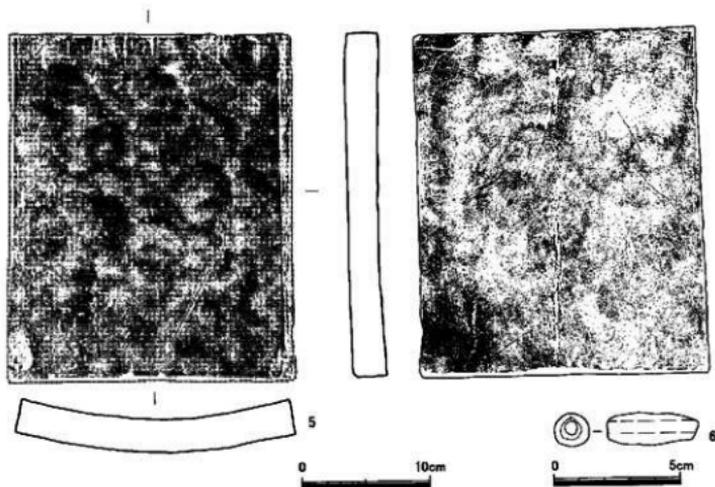
SE039(第10図) 2面A・B-2区で確認した井戸で、SE048・049を切る。南側壁面は攪乱されている。楕円形の掘り方を呈し、長径2.8m、短径2mを測る。検出面からの深さ1.7mに平坦面を作り、その北西寄りに井筒下部を据える径0.7～0.8m、深さ0.4mの円形の掘り込みを行っているが、木桶等は遺



第7図 SE001実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1は1/3、他は1/4)

存していない。覆土は暗褐色砂質土に黄褐色砂が多量に混じり、検出面からの深さ約0.8m付近からやや粘性のある暗褐色砂質土を呈する円形の井筒の痕跡が確認できた。この井筒の下部付近では礫の投棄が認められた。最下面の標高は約1.8mを測る。

出土遺物 (第10・11図) 14~34は土師器である。この内14~19は回転糸切り底の小皿で、19のみ小皿bである。小皿aは口径7.4~8.5cmで、平均8.0cm、器高は1.0~1.3cmで、平均1.1cmを測り、14・15には板状圧痕がない。19は復元口径7.3cm、器高1.7cmで、板状圧痕を有する。20~34は坏で、口径11.2~13.6cm、平均12.4cm、器高は2.3~3.2cmで、平均2.7cmを測り、27~34には板状圧痕が認められない。坏の半数以上は内底部までヨコナゲを施す。35~38・40は須恵質土器である。35は東播系の鉢で、口縁端

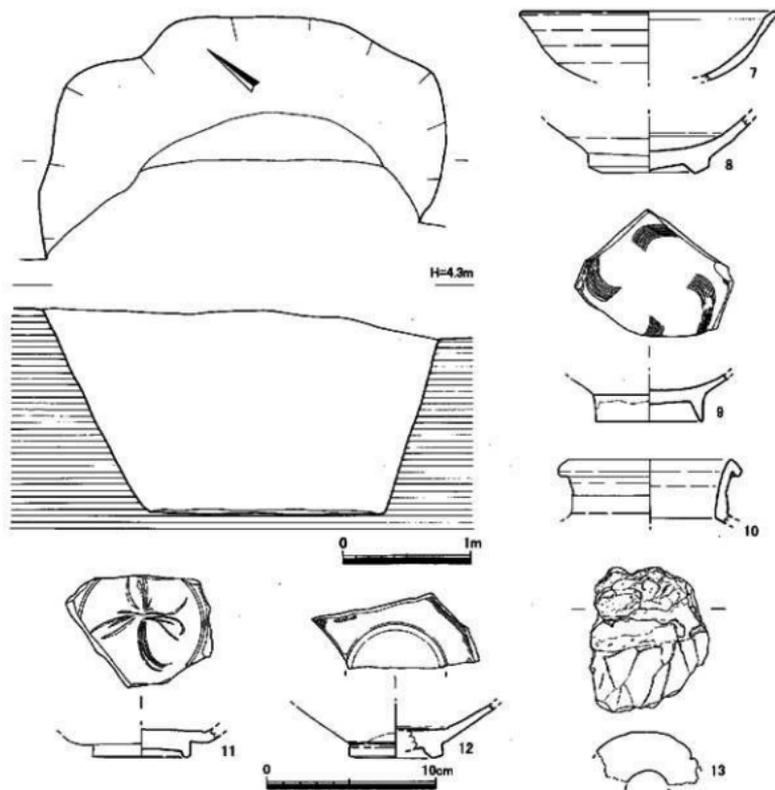


第8図 SE001出土遺物実測図(2) (6は1/2、5は1/4)

部を上方につまみ出し、ヨコナデを加える。36は強く外反する口縁部を呈する甕で、端部は面取りする。体部外面には格子目の叩き、内面には細かい刷毛目を施し、口縁部にはヨコナデを行う。やや軟質の37は槽鉢の底部で、内面に刷毛目調整後、播目を施す。外底部には板状圧痕が認められる。38は鉢もしくは甕の底部で、37と同様に板状圧痕を有する。40は壺で、ヨコナデによる器面の凹凸が著しい。39・41は中国陶器である。39はナデ肩の体部に細身の頸部が付き、その境界には段状の沈線が巡る。暗オリーブ色の釉が施される。水注であろう。41は三彩陶器の底部片で、緑釉を主体に白釉、黄釉が僅かに残る。42は白磁皿Ⅲ-1類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。43は龍泉窯系のⅢ類坏で、高台端部を除き全面に施釉される。見込みには魚文を貼付する。44は青白磁の瓶の口縁部と考えられるもので、端部を内面に折り込む。45は北宋代の銅銭、「嘉祐通寶」(初鑄年:1056年)である。以上の出土遺物から13世紀末~14世紀初頃の井戸と考えられる。他に平瓦、滑石製石鍋の細片、鉄澤1点等が出土した。

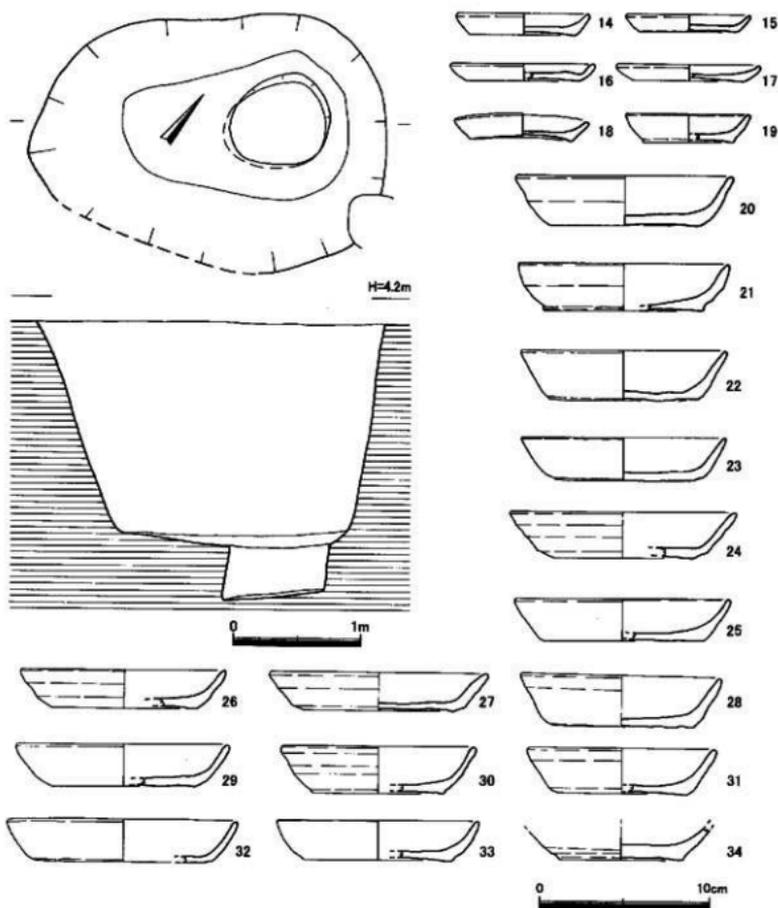
SE041 (第12図) 2面A-2区の壁面際で検出したSE042・043を切る井戸である。掘り方は円形を呈するものと考えられるが、西側壁面は攪乱され、南東側は調査区外に位置しているため、全容は不明である。現況での径は2.6mを測る。壁面には径約0.5mの井筒痕跡と考えられる暗灰褐色のやや粘性のある砂質土が掘り方のほぼ中央に確認できた。また、検出面からの深さ約1.4mを測る平坦面上の壁面際ではその井筒下部を掘る掘り込みを検出し、掘り下げを一部行ったが、壁面が崩落したため、それ以後の掘削は中断した。

出土遺物 (第12・13図) 46~50は回転糸切り底の土師器で、いずれにも板状圧痕を有する。この内46は小皿で、復元口径9.5cm、器高1.0cmを測る。47~50は坏で、口径14.6~16.3cm、器高2.6~3.0cmを測る。51は復元口径24.7cmを測る土師質の鑄付き足鍋で、支脚は欠損する。内傾する口縁部下には鈎が巡り、その下半以下には煤が付着する。なお、支脚欠損部にも煤の付着が認められることから、折



第9図 S1:038実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

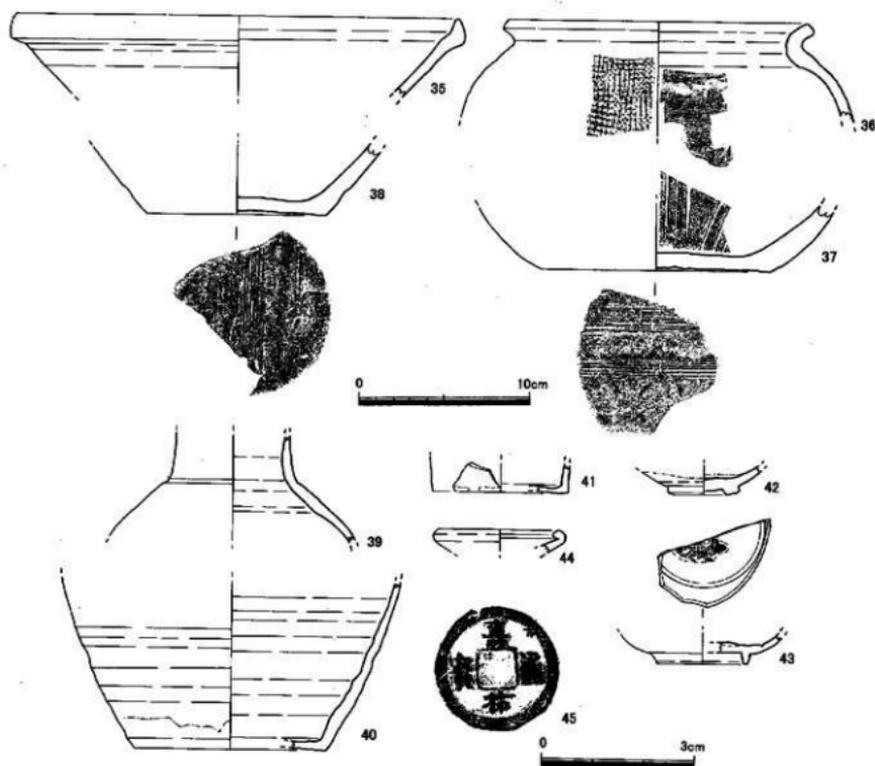
損後にも使用したことが伺える。内外面に細かい刷毛目を施すが、口縁部はヨコナデを加える。52～54は中国陶器である。52は一对の縦耳を付す壺の肩部片で、にぶい赤褐色を呈する胎土の外表面には暗褐色の釉を、内面には光沢のあるオリーブ黒色の釉を施す。53は壺の底部で、外面上端に淡黄褐色の釉が僅かに認められるが、他は露胎である。なお、内面には白色釉の飛沫が見られる。胎土は黒色砂粒を含む灰色を呈する。54は鐙形口縁の蓋で、オリーブ灰色の釉が体部下半および口縁部上面に施される。口縁部の釉は拭き取りがなされ、目跡が残る。55・56は白磁碗V類・Ⅷ類である。57は同安窯系青磁皿Ⅰ・1・b類で、見込みには片彫りおよび櫛状工具による施文がなされる。58～60は瓦である。58は須恵質の軒丸瓦片で、界線内には草花文を描く。59は玉縁式の丸瓦で、凸面には縄目の叩き、凹面には布目が残る。側面には分割時の切り込みが確認できる。60は淡黄橙色を呈する平瓦で、凹面、凸面ともにナゲ調整を施す。61は瓦質の塼で、厚さ3.2cmを測る。板状工具によるナゲを施す。以上の出土遺物からこの戸井は12世紀後半に比定されよう。



第10図 SE039実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3)

SE042 (第14図) 2面の調査区南端隅、A-2区に位置する。南東側は調査区外に延び、北東側は前述したSE041に切られるため、全容は不明である。検出面からの深さ約1.8mを測る平坦面には井筒を据える深さ約0.5mの円形の掘り込みを有するが、壁面にかかるため、1/4を検出したにとどまる。桶等の木質は遺存していない。なお、最下面の標高は1.5mを測る。

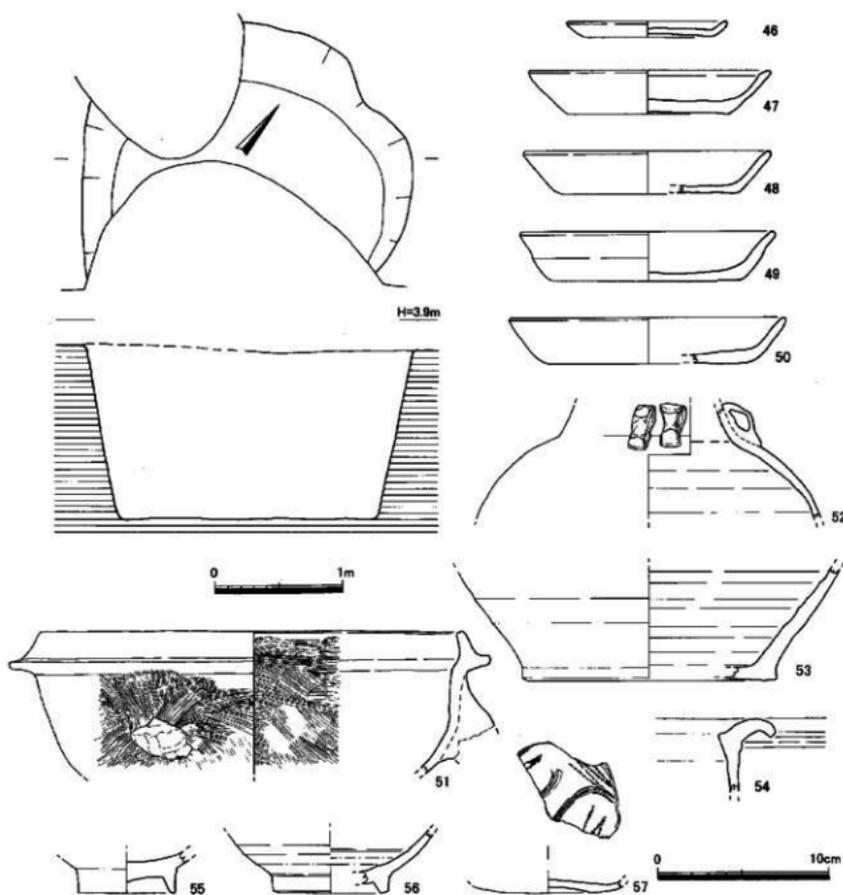
出土遺物 (第14図) 62・63は回転糸切り底上師器の小皿・坏である。順に口径9.2、14.6cm、器高1.5、3.1cmを測る。62の外底部には板状圧痕が認められる。64は中国陶器の壺底部である。暗赤褐色の胎上にやや茶味がかかった黒褐色の釉が施され、体部下半は露胎となるものの、釉の飛沫が見られる。65・66



第11図 SE039出土遺物実測図(2) (45は1/1、他は1/3)

は白磁碗のIV類・V類で、ともに体部下半は露胎である。67・68は龍泉窯系の青磁碗I類である。67は2条の圈線が巡る見込みに片彫りによる花文を描く。外底部には花押と思われる墨書が記されるが、不鮮明である。68の見込みには段状の沈線を有し、片彫りおよび櫛状工具により花文を施す。ともに灰オリーブ色の釉が高台内を除いて施釉される。69・70は同安窯系青磁碗である。69は口縁部を外反させるもので、外面には片彫りによる縦方向の施文を行う。オリーブ黄色の釉を内面および外面上半に施す。70は見込みに深い段状の沈線を配し、体部内面には櫛状工具による施文が僅かに残る。灰オリーブ色の薄い釉が内面に施される。71は須志質の丸瓦で、玉縁の端部を僅かに欠失している。内面には縄目の叩き、凹面には布目が見られる。また、凹面のほぼ中央部には穿孔途中と考えられる約1cm四方の釘穴が認められる。側面には分割時の切り込みが残る。以上の出土遺物から12世紀後半代の井戸と考えられる。

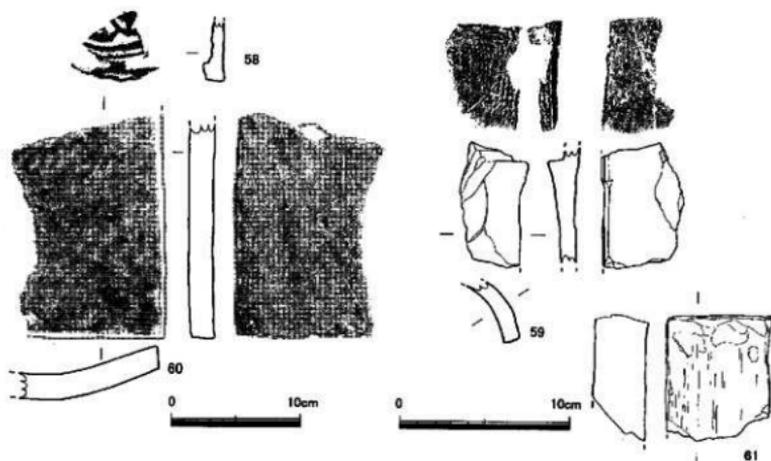
SE043 (第15図) 2面A・B-2区の調査区際で検出した井戸で、南西側をSE041、北東側をSD033・045に切られる。現況では掘り方は楕円形を呈するものと考えられるが、南東側は調査区外に位置するた



第12図 SE041実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3)

め、規模は不明である。検出面からの深さ約1.6mに平地面を作り、そのやや南寄りに井筒下部を据える径約0.8m、深さ0.6mの円形の掘り込みを有する。木桶等の木質は確認できなかった。最下面の標高は1.7mを測る。

出土遺物 (第15図) 72は中胴胸器の四耳壺である。黒色の粒子を含む灰白色の胎土に褐色の釉が外面および内面の頸部に施される。体部内面にはヨコナデを加えるが、青海波状の当て具痕が僅かに残る。73~76は白磁で、この内73・74はIV類碗である。74は見込みに沈線が巡る。75はVII類の碗で、部分的に高台まで施釉が及ぶ。見込みには幅広の段を有する。76はVIII-2類碗で、見込みの段内部の釉

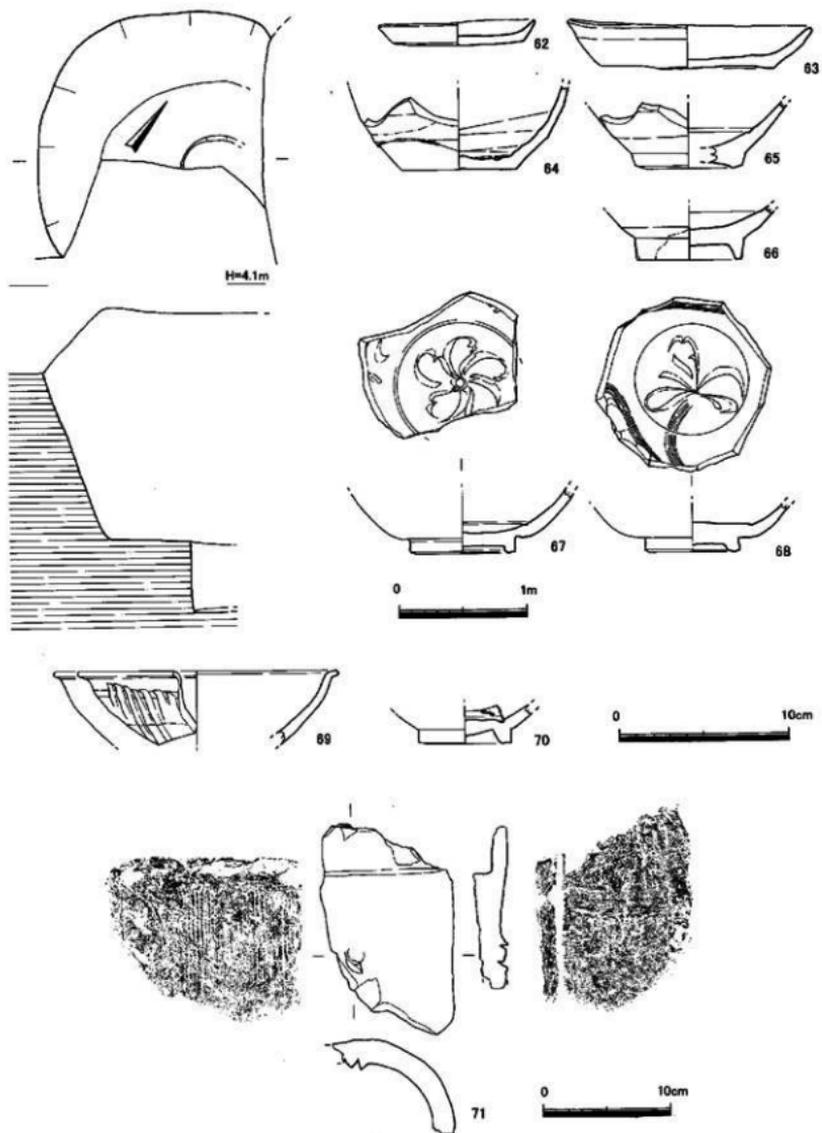


第13図 SE041出土遺物実測図(2) (61は1/3、他は1/4)

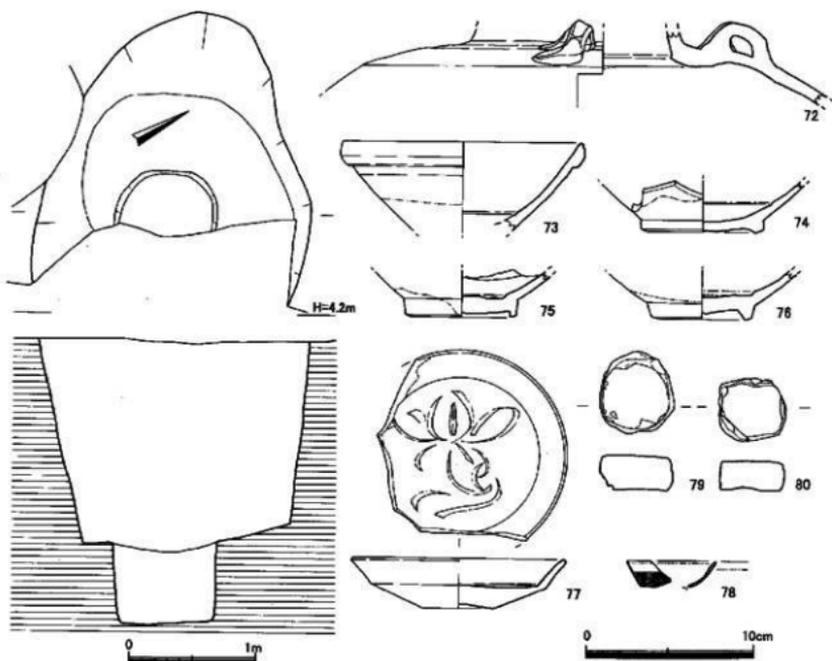
を輪状にカキ取る。77は龍泉窯系青磁Ⅰ-1・b類で、体部中位で屈曲する。見込みには片彫りにより花文を施す。外底部は軸カキ取りにより露胎となり、暗赤褐色を呈する。78は上層出土の口禿青白磁皿の細片である。体部の中位で緩く屈曲し、内面には型押しによる雷文および花卉文の施文を有する。79・80は平瓦を整形した瓦玉で、ともに図上面が凸面である。80は方形を意識した整形を加えている。裏面には布目が認められる。他に回転糸切り底の土師器皿・杯の細片、須恵質土器、滑石製品、瓦片が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE046 (第16図) 2面A-1区に位置し、SF047・048・049を切る。不整な槽円形の掘り方を呈し、長径2.4m、短径1.6mを測る。検出面からの深さ約1.6mに平坦面を作った上で、そのほぼ中央部に井筒下部を設置する径0.7m、深さ0.4mの円形の掘り込みを行う。その覆土はやや粘性のある暗灰褐色上で、有機質の腐植したものと考えられるが、木桶等は確認できなかった。最下面の標高は1.95mを測る。

出土遺物(第16図) 81~84は土師器環で、口径10.8~12.7cm、平均12.1cm、器高は2.4cmもしくは2.5cmで、平均2.5cmである。いずれも回転糸切り底で、83を除いて板状圧痕は認められない。82は内底部にヨコナデが及ぶ。85は復元口径25.8cm、器高9.2cmを測る東播系の須恵質鉢で、玉縁状の口縁部を呈する。底部から体部へはやや丸味をもって立ち上がる。外底部には回転糸切り痕が残る。86は古瀬戸前期の灰釉銅皿の細片で、ヘラ状工具による節目の端部が内面に見られる。口縁端部は強いヨコナデにより凹面をなす。87・88は中国陶器である。87は緑釉が外面に施され、陰刻による施文がなされる。88は蓋で、暗灰色の胎土に赤褐色の釉が外面に施される。口縁には沈線が巡る。89~91は白磁である。89はⅢ-1類皿で、見込みの軸を輪状にカキ取る。外底部には墨書が記される。90・91は口禿のⅨ類皿である。92~94は龍泉窯系青磁で、92・93は碗である。92は外面に錦蓮文を有する1-5・b類である。93は見込みには片彫りによる花文を有し、外底部には墨書が認められる。94はⅢⅠ-2・b類に属するもので、見込みには楕状工具による花文を描く。外底部の軸はカキ取る。95は青白磁皿の細片で、全



第14図 SE042実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (71は1/4、他は1/3)



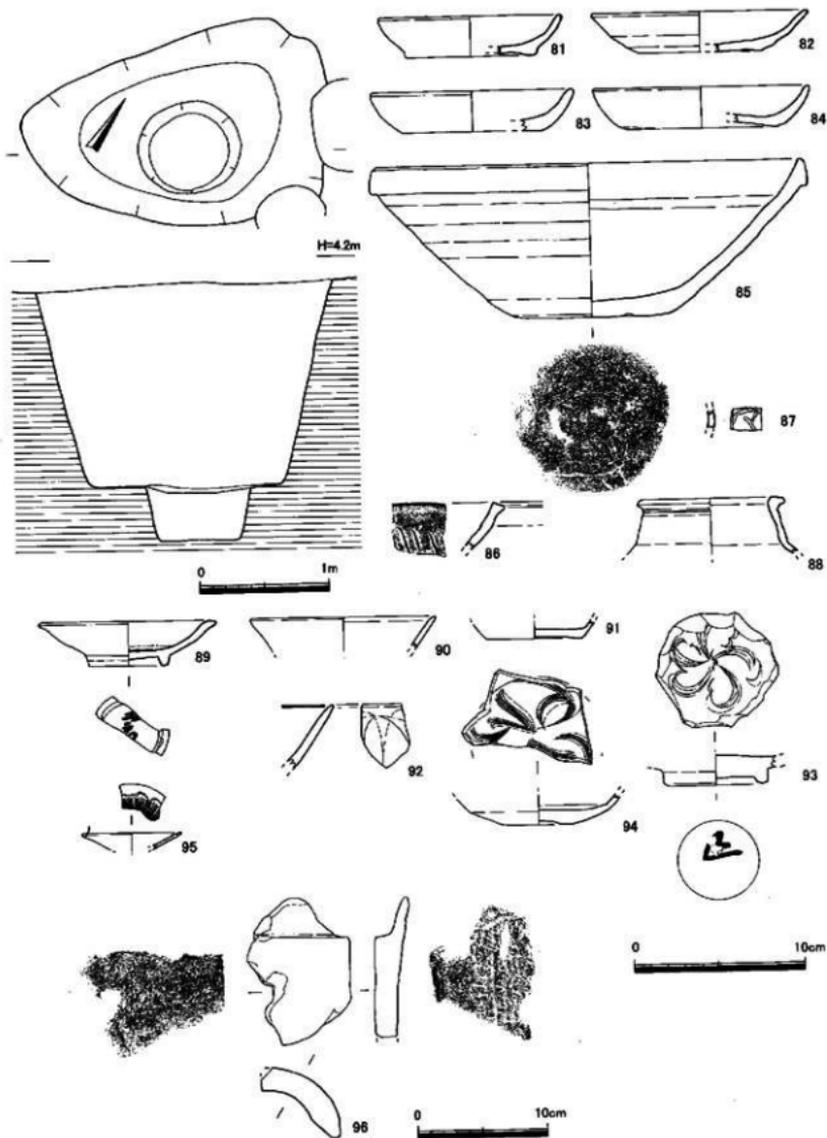
第15図 SE043実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

面に施釉がなされる。内面には型押しによる花卉文を有する。96は玉縁式の丸瓦で、凸面は縄目の叩きを粗くナデ消す。凹面には布目および横方向に縄紐の痕跡が認められる。やや軟質の焼成である。以上の出土遺物から13世紀末から14世紀初頭の井戸に比定される。他に滑石製の鍋の細片および鉄滓等が出土している。

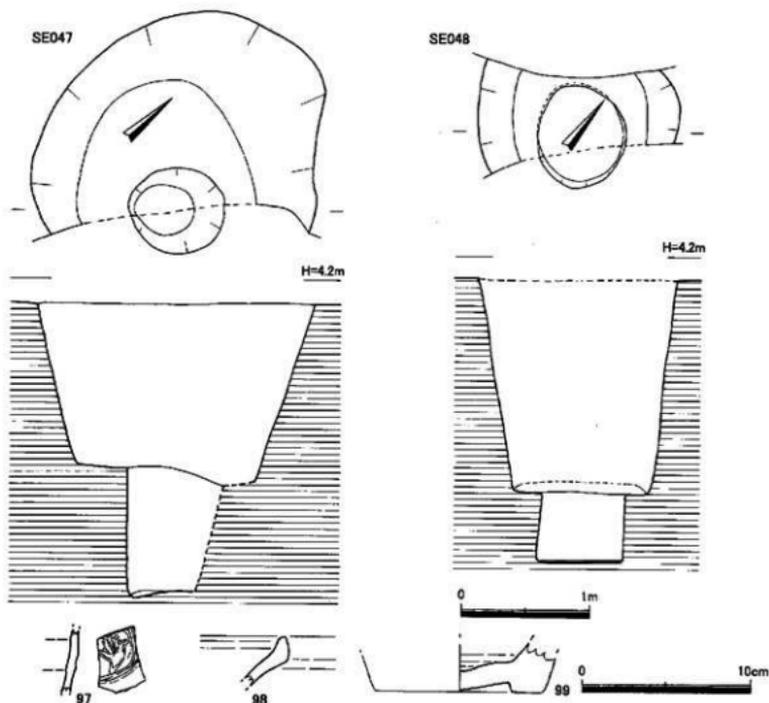
SE047 (第17図) 2面A-1区で確認した井戸で、SE046に南東側を切られる。現存で径約2.5mを測る円形の掘り方を有する。検出面から約1.4mに平坦面を作り、径約0.7m、深さ約1mの円形の坑を中央部に掘り込む。井筒下部を設置したものと考えられるが、木質は遺存していない。最下面の標高は約1.7mを測る。

出土遺物 (第17図97) 97は井筒出土の元代龍泉窯系の香炉と考えられる銅片で、花文を貼付する。貫入が多く見られる。他に回転糸切り底の土師器小皿、中国陶器、白磁碗V類、龍泉窯系碗I類等が出土しているがいずれも小片である。出土遺物は少量であるが、97より14世紀代の井戸に位置付けておきたい。

SE048 (第17図) 2面A-1・2区に位置する井戸で、SE049を切る。また、南東部および北西部をそれぞれSE039・046に切られるため、掘り方の大半は遺存しない。現況では径約1.6mを確認し得た。検出面からの深さ約1.7mに狭い平坦面を作り、その中央部に径約0.7m、深さ約0.6mの掘り込みを有する。井筒を掘えたものと考えられるが、木桶等は確認できなかった。なお、最下面での標高は約1.7m



第16図 SE046実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (96:2/4、他は1/3)



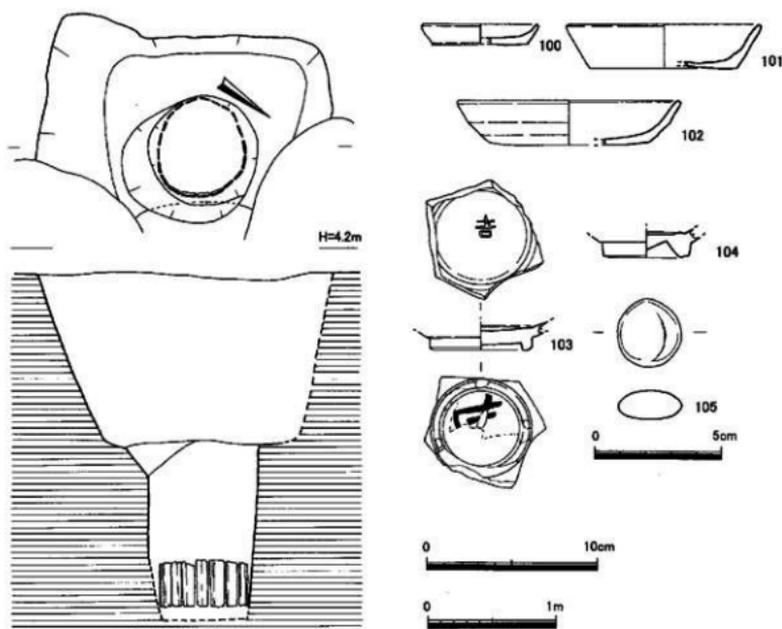
第17図 SE047・048実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

を測る。

出土遺物(第17図98-99)ともに井筒掘り込みから出土したものである。98は東播系の須恵質針で、口縁端部を上方へつまみ出す。内外面にヨコナデを加える。99は中国陶器の壺底部と考えられる。羽茶褐色の胎土に灰オリブ色の釉が内面にかかる。他に回転糸切り底の土師器坏、白磁、同安窯系青磁碗I類等が少量出土しているが、細片が多い。98や遺構重複状況より13世紀後半～末の井戸と考えられる。

SE049(第18図) 2面A-1・2区で確認した井戸で、SE039・046・048に北東部を切られている。掘り方の遺存する南西側での平面プランは隅丸方形を呈し、その幅は約2.2mを測る。検出面からの深さ約1.35mに平坦面を作り、更に井筒を据える径約1m、深さ推定約1.4mの円形の掘り込みを行う。その下部には幅10cm前後、厚さ約1cmの板材21枚を用いた径約70cmの木桶が高さ35cm程度遺存していた。その下端の標高は約1.2mを測る。

出土遺物(第18図) 全て井筒掘り込みから出土した遺物である。100～102は回転糸切り底の土師器で、101は小皿、102・103は坏である。小皿は復元口径6.9cm、器高1.2cmを測り、板状圧痕はない。坏

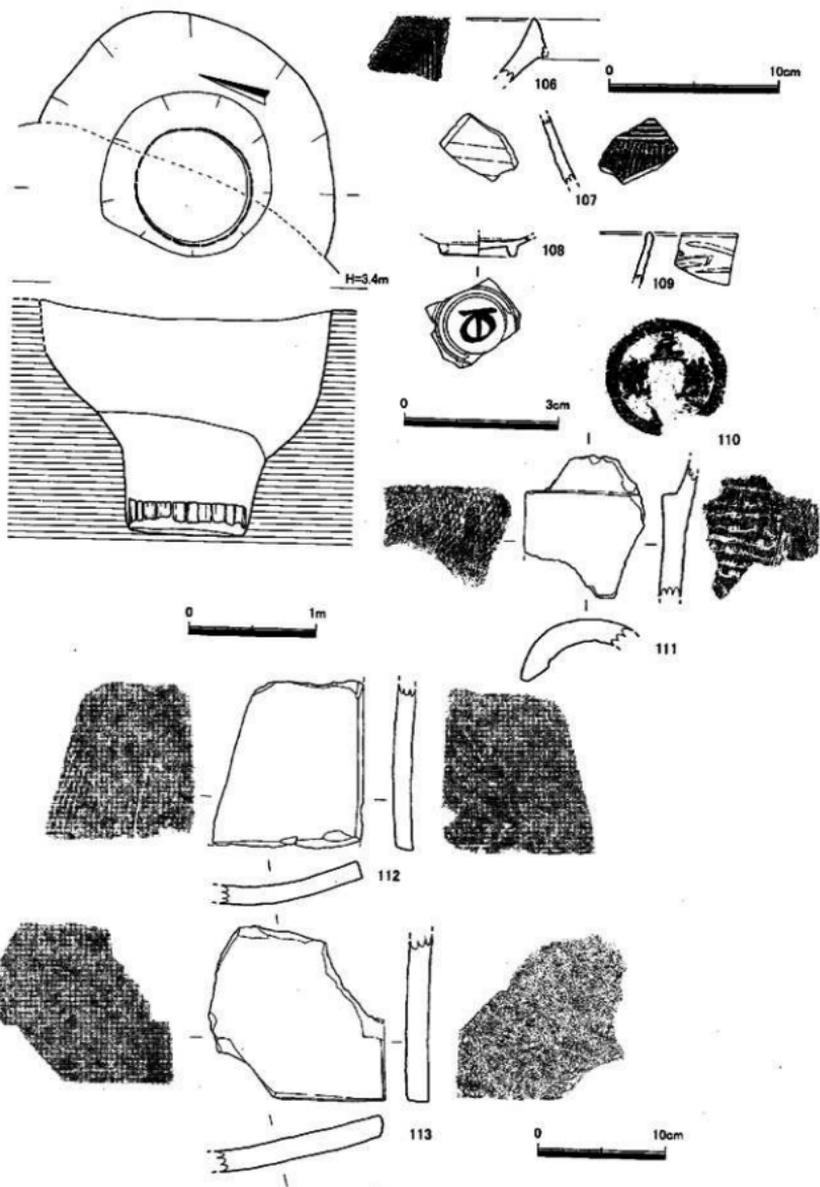


第18図 SF049実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (105は1/2、他は1/3)

の口径は順に11.5、13.2cm、ともに器高は2.7cmで、板状圧痕を有する。103は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、見込みには「吉」字を陽刻し、外底部には墨書が記される。軸はくすんだ緑灰色を呈し、一部は高台内まで施軸が及ぶ。104は同安窯系青磁碗Ⅰ類で、見込みには段を有する。外面は露胎である。105は基石と考えられる石製品で、全面を研磨によって平滑にする。径2.7cm、厚さ1.2cmを測る。他に白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、瓦片が出土している。土師器法量および遺構重複関係から13世紀後半の井戸と考えられる。

SE353 (第19図) 2面B-2区で確認したが、遺構上半部が攪乱されることから1面遺構に帰属する可能性もある。SE354に西側の大半を切られ、SE355・356を切る。掘り方の中央部には井筒下部を据える径約1.3m、深さ0.9mの掘り込みを有する。その下部には幅10cm前後、厚さ約1cmの板材26枚を組み合わせた木桶が不良ながら遺存する。掘り込み下端の標高は約1.4mを測る。

出土遺物 (第19図) 106は備前焼播鉢で、口縁部下端を欠失している。内面には6条の摺目が残る。107は李朝粉青沙器瓶の肩部片で、4条の白象嵌および縄縷文を施す。108は上層出土の白磁皿Ⅲ-1類で、見込みの軸を輪状にカキ取っている。外底部には墨書が記される。109は明代の青磁碗で、口縁部には片影りによる雷文を施す。110は北宋代の銅銭、「元豊通寶」(初铸年:1078年)である。なお、106・107・109・110は井筒内より出土した。111~113は上層出土の瓦である。111は玉縁式の丸瓦で、凸面胴部は縄目叩き、玉縁面はヨコナデを施し、凹面には布目および縄紐痕が残る。側縁部は面取りす



第19図 SE353実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (110は1/1、106~109は1/3、他は1/4)

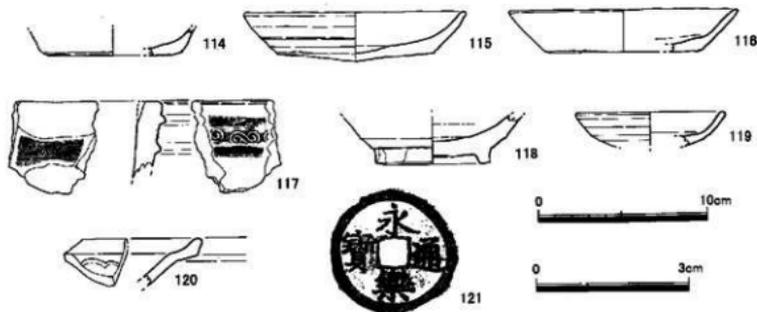
る。112・113は平瓦で、ナデ調整を加えるが、コビキの痕跡が残る。これら出土遺物から15世紀前半の井戸に比定される。他に回転系切り底の土師器小皿、龍泉窯系および同安窯系青磁碗Ⅰ類、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類碗等が出土している。

SE354 (第21図) B-1区で確認した井戸である。遺構のほぼ中央部に調査区反転部が位置しているため2分割の掘削となった。反転前の検出を行った遺構の南西部は1面において確認し得た。その際には溝の肩との認識からSD012として遺構を登録した。また、反転後の1面遺構検出時においては明瞭なプランが把握できず掘削を保留したため、遺構北東部は2面に確認した上で、掘削を実施した。また、この段階で井戸であることが判明したため、SE354の番号を新規に登録した。掲載図は1・2面で確認状況を合成作成したものである。なお、遺構中央部の未掘削部は南西部調査時に設置した昇降用スロープの法面である。この井戸の掘り方は大形の不整な円形を呈するものと考えられ、現況では径約5.2mを測る。1面検出面からの深さ約2.6mに平坦面を築き、掘り方の北東寄りに井筒下部を据える径1m前後の円形の掘り込みを行う。数cmの掘削を行ったが、法面下に位置するため、安全上、東半部のプラン確認および図化するとどめた。掘り方覆土は黄褐色砂質土と褐色砂質土の互層をなす。

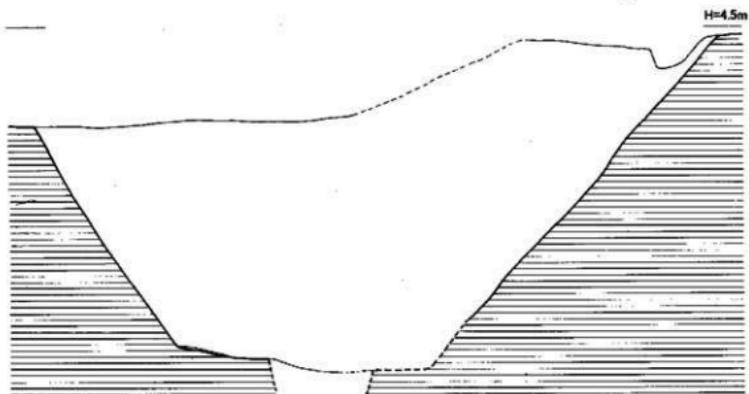
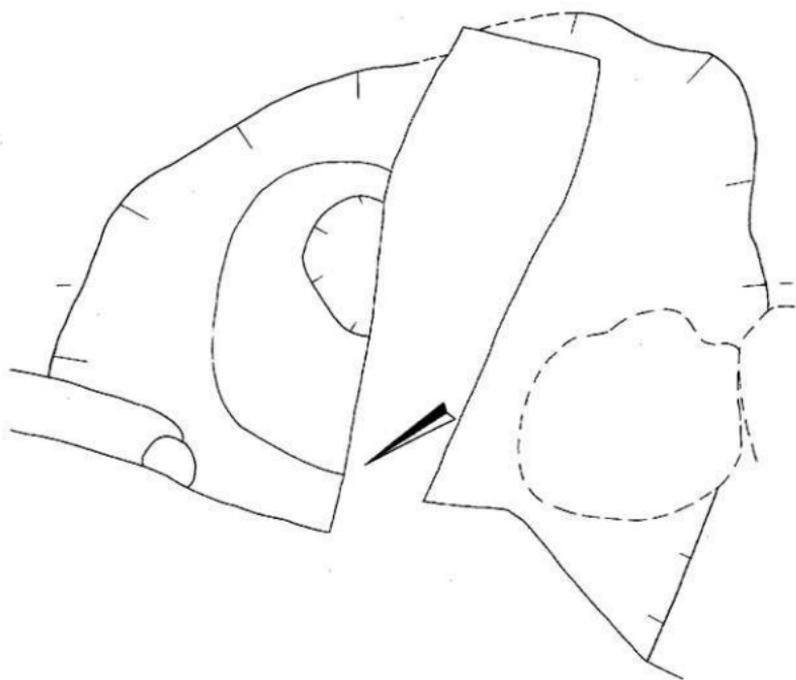
出土遺物 (第20図) 114~116は回転系切り底の土師器で、115には板状圧痕が認められる。114は小皿、115・116は坏である。順に坏復元口径は13.0、13.4cm、器高は3.0、2.5cmを測る。119は瓦質土器火舎で、口縁下に断面三角形の2条の突帯を貼付し、その間には「S」字状の渦文をスタンプする。外面はヨコナデ、内面は刷毛目を施す。118は白磁碗Ⅷ類で、見込みの軸をカキ取る。119は白磁Ⅷ類と考えられ、体部中位で鉤く屈曲し、見込みは平坦となる。120は龍泉窯系青磁Ⅳ類の盤で、銜口の口縁部を呈する。内面には片彫りによる施文が認められる。121は明代の銅銭、「永樂通寶」(初铸年:1408年)で、平坦面付近で出土した。他に備前焼、同安窯系青磁、青白磁合子等の細片が出土した。遺構の時期は15世紀代と考えられる。

SE355 (第22図) 2面B・C-1区で検出した。不整な増円形の掘り方を呈するものと考えられるが、南西側をSE354・355に切られるため、掘り方北東側の掘鉢状に傾斜する壁面および検出面からの深さ約1.5mに作られた平坦面の一部が遺存する。また、SE356を切っている。井筒はSE354・355内においても確認し得なかった。覆土は黒灰褐色砂質土を主体とする。

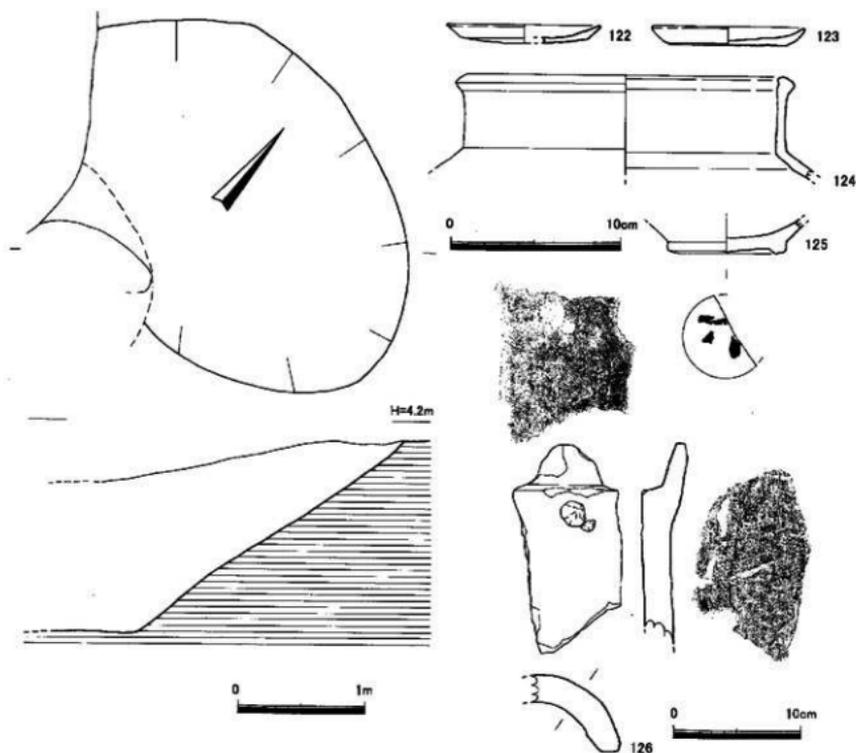
出土遺物 (第22図) いずれも上層出土の遺物である。122・123は土師器小皿である。122は回転へ



第20図 SE354出土遺物実測図 (121は1/1、他は1/3)



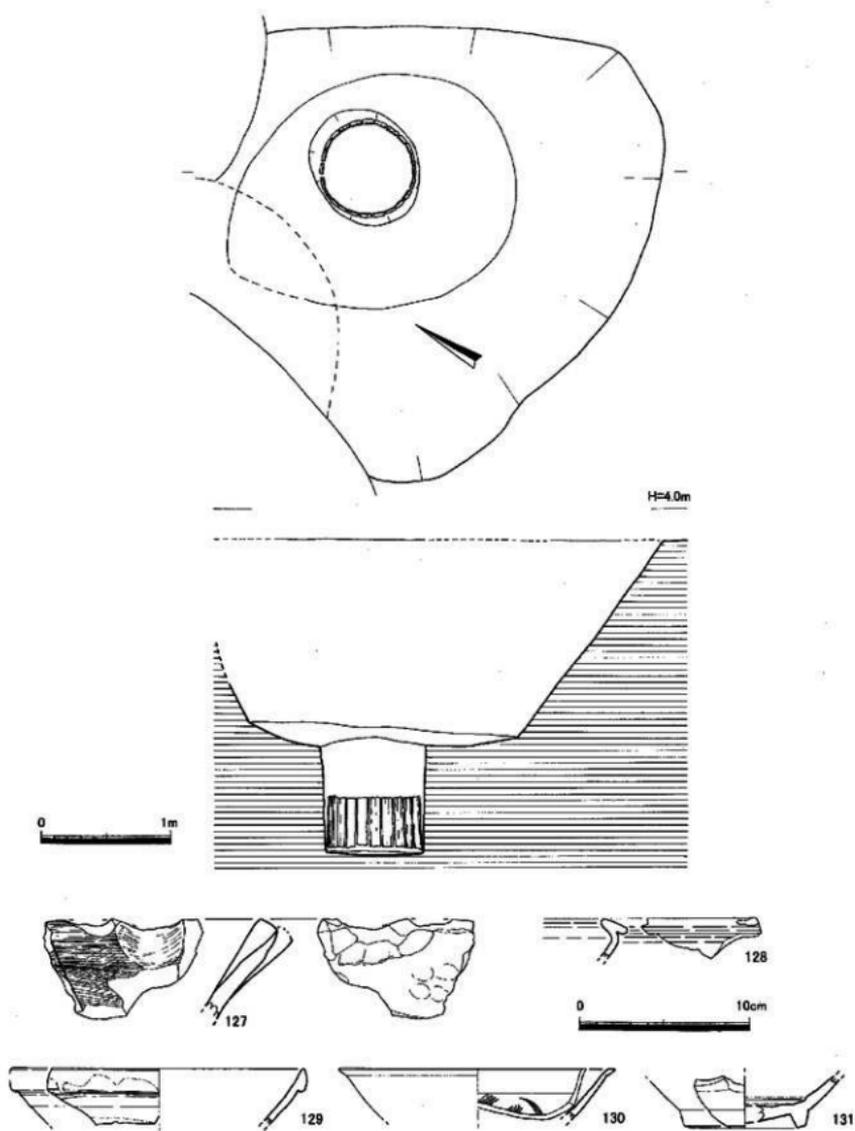
第21网 SE354実測図 (1/40)



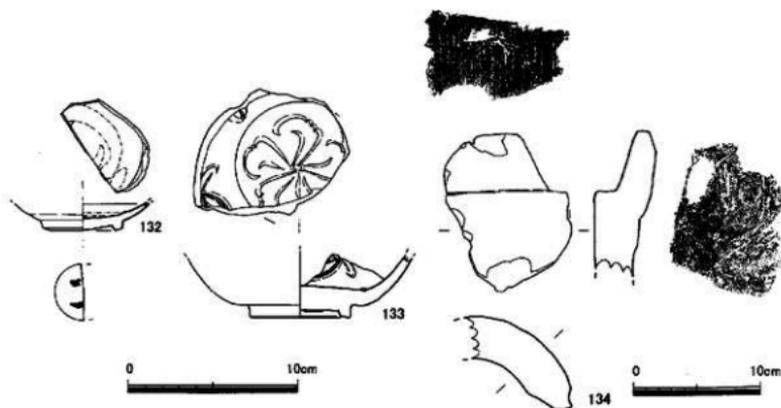
第22図 SE355実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (126は1/4、他は1/3)

ラ切り底、123は回転糸切り底で、板状圧痕を有する。復元口径はともに9.1cmで、器高は順に1.1、1.0 cmである。124は黄釉陶器の壺で、直立する頸部に断面蒲鉾状の口縁部が付く。砂粒が多量に混じる灰色の胎上に灰オリーブ色の釉を施す。内面の肩部の釉は薄くかけられる。125は白磁碗IV類である。外底部には墨書が認められる。126は玉縁式の丸瓦で、凸面は縄目叩きをナデ消す。凹面には布目が認められ、側縁部を面取りする。図化し得た出土遺物からは12世紀中頃の遺構と思われるが、後述する遺構との前後関係から14世紀代の井戸と推測される。

SE356 (第23図) 2面B-1区で確認した井戸で、SE353・354・355に切られ、SE357・358を切る。現況では掘り方は不整な円形もしくは楕円形を呈し、径約3.7mを測る。検出面からの深さ約1.6mに平坦面を作り、そのやや北側に井筒下部を掘る径、深さともに約1mの円形の掘り込みを有する。その下半には幅7～8cm、厚さ1cm程度の板材24枚を組み合わせた大柄が倒立状態で確認された。高さ約0.4mが比較的良好に遺存する。下端の標高は約1.3mである。



第23図 SE356実測図 (1/40) および山上遺物実測図 (1) (1/3)

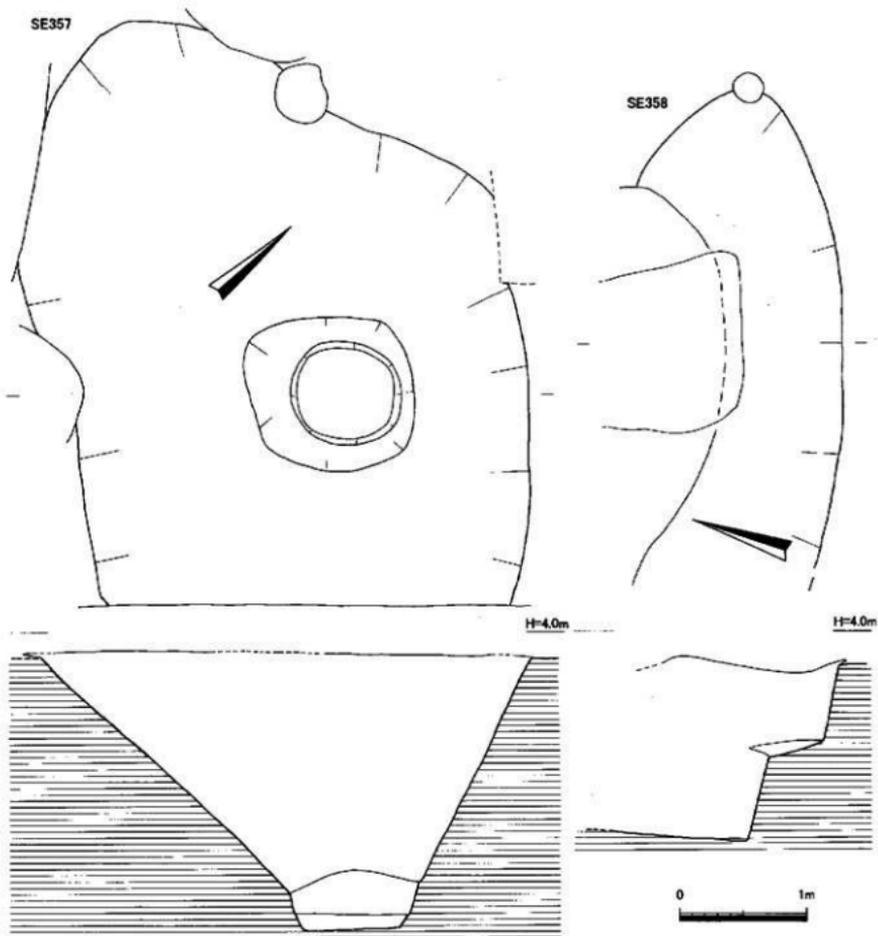


第24図 SE356出土遺物実測図(2) (134は1/4、他は1/3)

出土遺物(第23・24図) 127は瓦質土器播鉢の口縁片口部である。外面はヨコナゲ後、指オサエで片口を作り出す。内面には細かい刷毛目を施し、撞目が1条のみ遺存する。128は中国陶器の平鉢で、口縁部を折り返し、外傾させる。やや赤味のある淡茶褐色の胎上に灰オリーブ色の釉が施される。口縁部上面には目跡が残る。129～132は白磁で、129～131は碗である。129は玉縁状の口縁部を呈するIV類で、体部下半は露胎である。130は口縁端部を水平に引き延ばすV-4類に属するもので、内径の上半には浅い沈線が巡り、櫛状工具による施文がなされる。131は見込みに段を有し、その内側の釉を輪状にカキ取る碗V類である。132は皿Ⅲ-1類である。釉のカキ取りは粗雑で、輪状の内外の一部に釉ハギが及ぶ。外底部には墨書が記される。133は龍泉窯系青磁碗I類である。体部内面および貫人の多い見込みに片彫りによる花文が描かれる。高台壘付きまで施軸される。134は玉縁式の丸瓦である。凸面胴部は縄目叩きを平滑にヘラナゲし、玉縁面はヨコナゲ調整を行う。凹面には布日が残り、側縁部および玉縁面には面取りを行う。須恵質の焼成である。他に瓦質土器火舎、黒軸天目碗の細片等が出土している。14世紀代の井戸と考えられる。

SE357(第25図) 2面C-1・2区に位置し、SE356・358およびSK379に切られる。掘り方の南東部は調査区外に位置するが、不整な楕円形を呈するものと考えられ、現況では長径4.7m以上、短径3.9mを測る。壁面は検出面から深さ約1.9mまで播鉢状にすぼまり、ほぼ中央部には井筒を据えたと考えられる径約0.9m、深さ約0.2mの浅い円形の掘り込みを有する。暗灰色のやや粘性のある覆土を呈するが、木質は遺存していない。その下端の標高は約1.6mを測る。

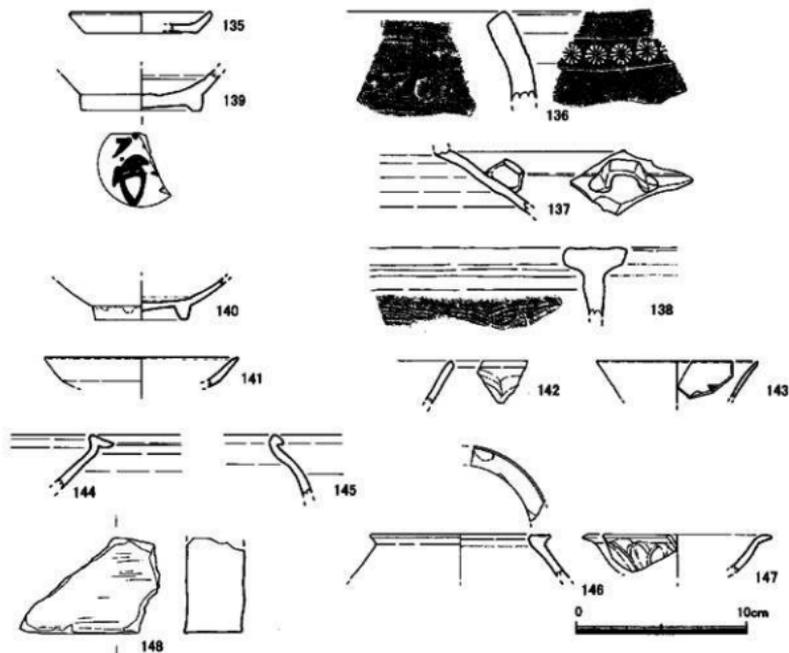
出土遺物(第26図135～143) 135は井筒内出土の土師器小皿で、復元口径8.5cm、器高1.2cmを測る。回転系切り底で、板状正痕を有する。136は瓦質土器火舎の口縁部片である。外面はヘラ研磨調整し、2条の沈線間に菊花文を印刻する。内面はヨコナゲを施すが、横方向の刷毛目が残る。137・138は中国陶器である。137は褐釉の壺で、横耳を貼付する。頸部下には沈線が1条巡る。内面の釉は薄く施される。138は「T」字状の口縁部を呈する壺で、赤褐色の粗い胎土にオリーブ灰色の釉がかけられるが、口縁部上面は釉を拭き取る。内面には青海波状の当て具痕が残る。139～141は白磁である。139はIV-1類碗で、体部下半に段状の沈線を有する。外底部には墨書が記される。140は見込みの釉を輪状にカキ



第25図 SE357・358実測図 (1/40)

取るⅦ類碗である。141はⅨ類、口禿の皿である。やや青味のある白色の釉を施す。142は体部外面に鎧蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗1-5・a類の細片である。143は口禿の青白磁で、小振りな碗であろう。櫛状工具による施文が内面に見られる。以上の出土遺物から13世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

SE358 (第25図) 2面B-1区で検出した井戸である。北側の大半をSE354・356に切られるため、詳細は不明である。南側の壁面には検出面からの深さ0.7mに狭いテラスを有し、更に0.7mの深さで平

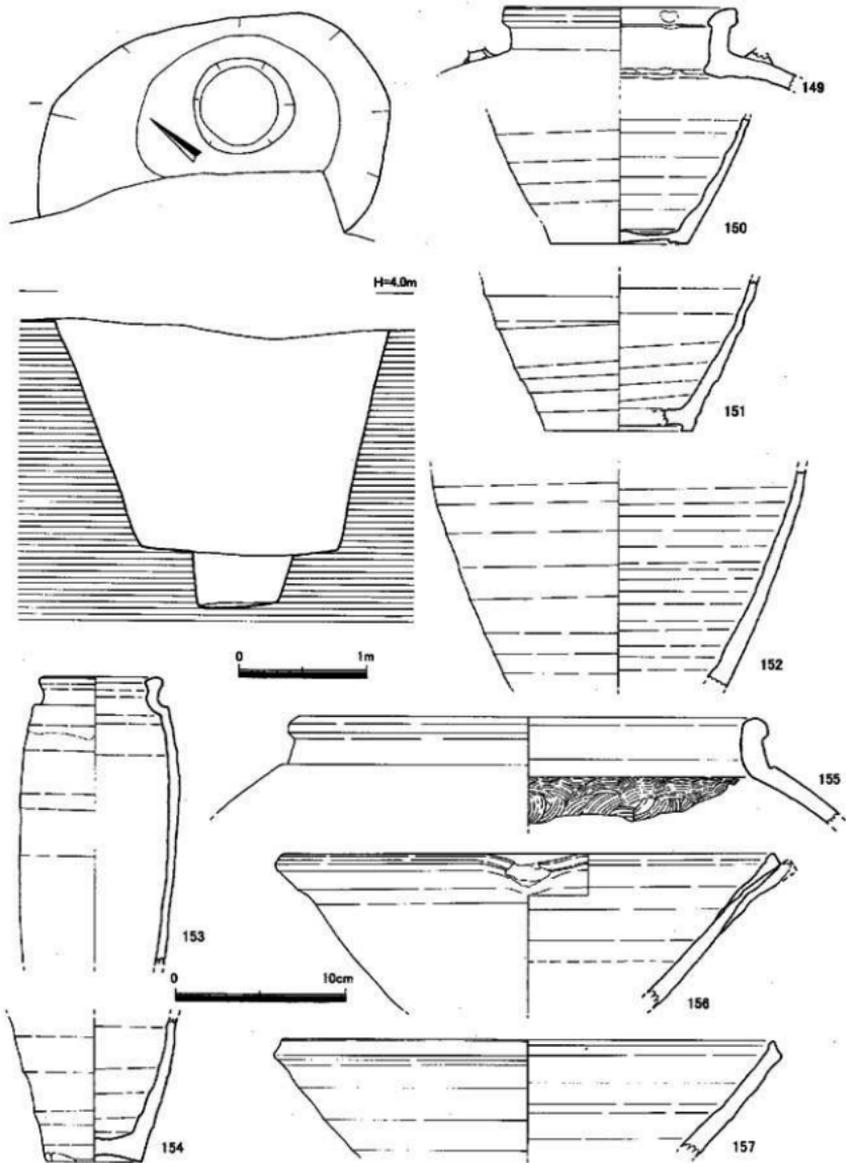


第26図 SE357・358出土遺物実測図 (1/3)

坦面となる。井筒設置の掘り込みは現況では確認できなかった。

出土遺物 (第26図144~148) 144~146は中国陶器である。144は口縁部を折り返す鉢で、端部は尖り気味に収める。灰色の胎土に灰オリブ色の釉がかけられる。口縁部上面には目跡が見られる。145・146は壺で、145口縁部は丸く折り返す。肩部には沈線が1条巡り、耳の剥落した痕跡がある。暗灰色の胎土に淡褐色の釉が内外面に施される。146は口縁部を水平に作り、頸部が大きく開く。淡灰色の緻密な胎土の内外面に灰オリブ色の釉を施軸する。内面の釉は薄くかけられ、口縁部の上面には目跡が認められる。147は龍泉窯系Ⅲ類の坏である。口縁部を外反させ、体部外面には鋪蓮芥文を施す。淡緑色の釉が内外面に施軸される。148は厚さ3.4cmを測る瓦質の埴である。他に回転糸切り底の土師器小皿、須恵質土器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、龍泉窯系青磁Ⅰ類等の細片が出土している。以上の出土遺物から13世紀後半頃の井戸と考えられる。

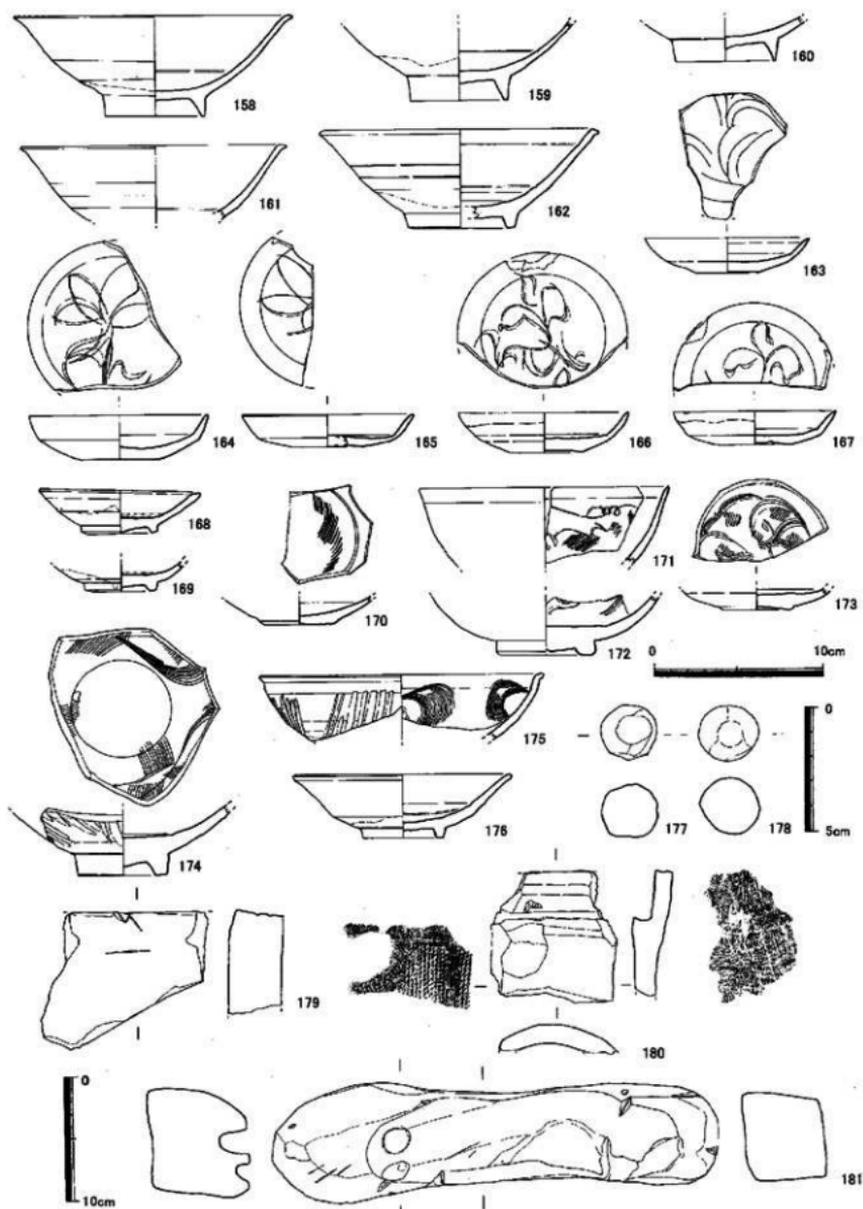
SE231 (第27図) A-2区の3面で確認したが、出土遺物から2面での検出遺漏と考えられる井戸である。南西側は調査区外に位置するが、現況では掘り方は楕円形を呈するものと考えられ、径約2.8mを測る。検出面からの深さ約1.8mに平坦面を築き、そのほぼ中央に井筒下部を据える径0.8m、深



第27図 SE231実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1) (1/3)

さ0.4mの円形の掘り込みを有するが、木桶等は遺存しない。その下端の標高は約1.5mを測る。検出面から深さ約0.5mの覆土上面において暗灰色を呈する円形の井筒痕跡を確認し得た。出土遺物の取り上げはその面までの出土遺物を上層、以下の掘り方覆土出土遺物を下層、井筒痕跡内および下面での掘り込み内の出土遺物を井筒内とした。

出土遺物(第27・28図) 149～155は中国陶器で、149を除いて井筒内出土である。149～154は壺である。149は下層出土の褐釉四耳壺で、短い頸部に断面方形状の口縁部が付き、内面に鈍く突出する。縦耳は基部のみが遺存する。砂粒を多量に含む明灰色の胎土に茶褐色の釉を施すが、剥落が目立つ。150～152・154には灰オリーブ色の釉が内外面に施釉される。150・154の胎土は黒色の砂粒を含む灰色で、150は体部下半の底部近くに、154は外底部に目跡を有する。151・152の胎土は灰味がかった淡赤褐色土を呈する。153は短頸壺で、長胴の胴部から明瞭な段をもって短く直立する頸部へと続く。内傾する口縁部の上面には目跡が残る。胎土は灰褐色を呈し、内面および外面の口縁部から肩部にかけて暗オリーブ色の施釉がなされるが、体部上半の一部に釉垂れが見られる。155は下層出土の甕である。肩部には段を形成し、短い頸部に玉縁状の口縁部が付く。体部内面には青海波状の当て具痕が認められる。胎土は砂粒が多量に混じる暗赤褐色で、内外面に暗褐色の釉が施される。156・157は東播系の須恵質鉢で、共に復元口径は29.8cmを測り、内外面をヨコナデ調整するが、別個体である。156は片口が遺存し、口縁上端を鈍くつまみ出す。157は156に比して端部のつまみ出しが大きく、上方へ突出する。共に井筒内出土であるが、156は上層資料と接合する。158～169は白磁で、158を除いて井筒内出土である。この内158～161は碗V類で、細く直立する高台を有し、外底部は露胎となる。158・161は口縁端部を短く外反させ、水平にする。158・159・161の体部内面下半に鈍い沈線が巡る。158は上層出土である。162は碗VII類で、体部内面の上位および下位にそれぞれ沈線を有し、見込みの釉を輪状にカキ取る。口縁部は平坦にする。163～169は皿で、この内163～167はⅡ-1類に属するものである。体部中位で鈍く屈曲し、その内面には沈線が巡る。見込みには片彫りもしくは線彫りによる草花文を施す。また、外底部は釉を削り取るため露胎となる。164・166には黄味がかった白色の釉がかけられ、貫入が多く認められる。168・169はⅢ-1類皿で、低い高台を有し、見込みの釉を輪状にカキ取る。灰白色の釉が施されるが、体部下半以下は露胎である。170は上層出土の青白磁皿で、底部は深いヘラ削りにより高台状を呈する。見込みの沈線内には櫛状工具による施文がなされる。胎土は褐色の粒子が混じる白色で、外底部の釉は施釉後に削り取る。米裂が多い。171～173は龍泉窯系青磁で、171・172は碗I類である。171は上層出土で、口縁部内面に沈線を配し、体部内面には片彫りおよび櫛状工具により施文する。外面の一部に貫入が見られる。172は高台母付きに釉が及ぶ。体部内面には片彫りの施文を有する。井筒内から出土遺物した。173は井筒内出土のⅢI類で、見込みには片彫りおよび櫛状工具により花文を描き、外底部の釉は削り取る。透明感のある明緑色の釉がかけられる。174～176は同安窯系青磁である。174・175は共に井筒内出土の碗Ⅲ-1・b類である。外面には片彫りによる沈線を配し、内面は櫛状工具により施文する。体部下半は露胎である。176は下層出土の坏で、体部下半で屈曲し、口縁部は緩く外反する。見込みには圓線を有する。暗灰色の胎土に黄緑色の釉を施釉するが、外面屈曲部以下は露胎となる。やや軟質の焼成である。177・178砂岩製石球で、粗く研磨する。径は順に2.4、2.5cmである。179は瓦質の導で、厚さ3.0cmを測る。180は玉縁式の丸瓦である。凸面胴部は縄目の叩きを施すが、部分的にナデ消し、玉縁面は粗いナデを施す。凹面には布日が認められる。181は砂岩製の置き砥石で、4面を砥面として利用している。径約2cmの孔が上面に認められる。177～181は井筒内の出土である。他にヘラ切りおよび糸切り底の土師器小皿、瓦器の細片等が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃の井戸と考



第28図 SE231出土遺物実測図(2) (177・178は1/2、179~181は1/4、他は1/3)

えられる。

2) 土坑 (SK)

各面において検出し、1面では15世紀から近世、2面では12世紀中頃から14世紀代、3面では上面での遺漏遺構および古代と考えられる土坑を確認した。なお、1面調査遺構には部分的な遺構面の下げ過ぎにより、出土遺物から2面に帰属すると思われる遺構が含まれる。良好な一括廃棄の遺構として2面SK352が挙げられ、12世紀後半の遺物が多数出土している。

SK002 (第29図) 1面A-2区の調査区南隅で検出した。南東側および南西側は調査区外に位置するため、規模は不明である。現状では深さ約0.3mを測り、底面はほぼ平坦である。覆土は暗灰色砂質土を主体とし、瓦片が多数含まれる。

出土遺物(第30図) 182は瓦質土器の火舎口縁部片で、口縁下には2条の突帯を貼付する。外面は器面が風化するが、内面には刷毛目調整が認められる。183は土師質土器の香炉と考えられる細片で、口縁部外面には段を形成し、その下位には沈線および菊花文のスタンプが施される。184~190は出土瓦の一部を凶化したものである。いずれも燻しは施されない。184は三巴文の軒丸瓦で、太目の頸部を有する巴文は界線に接する。外縁部は高く作り出し、小振りな珠文を配する。185~187は軒平瓦で、唐草文を配する。186は子葉を派生させる。188~190は丸瓦で、188・189には玉縁部が遺存する。いずれも凸面胴部には縄目叩きを施し、ナデを加える。凹面は布目および縄痕が認められる。側縁部は幅広に面取りされる。191は瓦を整形した瓦玉で、径4.5cm、厚さ2.0cmを測る。側面の研磨はやや粗い。他に土師器、白磁、同安窯系青磁、肥前磁器等が出土している。これらの遺物から17世紀後半頃の遺構と考えられる。

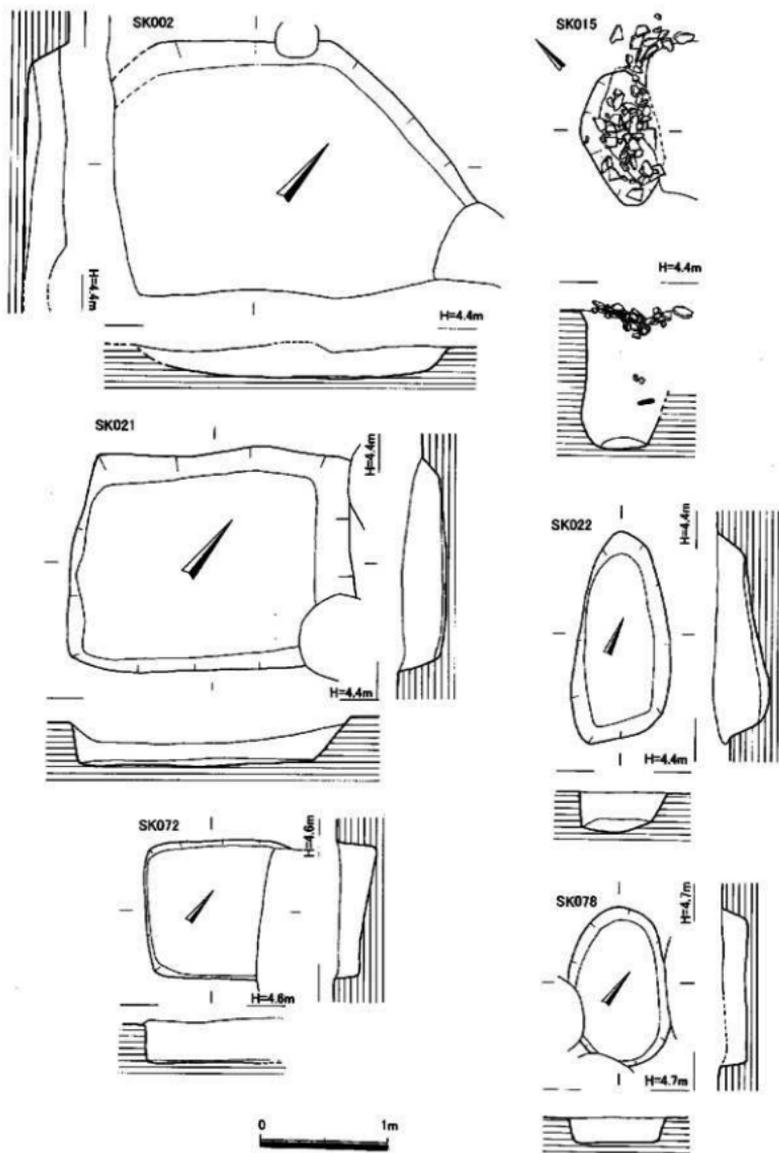
SK015 (第29図) 1面A-1区で確認したが、南東部は攪乱される。当初、遺構平面プランが不明瞭であったため、遺物の原位置を保ったまま周囲を下げた確認を行った。よって遺物東側の遺物散布範囲まで掘り方は拡大するものと考えられる。壁面は直立気味に立ち上がり、確認面からの深さは約1.1mを測る。瓦を主体とする遺物の大半は上層で出土しており、その確認状況から遺構の埋没の最終段階において堆積したものと考えられる。

出土遺物(第31・32図) 192は明代の青磁碗で、外底部および見込みの釉を輪状にカキ取る。露胎部分にはぶい赤褐色を呈する。193~200は瓦で、いずれにも燻しを施さない。193は軒平瓦で、中心飾りに2段に内側を区切る宝珠文を配する。瓦当面端部の器面は剥落するが、細い唐草文を4回反転させている。頸部の段は浅い。194~197は丸瓦である。凸面胴部には縄目の叩きを施し、粗くナデ消している。凹面には布目が認められる。197の広端面は幅広に面取りする。198は平瓦で、凹面、凸面ともにナデ調整であるが、凸面には僅かに縄目と考えられる叩きが残る。199・200は道具瓦である。199は雁振瓦で、凸面は縄目叩き後、ヘラナデを加える。凹面には布目が残り、側縁はヘラナデを行う。200は切隅瓦と考えられ、目釘穴を有する。201は赤間石を用いた硯である。これらの遺物から16世紀前半代の遺構に比定されよう。他に土師器小皿、同安窯系青磁等の細片が出土した。

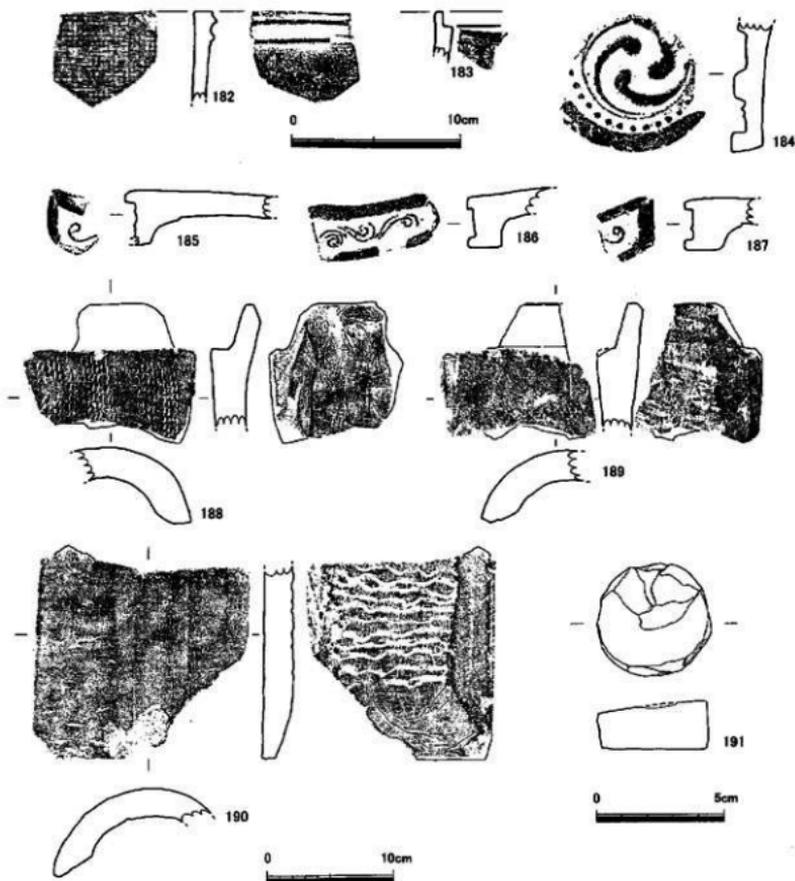
SK021 (第29図) 1面A-2区に位置する方形プランの土坑で、北側隅をSK097に切られる。長さ2.2m、幅1.7m、深さ0.3mを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(第33図202) 瓦質土器火舎で、口縁部は内面に屈曲する。外面には雷文のスタンプを有する。内面は横方向の刷毛目を粗くナデ消す。他に回転糸切り底の土師器小皿、肥前磁器、瓦等が出土しており、17世紀以降の遺構と考えられる。

SK022 (第29図) 1面A-2区で検出したやや不整な精円形の土坑である。長径1.7m、短径0.7m、深さ0.45mを測る。断面形は船底形を呈し、覆土は黒味の強い暗灰褐色砂質土を主体とする。



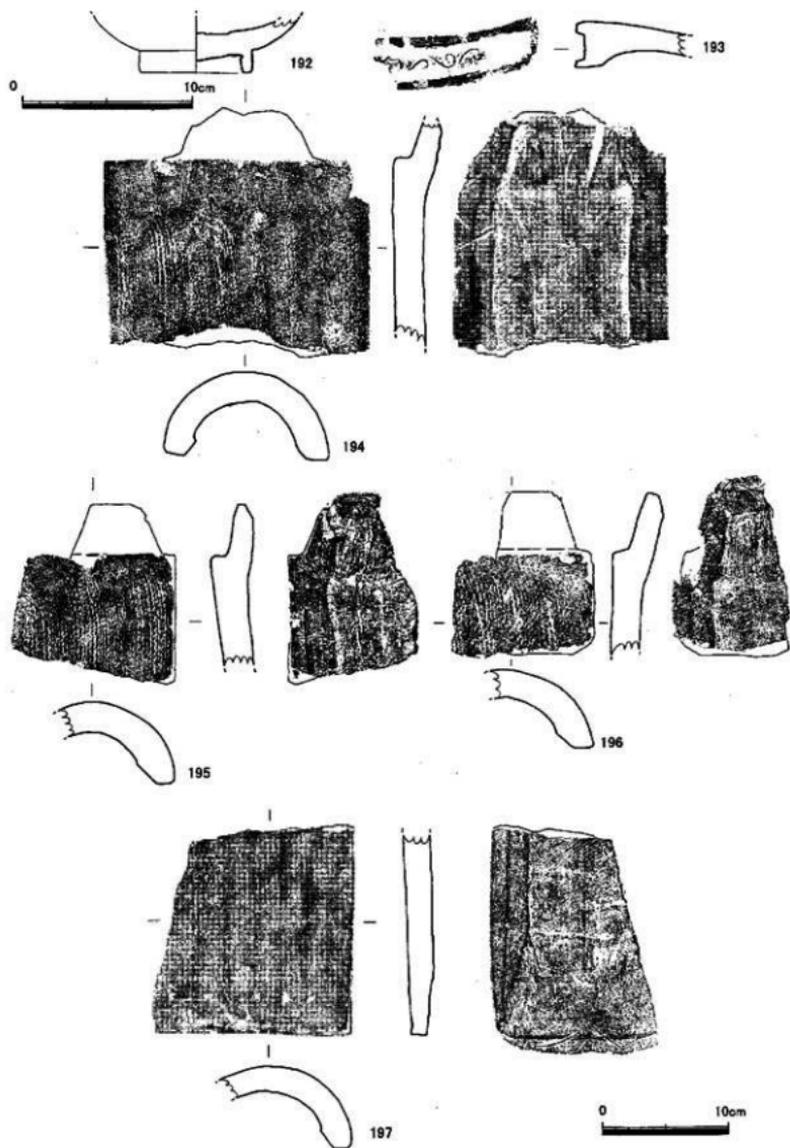
第29图 SK002·015·021·022·072·078实测图 (1/40)



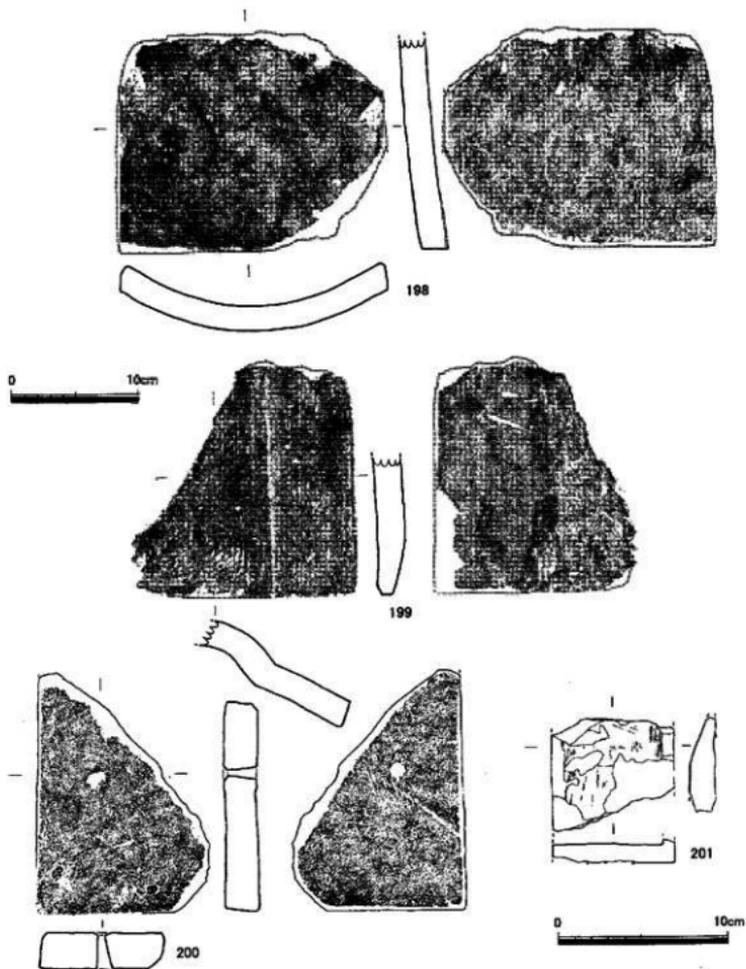
第30図 SK002出土遺物実測図 (191は1/2、182・183は1/3、他は1/4)

出土遺物(第33図203) 同安楽系青磁皿Ⅰ-Ⅱ類である。見込みには片彫りおよび櫛状工具による施文を有する。淡緑色の施軸がなされるが、外底部はカキ取りにより露胎となる。他に回転糸切り底の土師器小皿、白磁、瓦の細片が少量出土している。12世紀後半の遺構と考えられる。

SK072 (第29図) 1面B-1区に位置する。隅丸方形を呈する土坑と考えられるが、北東側は攪乱され全容は不明である。現況で、幅1.1m、深さ0.3mを測り、覆土は黄灰色砂質土を主体とする。



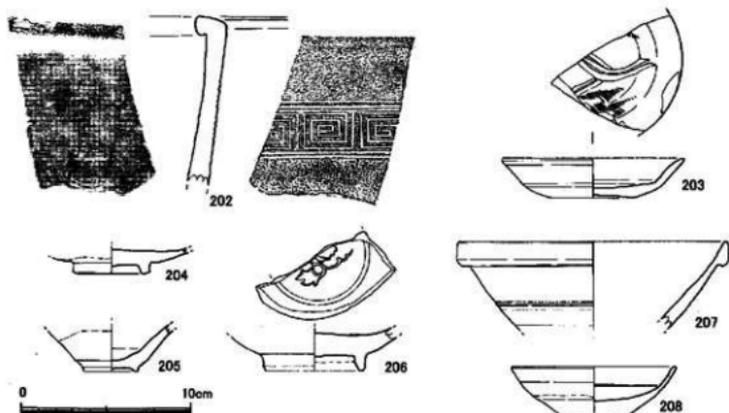
第31図 SK015出土遺物実測図(1)(192は1/3、他は1/4)



第32図 SK015出土遺物実測図(2) (201は1/3、他は1/4)

出土遺物(第33図204~206) 204は白磁の高台付皿で、やや青味のある白色の釉を施すが、体部下半以下は露胎となる。内外面ともに貫入が見られる。205は黒粒施釉の天目碗で、釉尻には褐色の化粧土が認められる。胎土は黒灰色を呈し、やや粗い。206は明代の青磁碗で、見込みには印花文を施す。外底部の釉は輪状にカキ取る。これら出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

SK078(第29図) 1面A・B-1区で確認した土坑で、SD003に切られる。楕円形を呈し、長径1.3m、



第33図 SK021・022・072・078出土遺物実測図 (1/3)

短径0.8m、深さ0.2mを測り、断面は逆台形をなす。覆土は黄灰色砂質土を主体とする。

出土遺物(第33図207・208)ともに白磁で、207は玉縁状の口縁部を呈する碗IV類である。体部下半は露胎で、やや淡赤褐色を呈する。内外面に貫入が多く認められる。208は皿VI類で、黄味の強い釉が外面下半を除いて施釉される。体部内面に沈線を有する。他に土師器小皿、中国陶器、同安窯系青磁、瓦の細片が少量出土している。出土遺物から12世紀後半代の遺構であろう。

SK081 (第34図) 1面B-1区に位置する。壁面の周囲を攪乱されるため、規模等は不明であるが、現状では楕円形を呈するものと考えられる。

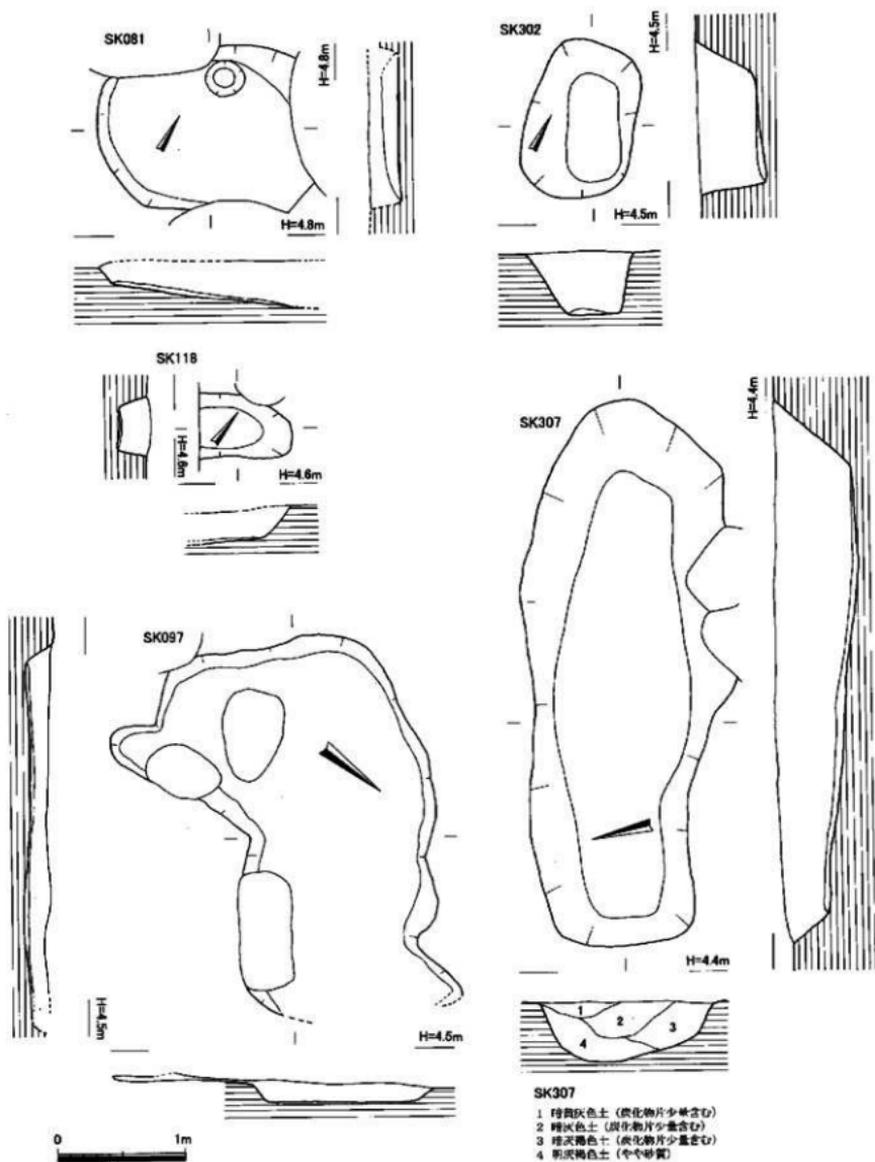
出土遺物(第35図209) 外底部に墨書を有する白磁碗である。高台際まで、不透明な白色の釉が施され、氷裂およびピンホールが見られる。他に近世瓦が出土している。

SK097 (第34図) 1面B-2区で検出したが、不整形なプランを呈し、北東側の壁面は判然としない。遺構面の凹部を掘り下げた可能性もある。深さ0.15m程度である。

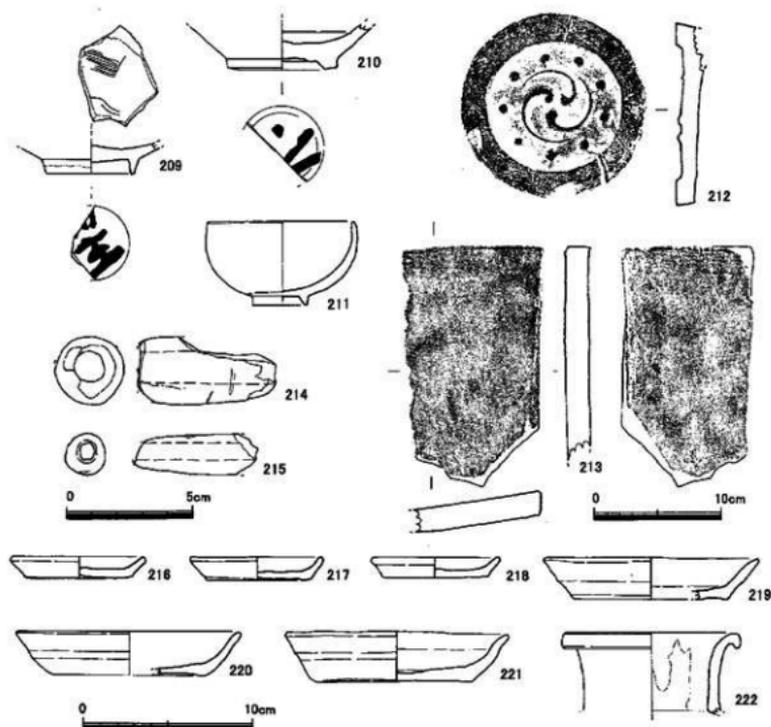
出土遺物(第35図210~215) 210は白磁碗IV類の底部で、見込みに沈線が巡る。外底部には墨書を有する。211は肥前磁器の碗である。高台部は露胎である。212は三巴文の軒丸瓦で、巴尾部は細長い。珠文を9個配する。213は平瓦である。凹面、凸面ともに平滑にナデる。214・215は管状土鏝である。ともに片側端部を欠損する。17世紀以降に比定される。他に土師質摺鉢片等が出土した。

SK118 (第34図) 1面A-1区で確認した小形の土坑で、南西側をSD017に切られる。幅0.5m、深さ0.25mを測り、長さ0.7mが遺存する。断面形は逆台形を呈し、覆土は黒味のある褐色砂質土である。

出土遺物(第35図216~222) 216~221は土師器で、この内216~218は回転糸切り底の小皿である。216を除いて板状庄痕を有する。順に口径は7.8、7.8、7.5cm、器高は1.3、1.4、1.3cmである。218は内底部までヨコナデを施す。219~221は坏である。いずれも外底部は回転糸切りで、板状庄痕が認められる。順に口径は12.8、13.2、13.2cm、器高は2.5、2.6、3.0cmである。222は白磁の壺で、口縁部は垂



第34图 SK081·097·118·302·307实测图 (1/40)



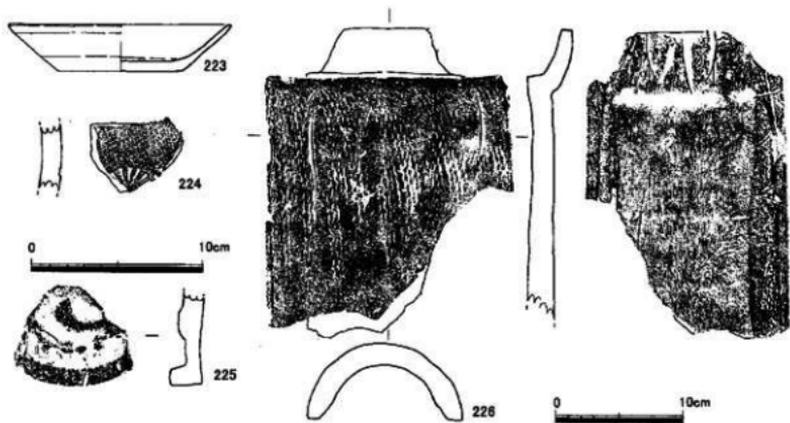
第35図 SK081・097・118出土遺物実測図 (214・215は1/2、212・213は1/4、他は1/3)

下する。淡灰色の胎土に青味のある白色釉を施す。他に龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類、同安窯系青磁碗Ⅰ類、錆化の著しい釘等が出土している。土師器法量から13世紀後半の遺構と考えられよう。

SK302 (第34図) 1面B-2区に位置する土坑で、SD304を切る。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は黄灰色砂質土を主体とする。

山上遺物 (第36図) 223は土師器坏で、復元口径13.0cm、器高2.8cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。内外面にヨコナデを施すが、内底部の一部にナデを加える。224は土師質の火舎片で、菊花文の印刻を有する。225は巴文の軒丸瓦である。太目の巴頭部と珠文が認められるが、界線は配されない。226は玉練式の丸瓦である。凸面胴部は縄目の叩きを粗くナデ消し、玉縁面にはナデを施す。凹面には細かい布目が残る。熨しは施されない。以上の出土遺物から16世紀代の遺構と考えられよう。

SK307 (第34図) 1面B-1・2区で検出した不整長方形の土坑である。長さ4.3m、幅1.6m、深さ



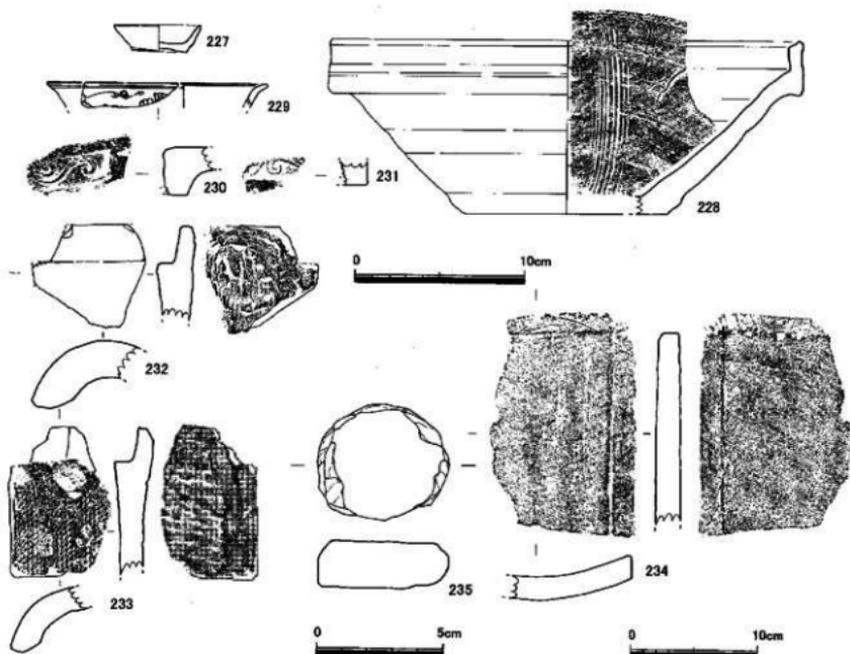
第36図 SK302出土遺物実測区 (223・224は1/3、他は1/4)

約0.6mを測り、断面形は船底形を呈する。2・3層には瓦片が目立つ。

出土遺物(第37図) 227は土師器小皿である。口径5.1cm、器高1.6cmを測り、ヨコナデ調整を施す。外底部は回転糸切りである。228は備前焼V期の播鉢で、9条の播目を有する。口縁部は直立し、内傾する上面は、強いヨコナデにより凹線状に窪む。体部は器面の凹凸が著しい。229は明代染付の皿で、端反りする口縁部の内外面には界線が走り、外面には唐草文を有する。230～234は瓦である。いずれにも燻しは施されない。230・231は軒平瓦で、唐草文を配する。232・233は玉緑式の丸瓦で、233の凸面胴部には縄目肌を残す。凹面には布目および縄紐痕が認められる。234は平瓦で、凹面、凸面ともにヘラナデを施している。235は平瓦を整形した瓦片である。瓦端部が遺存する。他に李朝粉青沙器、明代青磁碗の細片等が出土している。以上の出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

SK040(第38図) 2面B-1区に位置し、SK214を切る。なお、試掘時のトレンチが設定されるため、壁面の一部が削平される。平面プランはやや不整な隅丸方形を呈し、長さ1.15m、幅0.8mを測る。底面は検出面からの深さ約0.5mを測る南側に平坦面を有し、北端部では更に深さ0.1mを掘り込んでいた。黒褐色砂質土を覆すの主体とする。

出土遺物(第39図236～248) 236・237は土師器小皿、坏である。順に口径復元口径は8.8、15.4cm、器高は1.2、2.6cmを測る。ともに外底部には板状圧痕を有するが、236は回転糸切り底、237は回転ヘラ切り底である。237は体部中位から外底部にかけて器面が剥落する。238は中国陶器で、長胴の壺と考えられる。胎土は黒色の粒子を多量に含む淡褐色を呈し、外面にはオリブ灰色の釉がかげられる。内面は淡褐色に発色する。外底部にも施釉され、目跡が残る。239～244は白磁である。239は玉緑状の口縁部を呈する碗IV-1・a類で、体部内面の下位に沈線が走る。外面下半は露胎である。240～243は見込みの釉を輪状にカキ取る碗VII類である。この内240・242・243は見込みに段を有するもので、直線的な体部を呈する。241は口縁部を外反させ、内面に白堆線を有するVII-4類である。高台および外底部は露胎である。244は高台付きの皿III-2類で、大きく開く体部に外反する口縁部を有する。体部内面の中位には沈線を施す。黄味の強い白色の釉は外面下半には施釉されない。245は青白磁の合子身で、



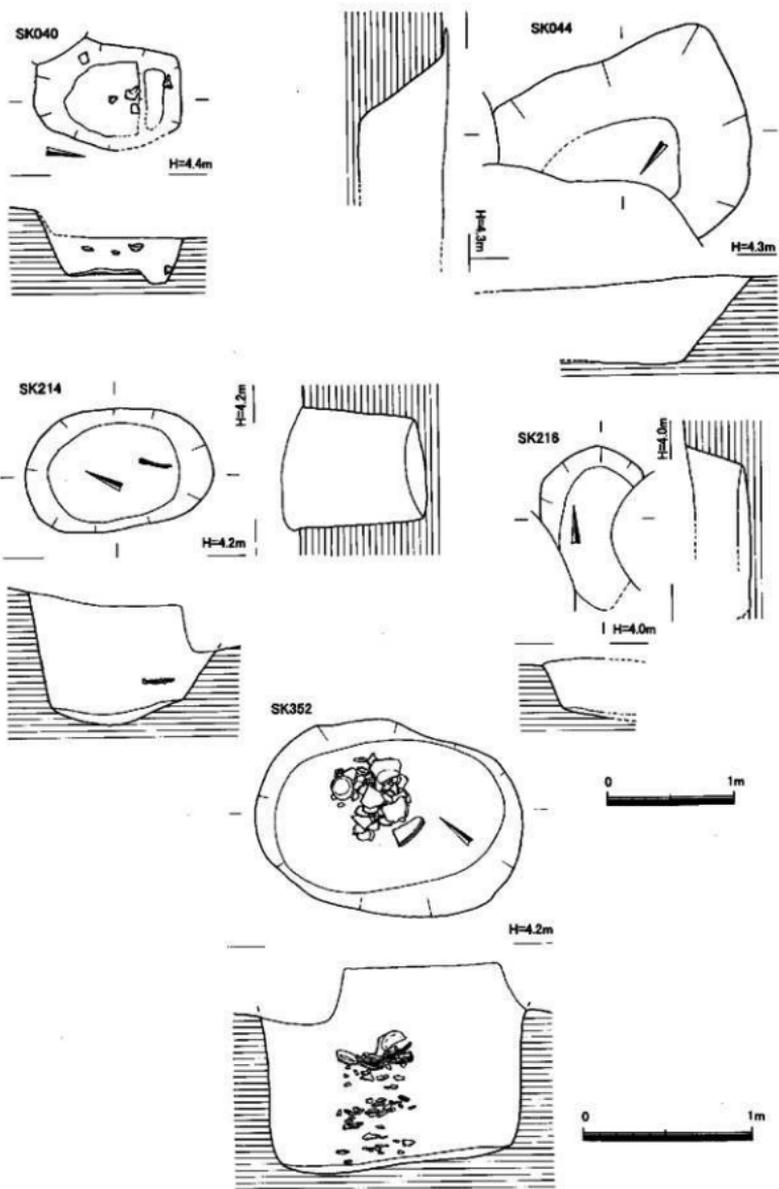
第37図 SK307出土遺物実測図 (235は1/2、227～229は1/3、他は1/4)

立ち上がり外面および外底部は露胎である。受け部には蓋の一部が熔着する。246は滑石製の容器である。外面には煤が付着する。247・248は瓦で、共に須恵質の焼成である。247はE線式の丸瓦で、凸面胴部は縄目叩き、凹面には布目が見られる。248は平瓦で、凹面には布目、縄痕が残る、凸面は縄目叩きを一部ナデ消す。以上の出土遺物から12世紀前半から中頃の遺構に比定される。

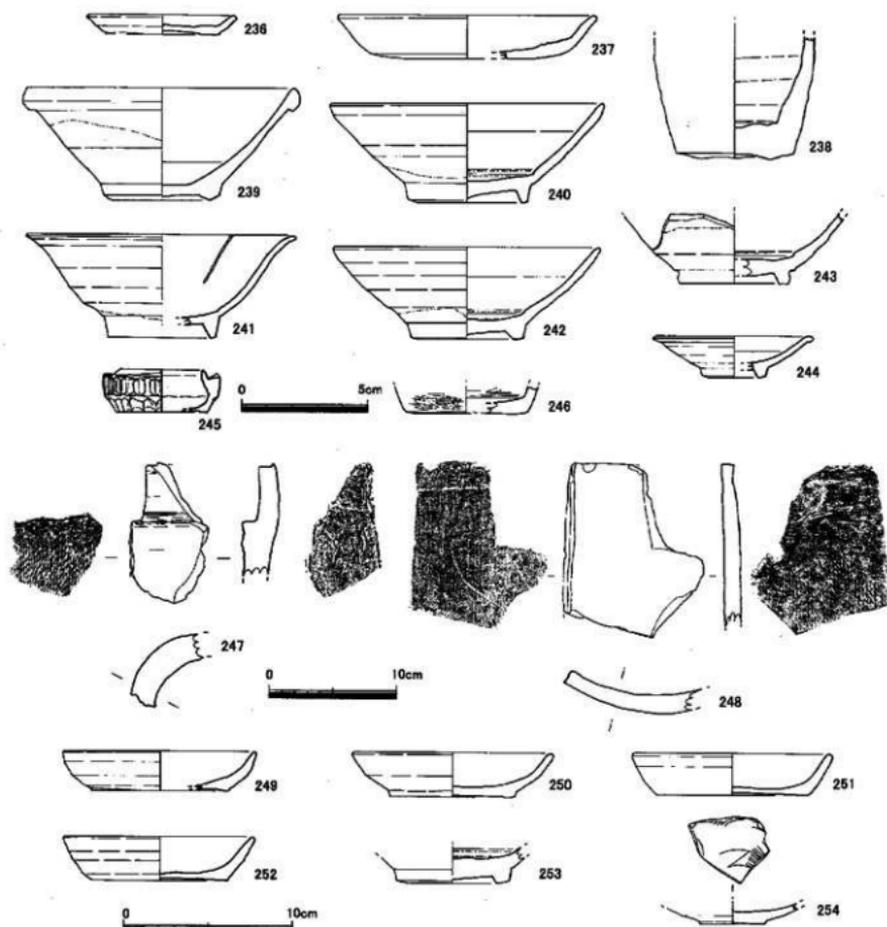
SK044 (第38図) 2面B-1区で検出した土坑で、1面遺構に切られるため、詳細は不明である。現状では断面形は逆台形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは0.7mを測る。覆土は黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第249～254) 249～252は土師器片である。口径11.2～11.9cmで、平均11.6cm、器高は2.4～2.7cmで、平均2.6cmを測る。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕が認められる。253は白磁碗Ⅵ類で、見込みの軸を輪状にカキ取る。低い高台を有する。254は白磁皿Ⅶ類と考えられる。底部には高台状の鈍い削り出しを施す。軸は白濁色で、外底部は施釉後にカキ取る。見込みには櫛状工具による施文を有する。他に白磁Ⅶ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ～Ⅴ類等の細片が出土した。土師器法量から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SK214 (第38図) 2面B-1区で確認した。SK040に両側壁面の上半を切られ、SK216およびSX217を切る楕円形の土坑である。長径1.5m、短径1.0m、深さ1.1mを測り、壁面の立ち上がりは急である。覆土は黒褐色砂質土を主体とし、下層ではやや淡い。

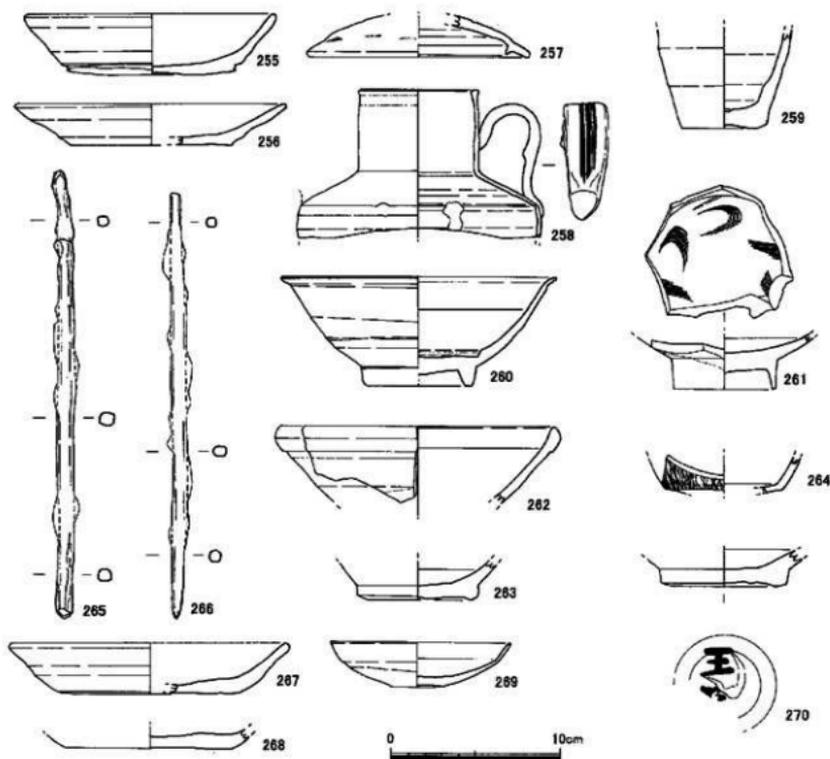


第38图 SK040・044・214・216・352实测图 (SK352は1/30、他は1/40)



第39図 SK040-044出土遺物実測図 (245は1/2、247-248は1/4、他は1/3)

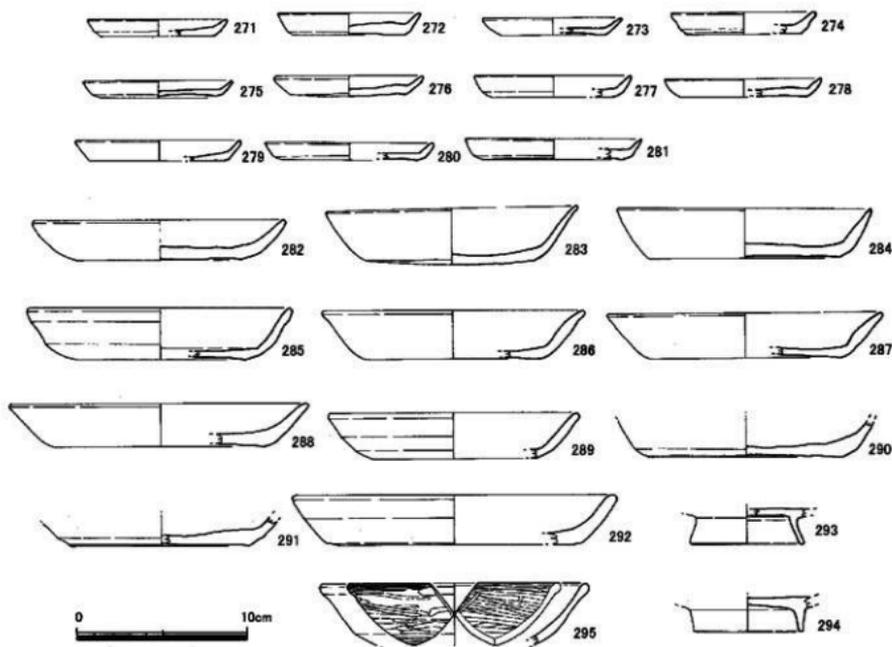
出土遺物(第40図255~263) 255・256は回転糸切り底の十師器坏で、共に板状片痕を有する。順に復元口径は14.8、16.0cm、器高は3.6、2.5cmを測る。256の体部は大きく開く。257~259は中国陶器である。257は短いかえりを有する蓋で、天井部には沈線を有する。外面には褐釉が施され、腐胎となる内面は赤茶褐色を呈する。天井部外面の下半には目跡が残る。258は黒褐釉の水注である。胴部中位で「く」字状に屈曲し、外湾気味に立ち上がる頸部へと続く。口縁端部は小さく肥厚して収める。頸部内面から外面は刷毛塗りで施釉するが、外面口縁部下の釉は施釉後に削り取る。胴部の屈曲



第40図 SK214・216出土遺物実測図 (1/3)

部には劃線を有する。また、口縁部上面には目跡が残る。257・258は磁灶窯系の製品と考えられる。259は長胴甗で、外底部を除き灰オリーブ色の釉がかけられる。胎土は黒灰色の粒子を含み、灰色を呈する。260～264は白磁で、260は碗Ⅶ-3類で、外反する口縁部を有し、見込みの段内部の軸を輪状にカキ取る。261は碗Ⅶ類に属するもので、見込みには沈線が巡り、櫛状工具による施文を有する。高台際まで施軸される。262・263は碗Ⅳ類である。264は炉で、内面および外底部は露胎となる。外面には片彫りによる斜格子文を施す。265・266は火箸と考えられる鉄製品で、2本が錆化した状態で出土した(遺構図参照)。断面は一辺0.5～0.8cmの方形を呈する。他に瓦器、能泉窯系および同安窯系青磁碗、瓦等が出土している。出土遺物から12世紀中頃から後半の遺構と考えられる。

SK216 (第38図) 2面B-1区に位置する。1面遺構およびSK214に切られるため、遺構の遺存状況は不良である。現況では楕円形を呈するものと考えられ、深さは0.5mを測る。覆上は黒褐色砂質土を主体とする。

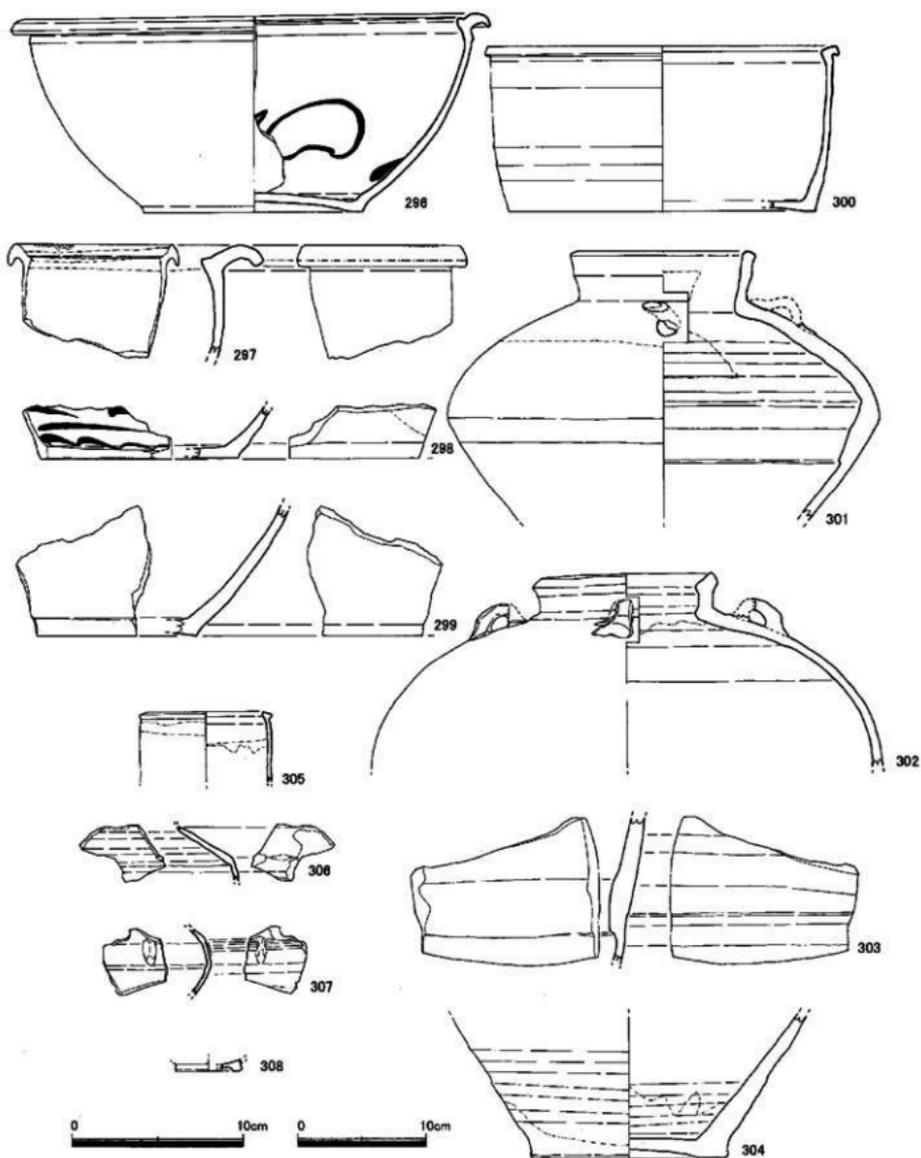


第41図 SK352出土遺物実測図 (1) (1/3)

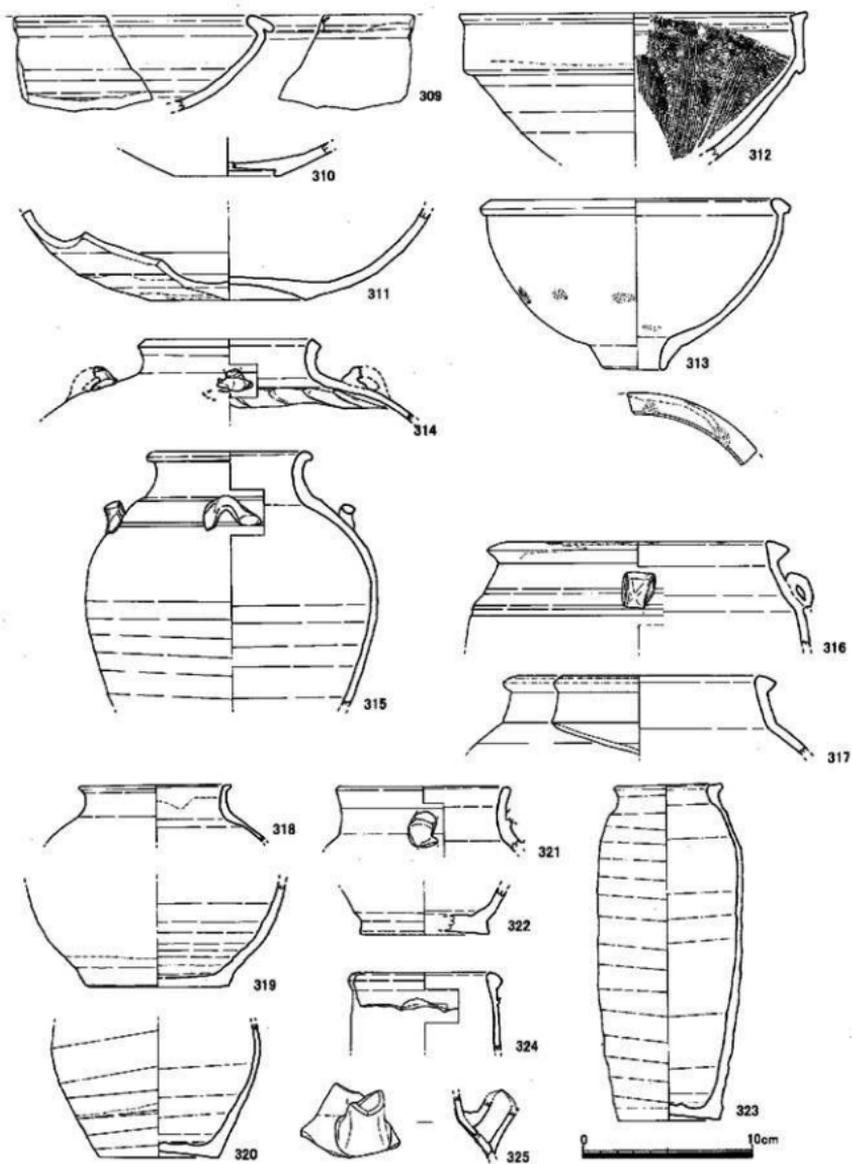
出土遺物(第40図267~270) 267・268は土師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。267は復元口径16.5cm、器高3.0cmを測る。269は白磁皿IV-1・a類である。体部中位で緩く屈曲し、その内面には沈線を描する。黄味の強い白色の釉が施軸されるが、体部下半以下は露胎である。270は白磁碗IV-1類で、外底部には不鮮明ながら「王口」の墨書が記される。他に瓦器、滑石製石鏝等の細片が出土している。この上坑は出土遺物から12世紀中頃に比定される。

SK352(第38図) 2面B-2区で検出した槽門形プランの土坑である。壁面の一部が攪乱および1面遺構により削平される。長径1.6m、短径1.2m、深さ1.2mを測り、底面は緩い傾斜を有する。掘り方の中央部からやや北側の壁面寄りにかけて筒状に多数の土師器、中国陶器、輸入磁器等が廃棄される。覆土は暗褐色砂質土を主体とする。遺物の取り上げは検出面からの深さ約0.4mまでを上層遺物、以下を下層遺物(ほぼ固分化に相当)とした。また、上・下層での接合が比較的良好に行えたことや出土状況から、これらの遺物群は一括性が高いものと推測される。なお、遺物の残存状況は良好なもの、完形資料は少量であった。

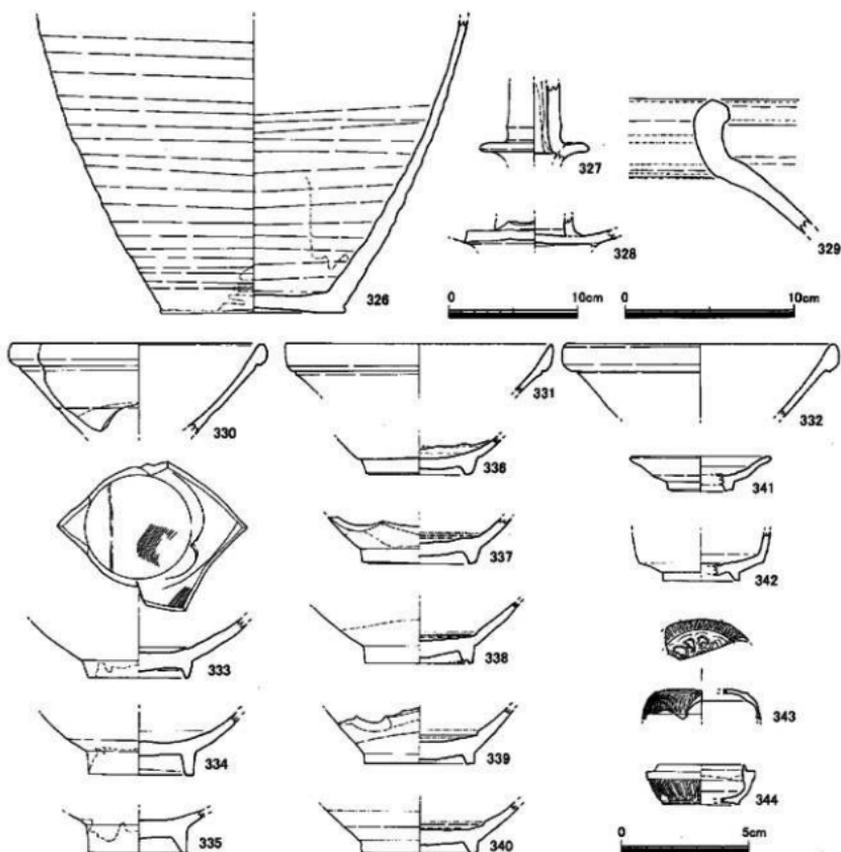
出土遺物(第41~46図) 271~281は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する。残存状況は1/4程度の個体が大半を占め、完形品はない。復元口径は8.3~10.4cmで、平均は9.1cm、器高は1.1~1.3cmで、平均は1.2cmである。282~291は土師器坏で、小皿同様に外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。283は口縁端部を僅かに欠失する程度で、ほぼ完形である。他は1/4



第42図 SK352出土遺物実測図(2) (296・300・302・304は1/4、他は1/3)



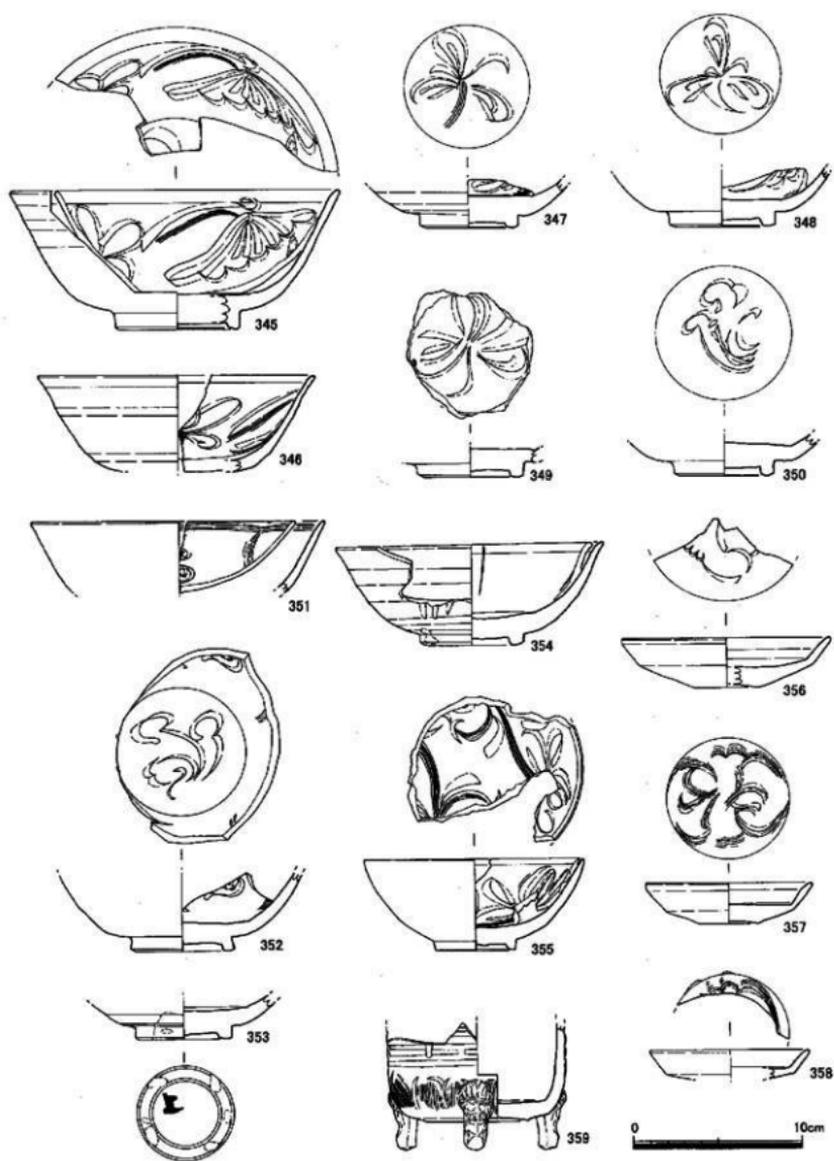
第43图 SK352出土物实测图 (3) (1/3)



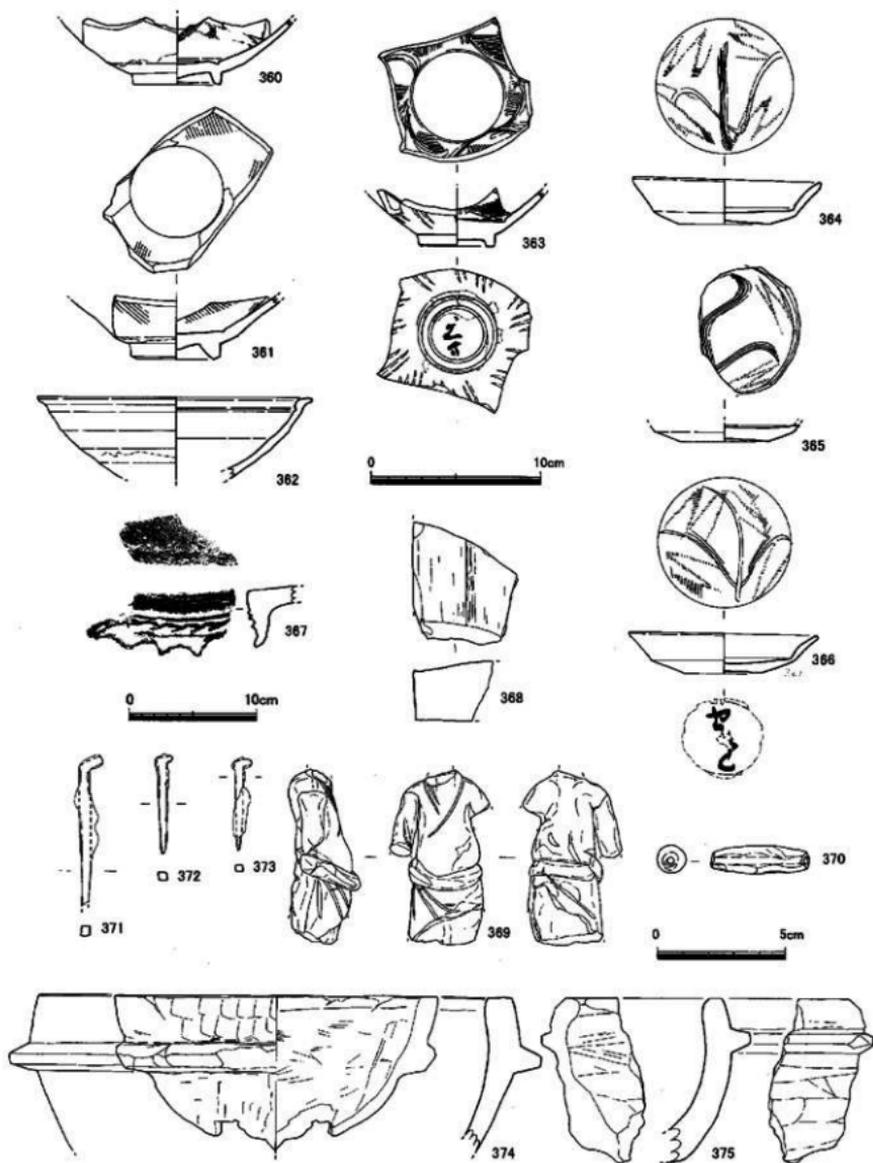
第44図 SK352出土遺物実測図(4) (344は1/2、326は1/4、他は1/3)

～1/3の残存状況を示す。復元口径は14.8～17.6cmで、平均は15.6cm、器高は2.6～3.5cmで、平均は2.8cmを測る。292は土師器Ⅲaで、坏に比して口径が大きく、器壁も厚い。復元口径19.2cm、器高3.0cmを測る。外底部までヨコナデを加えるため、底部切り離し技法は不明である。293・294は土師器碗の底部で、細く高い高台を貼付する。293は外方に張り出し、294は直立する。ともに外底部にはヨコナデを施す。295は瓦器碗で、内外面にヘラ研磨調整を行う。

第42・43図および第44図326～329は中国陶器である。第42図は磁灶窯系と考えられる陶器群で、この内296～300は黄釉盤である。296・297は鋸状の口縁部を呈するもので、露胎となる外面は淡赤褐色を呈する。胎土には砂粒を多量に含む。298は口縁部外面から内面にかけて白色の化粧土を施し、体内内面には鉄彩を施す。口縁部の上面は釉を拭き取り、目跡を残す。297は口縁部内面の屈曲部を帯状に露胎

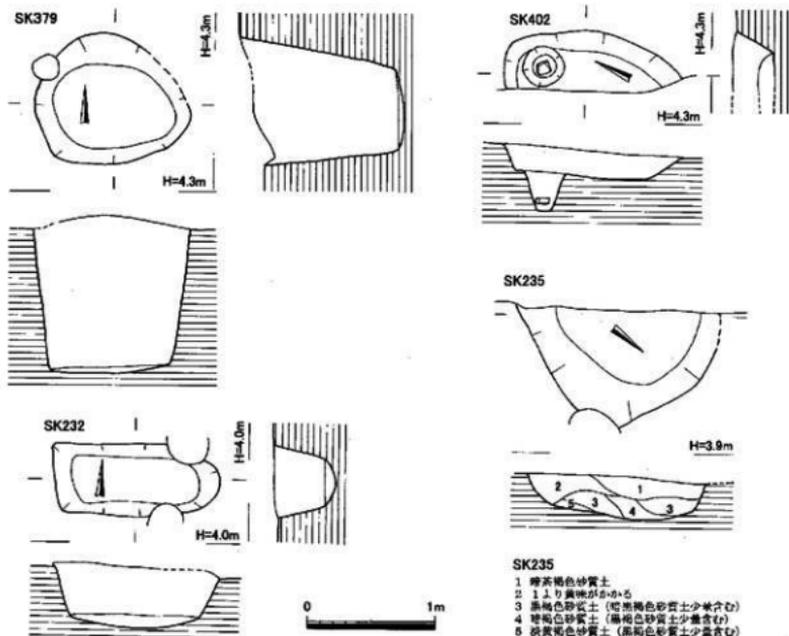


第45图 SK352出土遺物実測图 (5) (1/3)

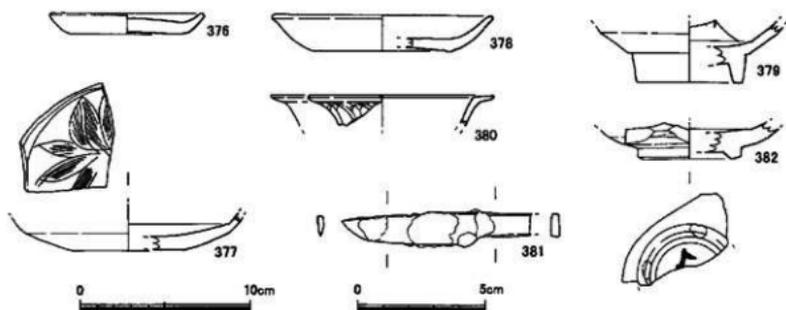


第46図 SK352出土遺物実測図 (6) (369~373は1/2、367は1/4、他は1/3)

とする。296同様に口跡が残るが、釉の拭き取りは行っていない。釉調は灰オリーブ色で、299と胎上ともに類似する。同一個体と考えられるが、接合しない。298は内面に淡黄色の釉を施し、鉄彩が見られる。300は口縁部断面が短い「L」字状を呈するもので、体部は直線的で、底部にかけてすばまりが少ない。釉は灰緑色をなし、貫入が多い。内面の釉下には化粧土が施される。口縁部および外面は露胎で、胎土には砂粒が目立つ。301~304は壺である。301は茶釉四耳壺で、算盤玉状の体部に外傾する直線的な口縁部が付く。縦耳は欠失する。灰白色を呈する胎土の内面および外面の肩部まで施釉される。302~304は褐釉四耳大壺で、同一個体の可能性が高いが、各個体同士の接合面はない。強く内傾する口縁部に短い頸部を有し、長胴の体部になるものと考えられる。灰色を呈する胎土には黒色の粒子が混じる。釉は内面肩部から外面の底部付近まで施される。303の胴部片には接合痕と思われる段が明瞭に認められる。305~307は黒褐釉の水注で、釉調、胎上が類似し、同一個体の可能性がある。前述のSK214出土例（第40図258）で器形が知れる。淡灰色の胎土に258に比して黒味の強い釉が頭部内面から外面にかけて施されるが、口縁部内外面の釉は粗く拭き取る。307の胴部屈曲部下には劃線が見られる。308は碗底部であるが、釉色、胎土が305~307に類似する。内面に黒釉が施されている。309~311は鉢である。309は口縁部を折り返し、外傾させる。灰オリーブの釉が灰色の胎土に施される。310は萐筍底状の底部をなし、内外面にオリーブ色の釉をかける。胎土は赤茶褐色を呈する。311は褐色の胎



第47図 SK232・235・379・402実測図 (1/40)



第48図 SK232・235・379・402出土遺物実測図 (381は1/2、他は1/3)

土に暗茶褐色の光沢のある釉が施されるが、外面下位および外底部は露胎である。312は播鉢で、直立する口縁部のみに暗褐色の釉がかけられる。露胎部分は褐色を呈する。口縁部上面は釉を拭き取り、目跡を有する。313は漏斗で、玉縁状の口縁部を呈する。暗赤褐色を呈する胎土の全面に光沢のある褐釉を施す。体外外面の中心および内面の下位には目跡を有する。314は無釉の四耳壺である。短い頸部に面取りされた口縁部を有する。器面は明赤褐色を呈する。315～323・326・329は褐釉壺である。315は横耳を貼付する四耳壺で、肩部に波状沈線を有する。にぶい黄褐色を呈する胎土で、外面および内面の頸部まで施釉される。316・317は断面三角の口縁部を有するもので、上面は釉を拭き取り、目跡が残る。318・319は白色の砂粒が多量に混じる灰褐色の胎土で、オリーブ黄色の釉を施す。器面の剥落が進む。同一個体と思われる。320～322は暗赤褐色～灰褐色の胎土を呈し、光沢のある暗褐色の釉がかけられる。323は長胴壺で、肩部に段を形成する。外底部を除き施釉される。口縁部上面には目跡が残る。326は大形品の底部である。外底部付近まで施釉される。露胎部分は赤茶褐色を呈する。329は砂粒が多量に混じる粗い暗赤褐色の胎土をなし、灰オリーブ色の釉を施すが、口縁部から頸部内面にかけては拭き取りを行う。324・325は褐釉の水注である。324は玉縁状の口縁部を呈し、把手の基部が僅かに遺存する。黒味の強い釉が内外面に施釉される。325は注口部の小片で、光沢のある釉調である。327・328は褐釉の燭台である。共に胎土は赤褐色を呈し、光沢のある釉が施される。同一個体と考えられる。

330～342は白磁で、330～332は玉縁状の口縁部を呈する碗Ⅳ類である。333は碗Ⅶ類で、見込みに沈線を配し、内面には櫛状およびへら状工具による施文を有する。334・335は細長く直立する高台を有する碗Ⅴ類である。334の見込みに沈線が巡る。336～340は見込みの釉を輪状にカキ取る碗Ⅶ類である。336を除いては見込みに段を形成するⅦ-2類である。341はⅢⅢ-1類に属するもので、輪状に釉をカキ取られた露胎部分にはぶく赤褐色に発色する。342は香炉で、胴部下半で強く屈曲する。内面および屈曲部以下は露胎である。

343・344は青白磁の合子で、型押しによる施文を施す。343は蓋で、口縁部内面は露胎となる。344は身で、立ち上がりの内外面の釉は削り取る。

345～359は龍泉窯系青磁である。この内、345～354はⅠ類の碗である。345～349はⅠ-2類に属する個体で、体外内面および見込みに片彫りによる草花文を施す。350～352はⅠ-4類で、351には輪花

を有する。354は外面に片彫りによる施文を有する。体部内面には細い白堆線を配し、その遺存状況から従来6本による区分が推定される。I-4・C類と考えられるが、口縁部に輪花は認められない。353は外底部に「上」の墨書が記される。355は小碗で、丸味のある体部を有する。内面には片彫りによる草花文を施す。356~358は皿I類である。356はI-1・b類で、見込みに片彫りによって花文を描く。367・358は見込みに櫛状T具による花文を有するI-2・b類である。359は香炉である。胴部下半には片彫りによる蓮弁文および櫛目を施し、その上位には型押しによる算木文が認められる。脚部にも施文を有する。外底部の軸は削り取るが他は施軸がなされる。

360~365は同安窯系青磁である。360・361は碗I類で、内面は櫛状工具により施文される。360の外面は無文である。362は口縁部を外反させ、内外面に施文しない碗II類である。363は皿I-1・c類の碗と思われるが、施軸が高台際まで及び、外底部は平坦に削り出している。外底部には墨書が記される。364~366は皿I-2類である。外底部の軸を削り取る。366の外底部には墨書を有する。

367は押圧文軒平瓦である。均等に流れる波状文を配する。平瓦部の凹面には布目が残り、凸面にはヨコナデを施す。368は瓦質の磚で、現存での厚さは3.6cmを測る。369は土製人形である。頭部は差込によるものであるが、欠損する。襟はヘラ描きの沈線によって表現し、帯および着物裾部は粘土貼付による。370は完形の管状土鏝で、重量は3.28gを測る。371~373は鉄製の釘で、371は端部を欠失する。374・375は滑石製石鏝である。374には煤の付着が認められない。

以上の出土遺物からこの土坑は12世紀後半に比定される。

SK379 (第47図) 2面C-1区で検出した不整形の土坑で、SE357を切る。径1.05~1.2m、検出面からの深さ1.3mを測り、壁面は直立気味に立ち上がる。覆土は黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第48図376・377) 376は土師器小皿で、復元口径9.1cm、器高1.3cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。377は白磁皿VII-2・b類である。見込みに草花文のスタンプを有し、外底部の軸は削り取る。器面には炭化物が付着する。他に中国陶器、白磁碗VII類、龍泉窯系青磁碗I類、同安窯系青磁等の細片が出土した。13世紀中頃の土坑であろう。

SK402 (第47図) 2面B-2区に位置する。西側を攪乱され、内容不明である。深さ0.2mを測る底面上の北側壁面際で扁平な小礫を置いたピットを確認した。

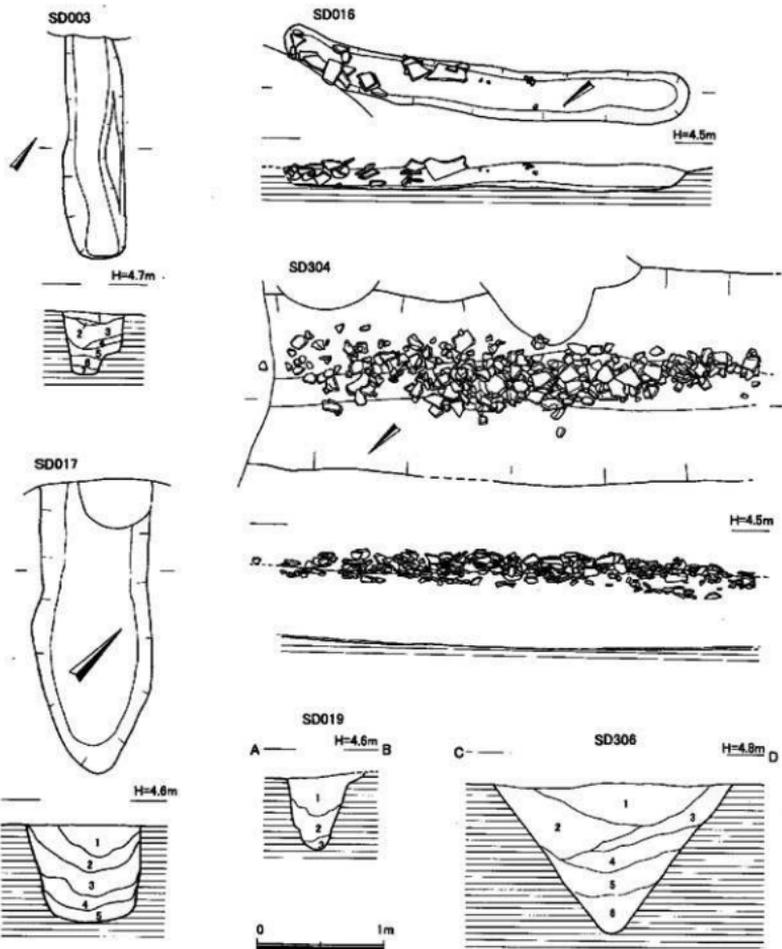
出土遺物(第48図378~380) 378は回転糸切り底の上師器坏である。復元口径13.1cm、器高2.2cmを測る。板状圧痕は認められない。379は白磁碗V類で、内面に櫛状工具によると思われる施文が見られる。380は龍泉窯系青磁坏III-4類である。体部外面には鎊蓮弁文を有し、口縁部は強く外反する。他に瓦片が出土している。13世紀中頃から後半の土坑と考えられる。

SK232 (第47図) 3面B-2区で確認した長方形プランの土坑である。長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.5mを測り、覆土は淡黒褐色砂質土を呈する。後述する鉄製品の出土や端整な掘り方の形態から土壌墓の可能性を有する。

出土遺物(第48図381) 鉄製刀子で、茎基部を欠損する。残存長7.4cm、身幅1.2cm、茎幅0.9cm、背幅0.2cmを測る。他に細片の土師器2点、須恵器1点が出土した。土師器は外面刷毛目、内面ヘラ削りを施すもので、甕と考えられる。古代の所産であろうか。

SK235 (第47図) 3面A-1区で検出したが、調査区壁面にかかるため、遺構の詳細については不明である。現状での断面は逆台形を呈し、深さ約0.3mを測る。

出土遺物(第48図382) 龍泉窯系青磁碗I類である。体部外面下位および高台には軸が及ばない。外底部には墨書が認められる。他に回転糸切り底の上師器小皿、中国陶器の細片が出土している。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられ、2面での検出遺漏遺構であろう。



SD003

- 1 暗灰茶褐色砂質土
- 2 1よりやや強い
- 3 明灰茶褐色砂質土 (湖底層に少量含む)
- 4 暗茶褐色砂質土
- 5 4よりやや強い
- 6 茶褐色砂質土
- 7 灰味がかった茶褐色砂質土

SD017

- 1 暗褐色砂質土 (炭化植物遺体を含む)
- 2 1より強い
- 3 暗茶褐色土ブロック多量、炭化植物遺体を含む (湖底層に少量含む)
- 4 灰味がかった暗褐色砂質土
- 5 4と同じ (ただし、黄褐色砂質土多量を含む)

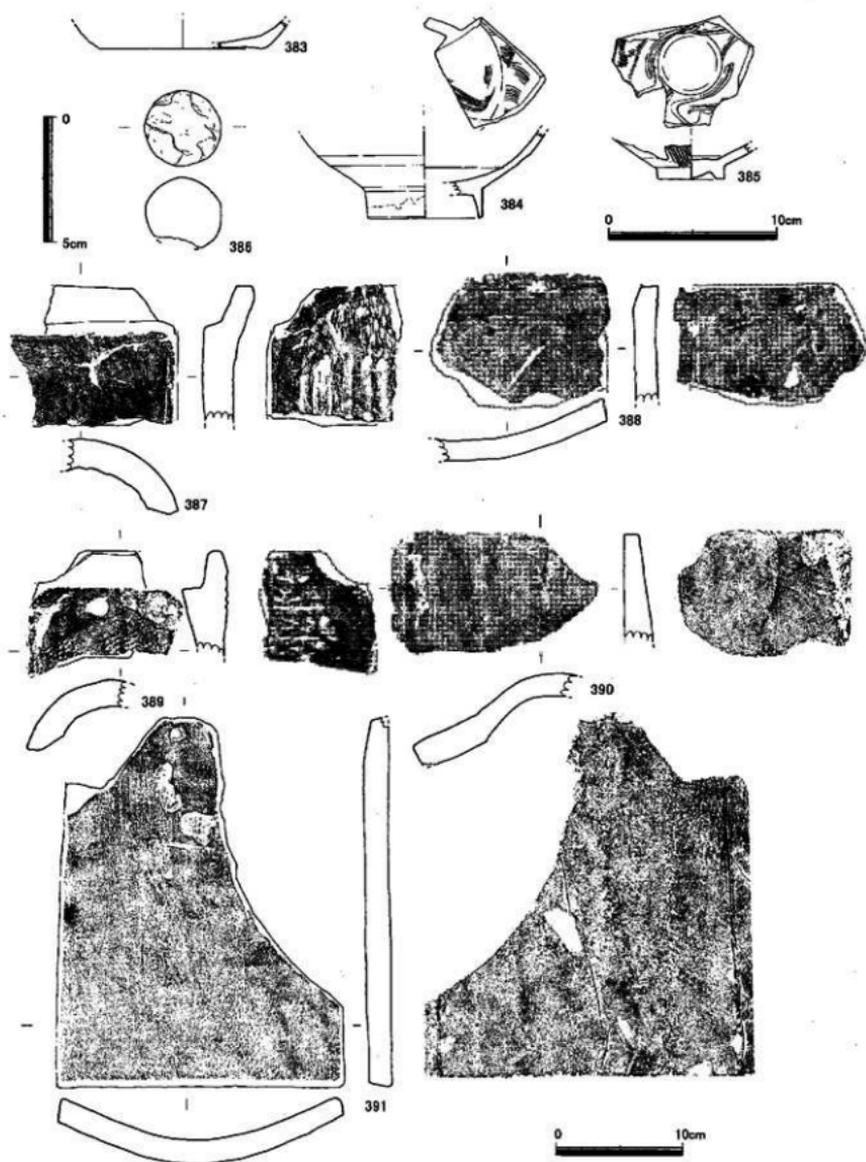
SD019

- 1 暗灰褐色砂質土 (中層部あり、黄褐色土ブロック多量含む)
- 2 暗色砂質土
- 3 灰味がかった暗褐色砂質土

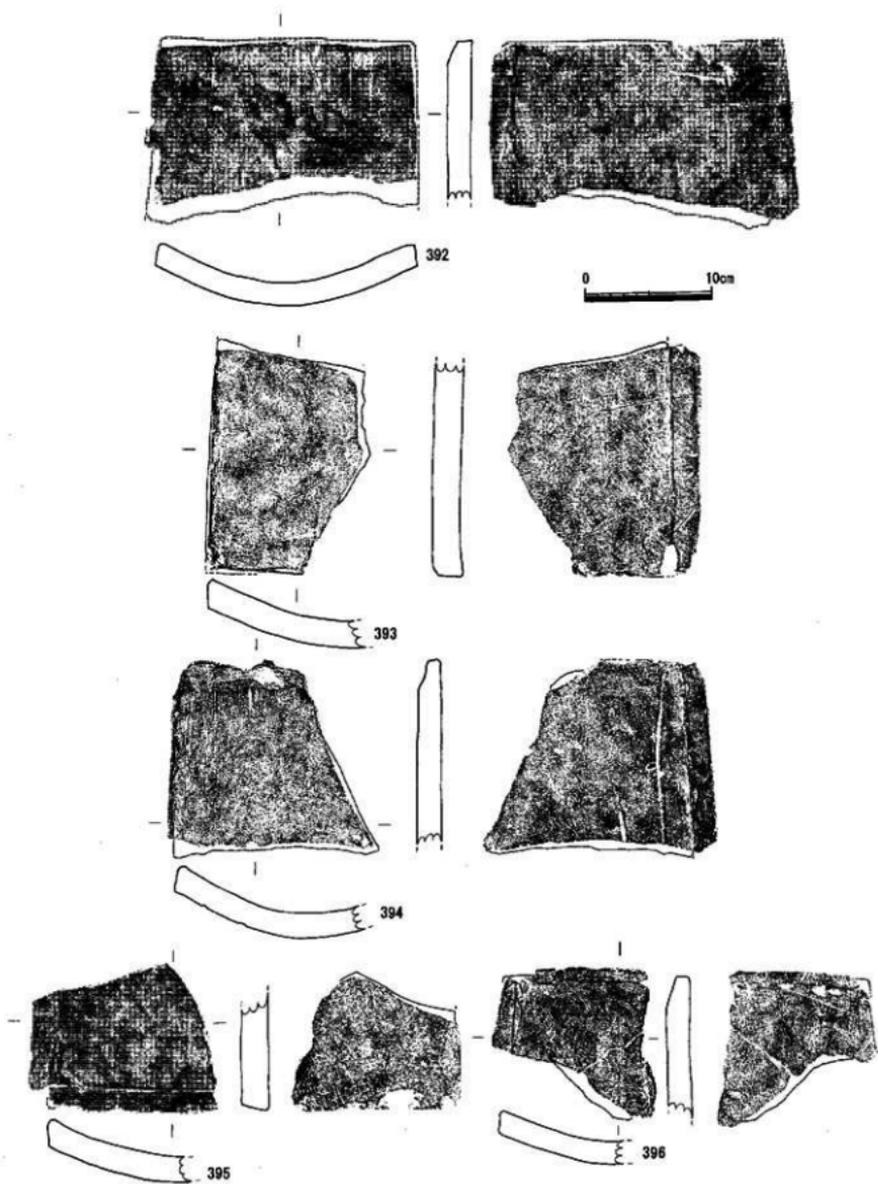
SD306

- 1 暗灰色砂質土 (湖底層を含む)
- 2 1より強い (炭化物残渣を含む)
- 3 暗色砂質土
- 4 暗褐色砂質土
- 5 灰味がかった暗褐色砂質土 (湖底層に少量含む)
- 6 暗褐色砂 (中層部あり、黄褐色土ブロック多量含む)

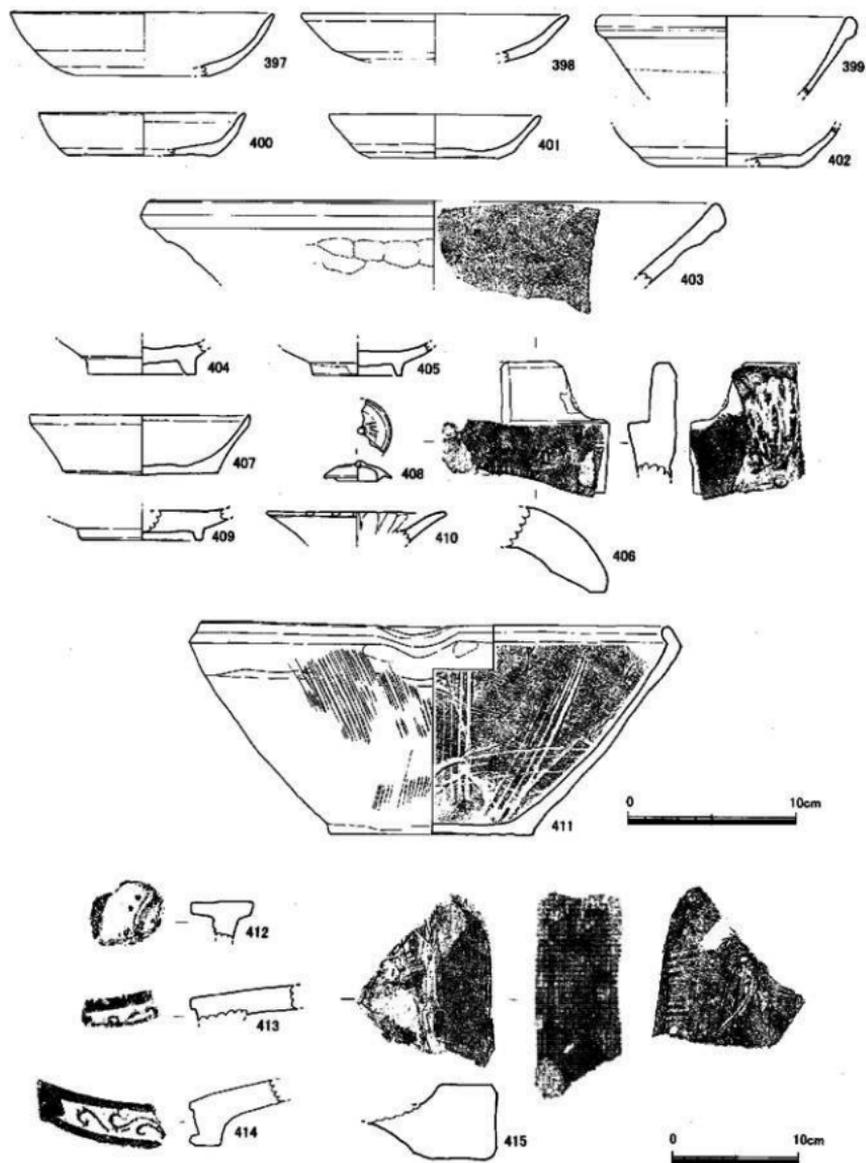
第49図 SD003・016・017・019・304・306実測図 (1/40)



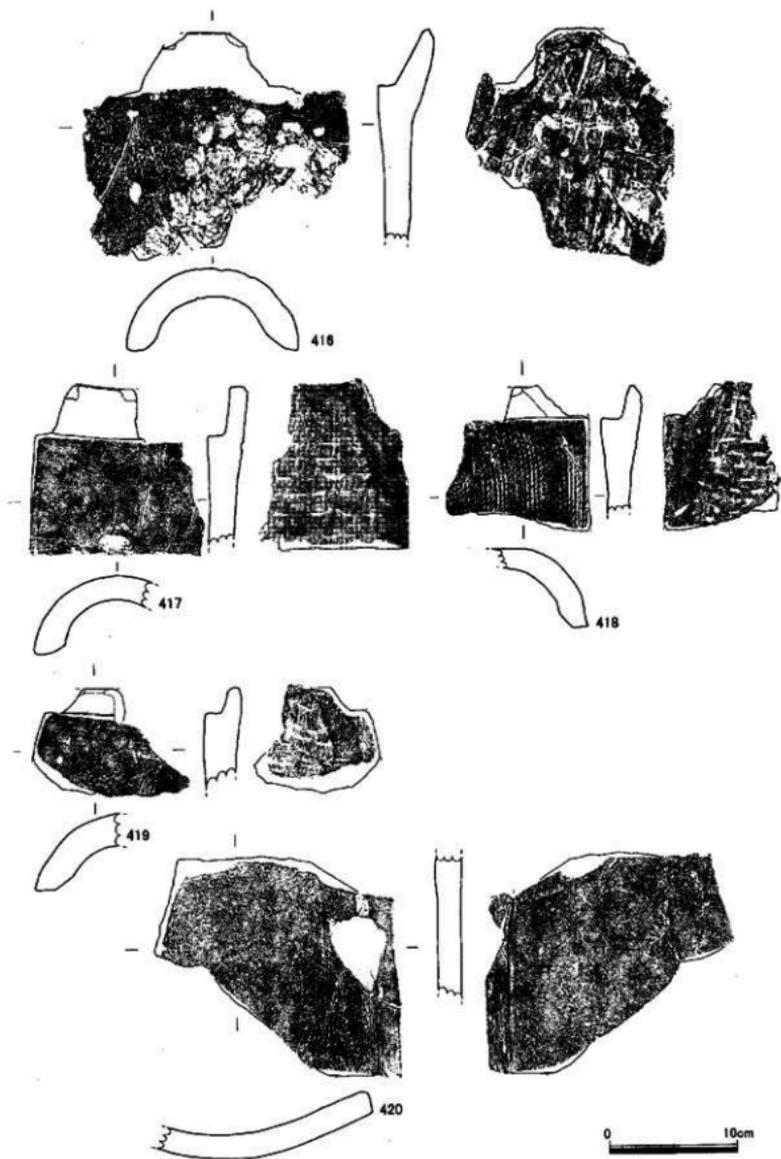
第50図 SD003・016 (1) 出土遺物実測図 (386は1/2、383~385は1/3、他は1/4)



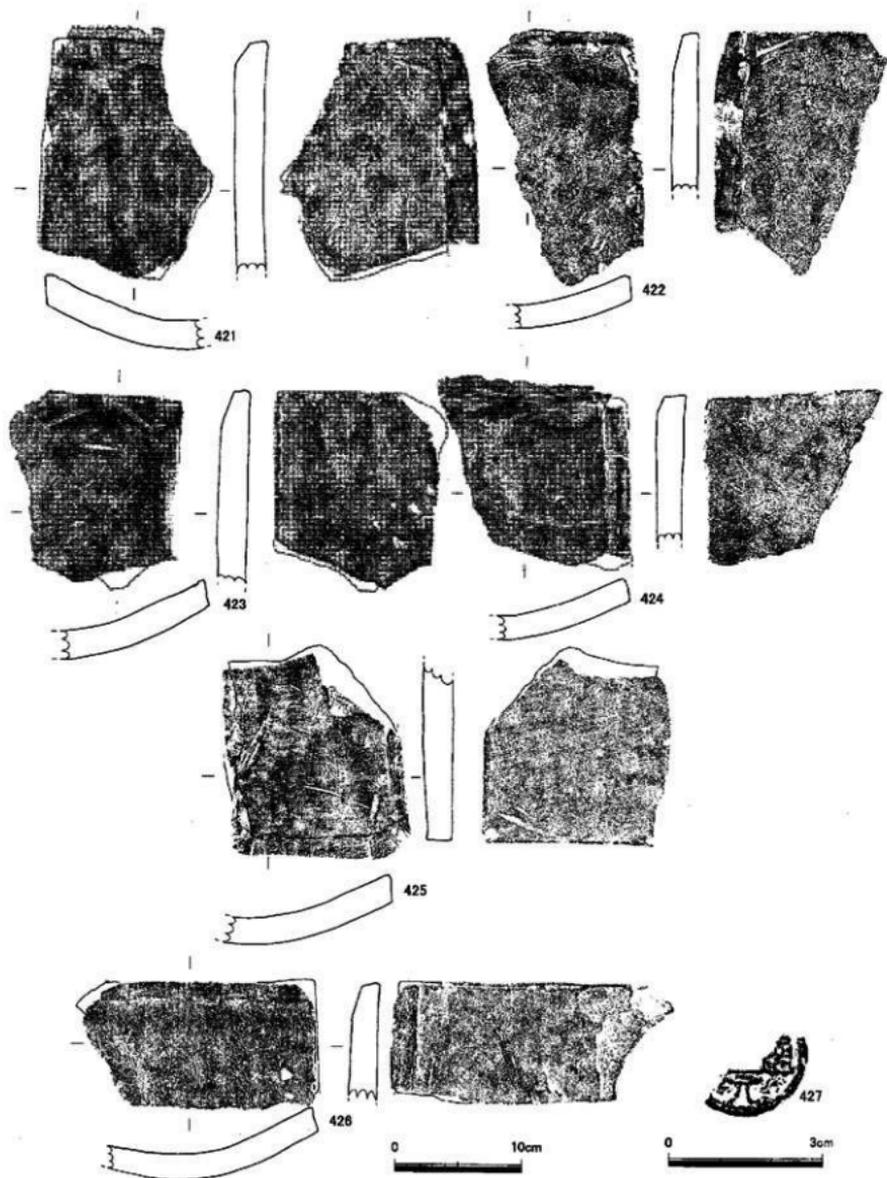
第51图 SD016出土遺物実測图 (2) (1/4)



第52図 SD017-019-304 (1) 出土遺物実測図 (406-412~415は1/4、他は1/3)



第53図 SD304出土遺物実測図 (2) (1/4)



第54図 SD304出土物実測図 (3) (427は1/1、他は1/4)

3) 溝 (SD)

SD003 (第49図) 1面B-1区に位置する北西-南東方向の溝で、北西側はSE001に切られるため、長さ1.7mが遺存する。また、SK078を切る。幅は約0.4m、深さ0.5mを測る。

出土遺物(第50図383~388) 383は回転糸切り底の土師器坏である。板状圧痕は認められない。384は白磁碗V類で、内面に沈線および櫛状工具による施文を有する。385は同安窯系青磁碗1-1・b類である。外面には櫛目を施し、内面には片彫りおよび櫛状工具によって施文される。386は径2.0cmを測る砂岩製石球で、一部を欠損する。387・388は瓦である。387は玉縁式の丸瓦で、凸面胴部は丁寧なヘラナデを施す。凹面には布目が残るが、縦方向のヘラ削りを加えている。388は平瓦で、凹面、凸面ともにヘラナデ調整を行うが、コビキ痕が僅かに残る。端部は丁寧な面取りする。瓦の調整からは16世紀代の遺構と推定される。

SD016 (第49図) 1面A・B-2区で確認した北東-南西方向の溝で、長さ3.2m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。覆土は褐色砂質土で、北東半部では平瓦を主体とする遺物の集中が認められた。

出土遺物(第50図389~391・第51図) 土師器の細片が少量出土しているが、図文化したものは瓦のみで、いずれも燻しは行っていない。なお、軒瓦は出土していない。389は玉縁式の丸瓦で、凸面胴部は縄目の叩きを粗くナデる。凹面には布目および縄紐痕が見られる。側面は広く面取りする。390は雁振瓦である。両面共にヘラナデ調整を施す。391~396は平瓦で、ヘラナデもしくはナデにより調整する。391は両端部および両側面が遺存し、長さ29.5cm、広端部幅22.7cmを測る。これらの瓦から16世紀前半から中頃の遺構であると考えられる。

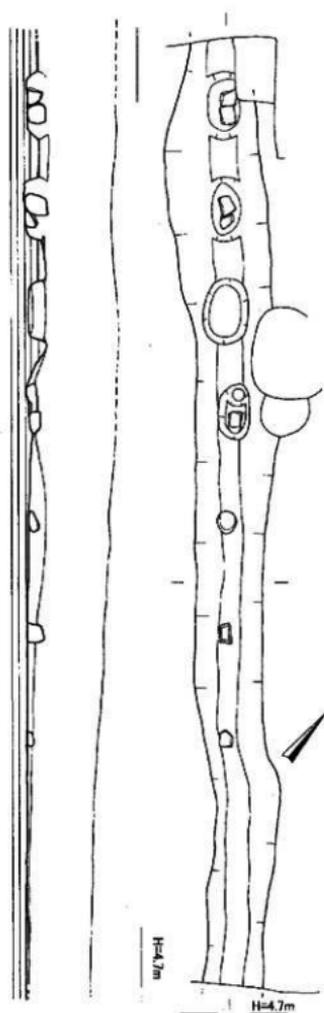
SD017 (第49図) 1面A-1区に位置する。北西-南東方向に延びているが、北西側は調査区外に延長している。土坑の可能性もある。幅0.9m、深さ0.8mを測り、断面は箱型を呈する。この遺構の位置する調査区西隅は重機による表土剥ぎ取り時にやや下げ過ぎており、従来は2面を確認される遺構であると考えられる。

出土遺物(第52図397~399) 397・398は土師器坏で、外底部は回転ヘラ切りである。順に口径は15.4、15.8cmを測る。399は玉縁状の口縁部を呈する白磁碗IV類である。他に回転糸切り底の土師器小皿、同安窯系青磁、瓦等の細片が出土している。出土遺物から12世紀中頃の遺構であろう。

SD019 (第4・49図) 1面B-2区で検出した溝で、現況では北東-南西方向の6.5mが確認できた。北東部の調査区際で一旦短く途切れ、更に調査区外へと延長する。その方位はN-49°-Eである。また、南西端では北西方向に矩形に短く折れる。断面は逆台形状を呈する。

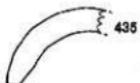
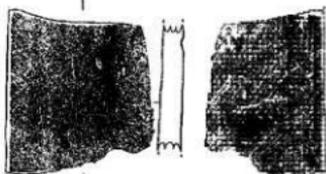
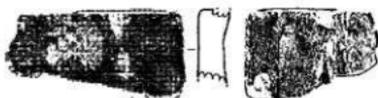
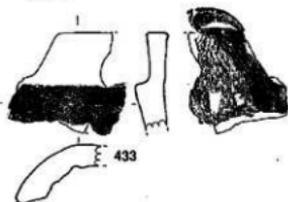
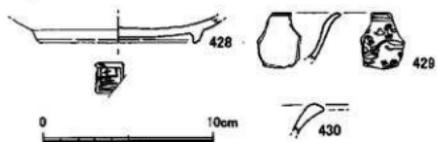
出土遺物(第52図400~406) 400~402は回転糸切り底の土師器坏で、板状圧痕はない。400・401は口径12.2、12.4cmで、器高は共に2.6cmである。403は玉縁状の口縁部を呈する須恵質の鉢で、外面は指オサエおよびヨコナデ、内面は刷毛目調整を施す。東播系であろう。404・405は白磁碗で、404は見込みの軸を輪状にカキ取るⅦ類である。405は高台外面まで施釉される。406は玉縁式の丸瓦で、凸面胴部は縄目叩きにナデを加える。凹面には布の寄り目が見られる。以上の出土遺物から13世紀後半から14世紀初頭の溝と考えられる。

SD304 (第49図) 1面B-2区で確認した北東-南西方向の溝で、SK302に切られる。その方位は方位をN-44°-Eである。幅1.7m、深さ0.7mを測り、断面は逆台形を呈する。北東側は調査区外へ延長し、南西側は反転前の同一面の調査においては確認できていないが、延長方向の2面において検出したSD032・033(後述)との関連性が看取される。覆土は黄灰褐色砂質土を主体とし、多量の瓦が北西側から南東側に傾斜を有して廃棄される。出土状況から溝の埋没最終段階における堆積であると考えられる。遺物の取り上げは上面から瓦群までを上層、以下を下層とした。下層遺物は少量で、土師器、

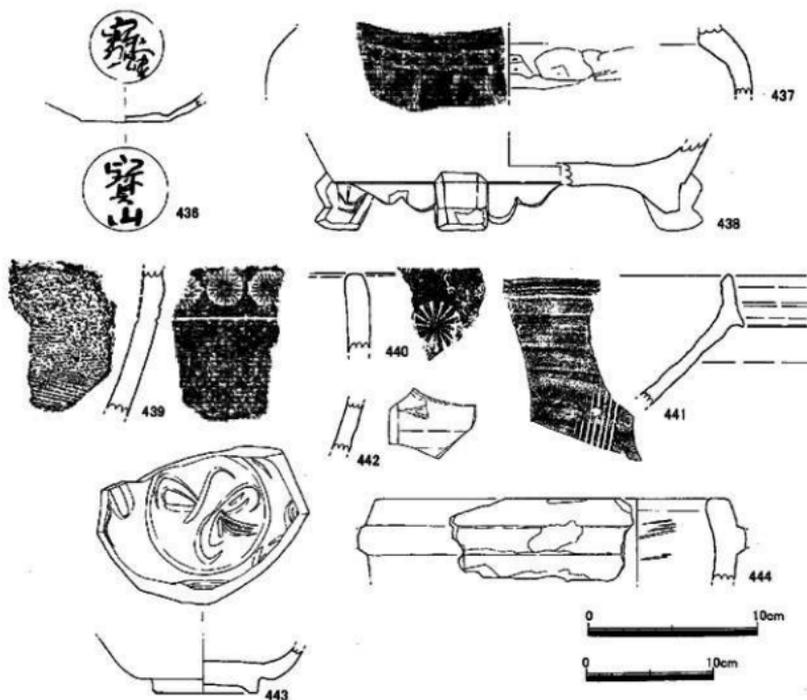


SD305

- 1 紫灰色砂質土
- 2 暗褐色砂質土
- 3 黒味がかった暗褐色砂質土
(暗黄褐色砂少量含む)



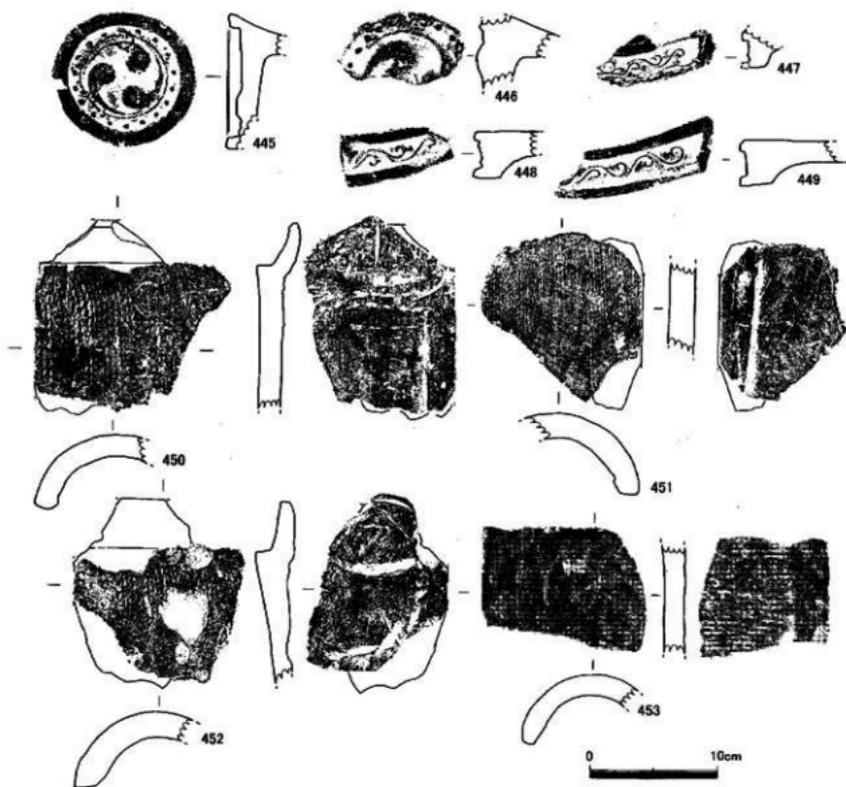
第55図 SD305実測図 (1/50) および出土遺物実測図 (428~430は1/3、他は1/4)



第56図 SD306出土遺物実測図(1) (437は1/4、他は1/3)

陶磁器に少量の瓦が混じる。

出土遺物(第52図407~415・第53・54図) 407は下層出土の土師器坏で、復元口径13.0cm、器高3.5cmを測り、外底部は回転糸切りである。板状圧痕は認められない。408は上層出土の青白磁の合子蓋で、内面は露胎である。天井部外面には褐色土型押しによる施文がなされ、低いつまみを有する。409~410は明代の青磁皿である。409の見込みには僅かに印花文が遺存する。上層出土である。410は下層出土の口縁輪花の皿で、内面には丸彫りの蓮弁文を配する。411は周防系と考えられる下層出土の瓦質播鉢で、口径は28.8cm、器高は12.6cmを測る。完形近くに接合できた。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、体部外面は刷毛目調整を行う。内面には4条1単位の播目が放射状に10単位施され、それらを切る斜方向の播目が4単位認められる。使用による磨滅が顕著である。412~426は出十瓦の一部を図化したもので、413・419・426を除いては上層出土である。412は軒丸瓦片で、小振りな珠文と界線が残る。413・414は軒平瓦で、共に唐草文を配する。413は瓦当面の大半が剥落する。415は鬼瓦の側面部で、燻しを施す。表面および側面はヘラナデ、裏面にはヘラ削りを施す。416~419は丸瓦である。凸面胴部には縄目叩きを施すが、417・419は丁寧にナデ消す。凹面には布目および縄紐痕が明瞭に残る。420~426は平瓦で、ナデおよびヘラナデにより調整する。427は唐代の銅銭



第57図 SD306出土遺物実測図 (2) (1/4)

「開元通寶」(初鑄年:621年)の破片である。以上の出土遺物から16世紀前半代の溝と考えられる。

SD305(第55図) 1面C-1・2区に位置する北西-南東方向の溝である。N-40°-Wに方位を有し、両端部は共に調査区外に延長する。幅0.5~0.9m、深さは約0.7mを測る。溝底面上には自然礫が約1mの間隔をもって据え置かれ、北西半部では楕円形の掘り込みを伴うが、南東半部では直接底面に据える。掘立柱建物の根石と考えられる。また、この溝の南西側11.8mに平行して、2面検出SX031-035-036-037(後述)が同様に自然礫を据えた土坑群として位置しており、有機的に関連するものと考えられる。

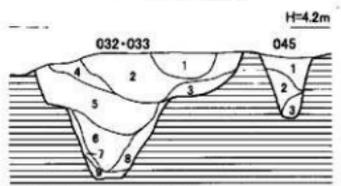
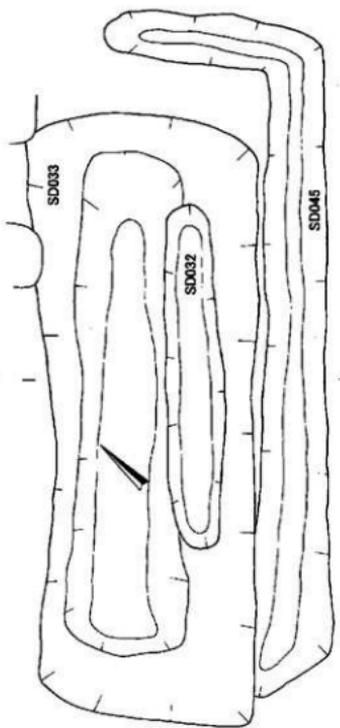
出土遺物(第55図) 428・429は明代染付の皿である。428は畳付きを露胎とし、外底部には銘款を有する。429は端反りする口縁部を有し、外面には唐草文が描かれる。なお、SK307出土の第37図229と接合する。430は白色の胎土の内外面に翡翠釉を施すものである。431~435は瓦である。431は軒丸瓦で、珠文と外縁との間の界線が運る。内区の文様は不明である。432は唐草文を記する軒平瓦で、子

業を派生させる。433~435は丸瓦で、凸面胴部には縄目叩きの後、ナデを加える。凹面には布目を有する。これらの遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

SD306 (第4・49図) 1面C-1・2区に位置する。前述したSD305の南東側に並行する葉研堀の溝である。現況では両者は重複しない。SD305同様に両端部は調査区外へ延伸する。幅1.8~2.0m、深さは約1.0~1.2mを測り、溝底は南東側に緩く傾斜する。

出土遺物 (第56・57図) 436は土師器小皿である。精良な胎土を用い、器壁は薄い。外底部は回転糸切り底で、板状圧痕を有する。内外の底部には墨書が認められ、外底部は「寶山」が記される。437~440は瓦質土器火舎である。437には菱形文、439・440には菊花文のスタンプを印刻する。438は脚部で、波状に裝飾を施す。441は備前焼IV期の挿鉢で、口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。7条の摺目が残る。442は青白磁印花文袖裏紅蓋の細片で、印花文に酸化銅による彩色を行ない、暗赤色に発色する。また、全面に空色の透明釉をかける。本遺跡群第33次調査で類例が出土している。443は龍泉窯系青磁碗I類である。444は滑石製石鍋で、罅の大半が欠損する。445~453は瓦である。445・446は三巴文の軒丸瓦で、445は瓦当径11.0cmを測り、珠文数は18個である。内区との間には圏線が巡る。446は巴頭部が大きく、圏線は認められない。447~449は唐草文を有する軒平瓦で、いずれも外縁幅は狭い。449は宝珠形の中心飾りを配する。450~453は丸瓦で、凸面胴部には縄目の叩きを施すが、453はヘラナデを加えている。凹面には布目が認められ、451を除いて縄目痕を有する。以上の出土遺物から15世紀後半から16世紀前半の遺構に比定されよう。

SD032・033 (第58図) 2面B-2区で検出した溝で、SL043、SD045を切る。先述したSD304の南西部延長上に位置し、断続するものの、一連の遺構の可能性が高い。調査時においては1層をSD032、2層以下をSD033と認識し、掘削および図化を行ったが、SD304との断面形態や溝底レベルとの比較検討から1~3層がその延長に該当する層位と考えられる。また、以下の4~9層がこの遺構に切られる溝と解釈できよう。なお、後述の遺物報告では調査時に認識



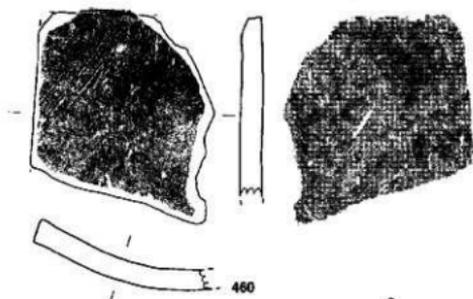
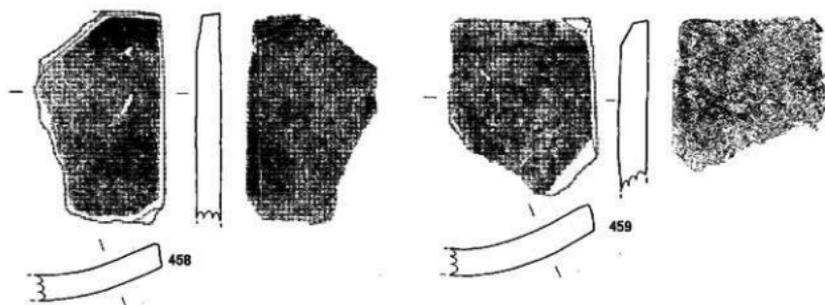
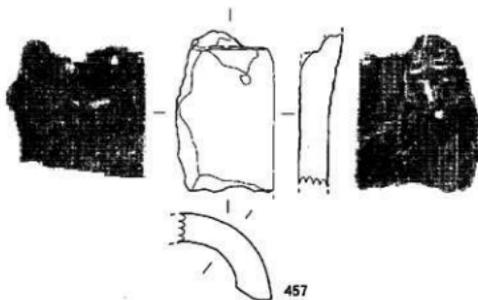
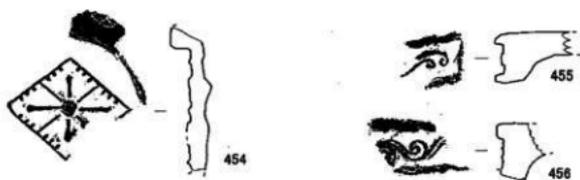
SD032・033

- 1 黒褐色砂質土 (やや粘性があり、瓦片多量含む)
- 2 黒酸がかった黒褐色砂質土 (やや粘性あり)
- 3 暗褐色砂質土 (黄褐色砂多量含む)
- 4 近い黄褐色土
- 5 黒褐色砂質土 (やや粘性あり)
- 6 暗褐色砂質土 (黄褐色砂含む)
- 7 褐色砂 (黄褐色砂ブロック多量含む)
- 7に同じ
- 9 近い黄褐色砂 (黄褐色砂質土ブロック含む)

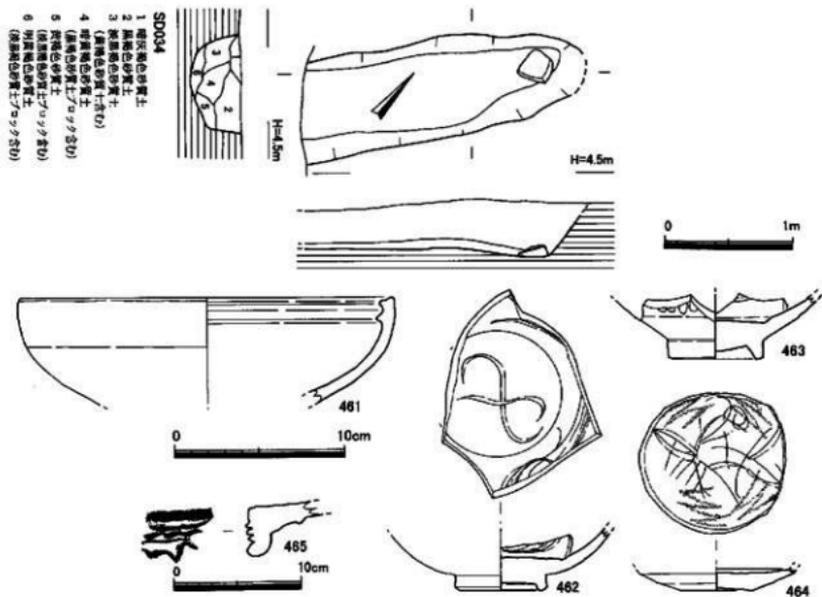
SD045

- 1 灰黄褐色砂質土
- 2 近い黄褐色砂質土 (粘性あり)
- 3 暗褐色砂質土 (やや粘性あり)

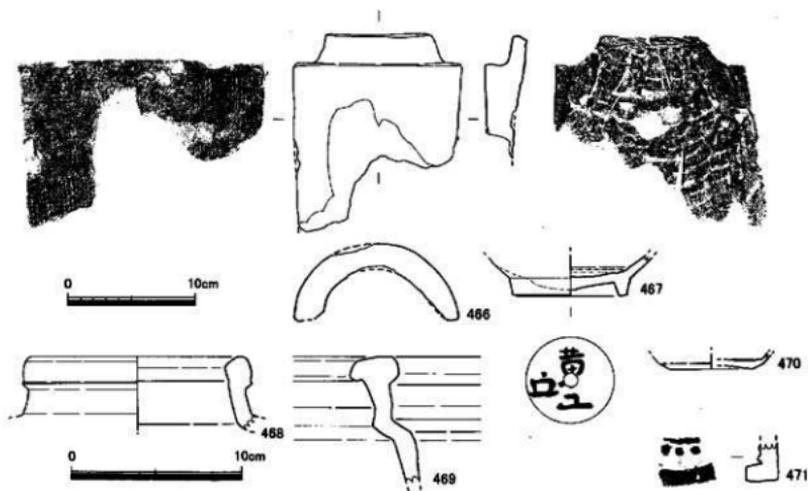
第58図 SD032・033・045実測図 (1/40)



第59图 SD032出土遺物実測图 (1/4)



第60図 SD034実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (465は1/4、他は1/3)



第61図 SD033-045出土遺物実測図 (446・471は1/4、他は1/3)

した層位をもとに行っている。

SD032出土遺物(第59図) これらの遺物群に混在はなく、SD304と同一遺構の遺物として考えて大過はないであろう。いずれも瓦である。454は軒丸瓦で、大内氏の家紋である四ツ日菱文を瓦当中央に配する。外縁は高く作り出す。燻しを施している。455・456は唐草文の軒平瓦片である。455は唐草の先端部を強く巻くもので、燻しを行っている。456は唐草の回転に合わせ子葉を派生させる。457は玉縁式の丸瓦で、凸面はヘラナデにより縄目叩きを消している。凹面胴部は布目を板状工具により消すが、玉縁面には布目、縄紐痕を残す。458～460は平瓦である。凹面共にヘラナデ調整を施す。460の凹面にはコビキ痕が残る。16世紀前半代の所産であろう。

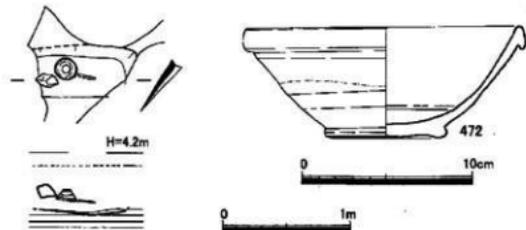
SD033出土遺物(第61図466・467) SD033として取り上げた遺物は細片が多く、図化し得たものは2点である。調査時においては壁面中位の屈曲点を境界にして上・下層の遺物取り上げを実施した。よって上層遺物は両溝の遺物が混在する可能性が高い。466は上層出土の玉縁式丸瓦である。凸面胴部は縄目叩きの後ヘラナデを加える。凹面胴部には布目および縄紐痕が明瞭に残り、玉縁面の面取りは狭く行う。467は下層出土の白磁碗Ⅲ類で、見込みの軸を輪状に剥ぎ取る。外底部には墨書が記される。他に下層からは白磁ⅢⅩ類、斜格子目叩きの瓦等の細片が出土した。14世紀前半に属する遺構と考えられる。

SD034(第60図) 2面A-1区に位置する溝状の遺構である。南西側を攪乱、1面検出遺構および壁際のSE038に切られるため長さは不明である。現況では幅0.8m、深さ約0.6mを測り、やや深く底面が傾斜した北東端部には扁平な礫が確認できた。

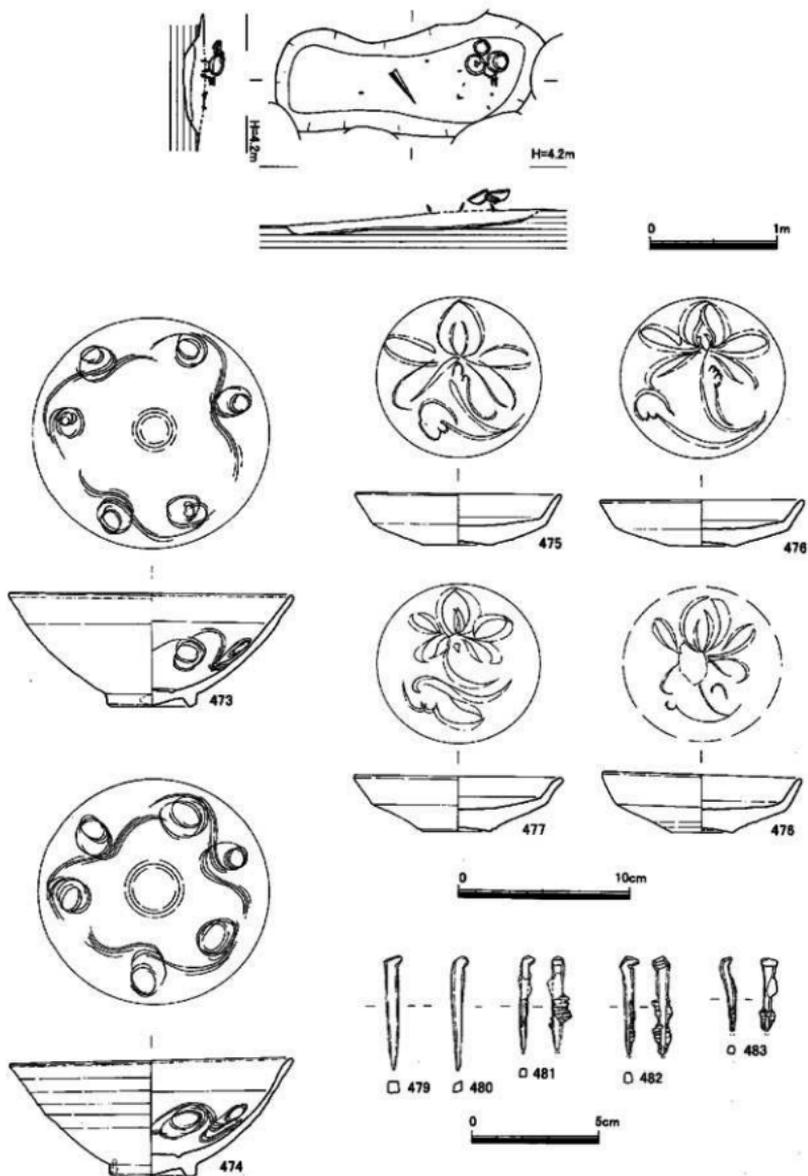
出土遺物(第60図) 461は中国陶器の捏鉢である。内面口縁部下には2条の三角突帯が巡る。白色の砂粒が多量に混じる暗灰褐色胎土で、内外面共に露胎である。462は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、外内面および見込みに片彫りによる施文を有する。463・464は同窯系青磁である。463は碗Ⅲ類で、外面には片彫りの沈線が認められる。軸にはぶい黄橙色を呈する。464はⅢⅠ-2類である。外底部の軸は施釉後に削り取る。465は押圧文軒平瓦で、右流れの波状文を施す。平瓦部凹面・凸面にはヨコナデを行うが、凹面には布目が残る。他に回転糸切り底の土師器小皿、丸瓦の細片が出土した。以上の出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

SD045(第58図) 2面B-2区で確認した「L」字状の溝で、SE043を切る。また、SD033に一部を切られる。幅0.4～0.5m、深さ0.5～0.6mを測り、断面は逆台形を呈する。

出土遺物(第61図468～471) 468・467は中国陶器である。468は壺と考えられ、灰白色のやや軟質な胎土の内外面に褐釉を施す。469は壺で、「T」字状を呈する口縁部に短い外湾気味の頸部が付き、更に屈曲して胴部へと続く。オリブ黄色～暗緑色の釉が雑に施釉される。470は白磁ⅢⅩ-2類で、外底部の軸は拭き取る。471は軒丸瓦で、小振りな珠文および界線が認められる。これらの遺物から13世紀後半から14世紀初頭の遺構と考えられる。



第62図 SX217実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



第63図 SX050実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (479~483は1/2、他は1/3)

4) 埋葬関連遺構 (SX)

ここではこれまでの項目中で、取り上げられなかったその他の遺構の内、埋葬に関連すると考えられる遺構を抽出して報告する。

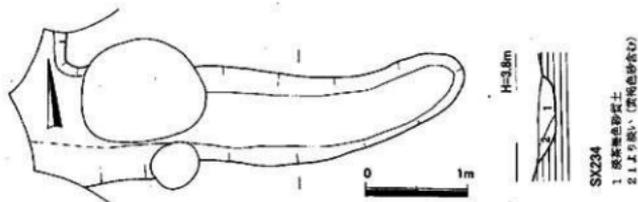
SX050 (第63図) 2面B-1・2区に帰属する遺構であるが、検出当初はブランを認識できなかった。この遺構面が上面となるB包含層掘削中に遺物群を確認したため、周囲を精査した結果、隅丸長方形のブランが検出できた。よって図化した遺物群は浮いた状態となっている。釘や完形の白磁碗、龍泉窯系青磁皿および細片であるが骨片の出土から、木棺蓋であると考えられる。掘り方は長さ約2.1m、幅0.9m、深さは推定0.3mを測る。北東側で出土した磁器群はその出土状態から棺上の供献遺物が蓋の腐食に伴い、棺内に転落したものと推定される。また、図化し得た釘の出土レベル上端と磁器群の下端レベルがほぼ一致しており、その面が棺底と考えられる。

出土遺物(第63図) 473・474は口禿の白磁碗で、口縁端部を除く全面にやや青味がかった白色の釉が施される。両者の器形、施文法、釉色、胎土等の属性は極めて類似する。白磁Ⅰ-1類碗に分類されようが、高台および見込みの径が小さく、深い圏線を巡らせることや内面に文様を有するなど異なる点がある。なお、施文は4条単位の櫛状工具により行われている。また、内面口縁下には1条の細い沈線が巡る。475~478は龍泉窯系青磁Ⅰ-1・b類皿である。いずれも外底部は露胎で、見込みには片彫りによる花文を有するが、器形には差異が認められる。475・476は後2者に比して、やや薄手の底部を有し、外面の屈曲部下半が直線的である。477・478の下半は内湾気味に立ち上がる。なお、475を除き見込み中央部には使用によると考えられる擦痕が顕著に認められる。479~483は鉄製釘である。断面は方形で、頭部は逆「J」字状に屈曲する。481~483には木質が遺存する。以上の出土遺物から13世紀中頃から後半の遺構に位置付けられる。

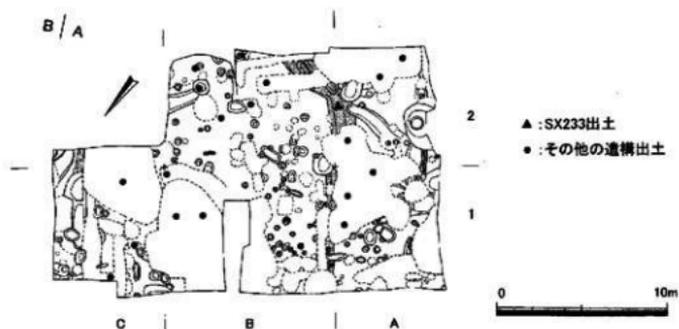
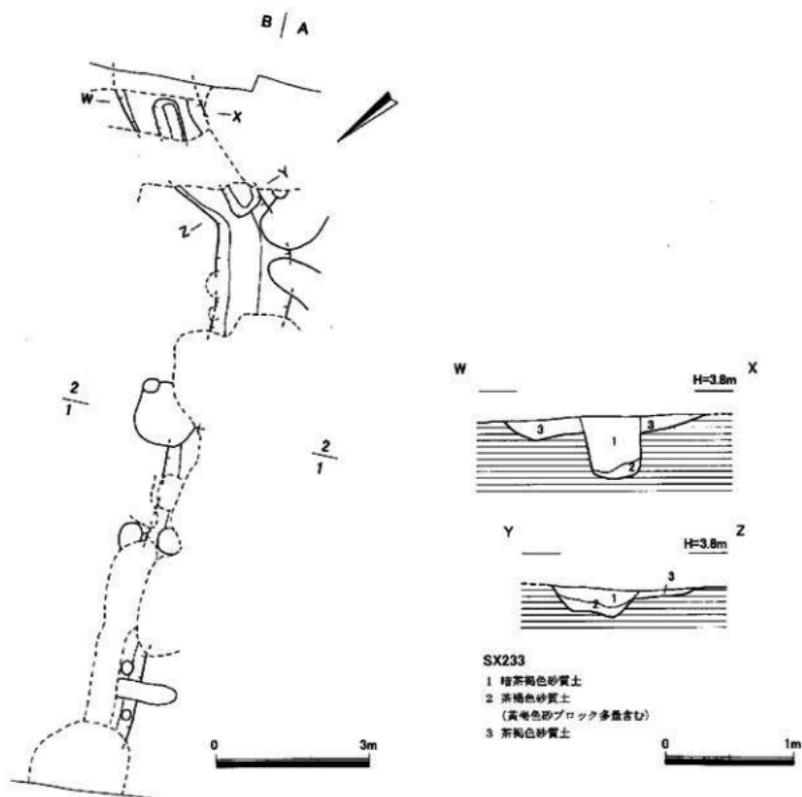
SX217 (第62図) 2面B-1区に位置する。1面遺構、ピットおよびSK214に切られるため、遺構の遺存状況は不良である。現況では隅丸長方形を呈するものと考えられる。底面よりやや浮いた状態でほぼ完形の倒置した白磁碗、骨片等が出土した。また、白磁碗に隣接して角礫が置かれる。これらの遺物や出土状況から土壇墓の可能性が高い遺構と考えた。

出土遺物(第62図) 472は白磁Ⅳ-1・a類碗で、口縁端部を僅かに欠失する。胎土は淡が橙色を呈し、黄味がかった白色の釉は体部下半以下には施釉されない。内面には貫入が認められる。他に回転糸切り底の土師器小皿片が少量出土している。12世紀中頃の遺構と考えられる。

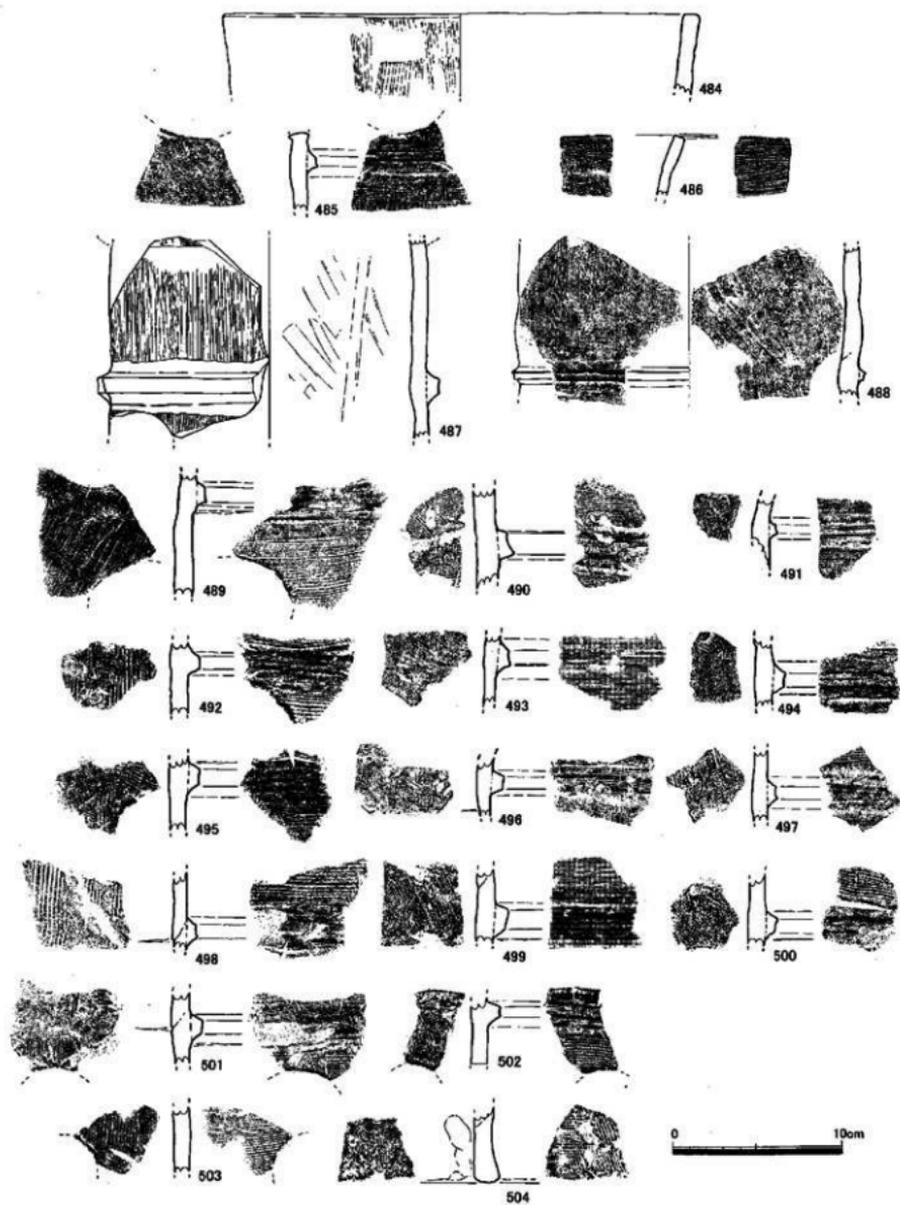
SX233 (第65図) 3面A・B-1・2区で検出した溝で、古墳周溝の可能性を有する。上面の遺構にその大半を切られることや調査区外に溝が延伸することから遺存状況は良好でないものの、その形態から、主軸を北西—南東方向にとる前方後円墳と考えられ、北東半のくびれ部から前方部の周溝の一部を確認し得たものと考えられる。また、墳丘およびその基底面は大きく削平を受け、周溝の下部のみ



第64図 SX234実測図 (1/50)



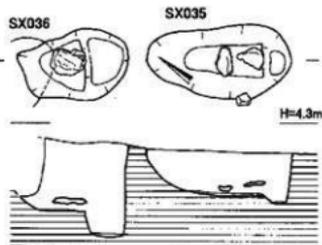
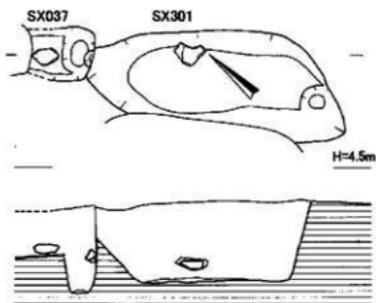
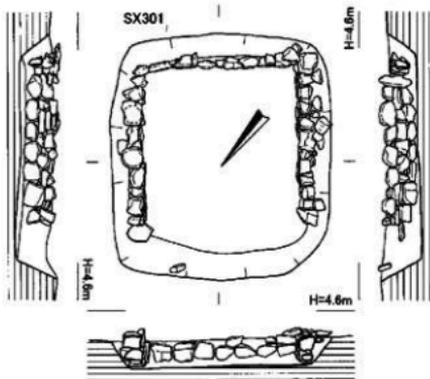
第65図 SX233実測図 (1/40、1/100) および墳輪出土位置図 (1/300)



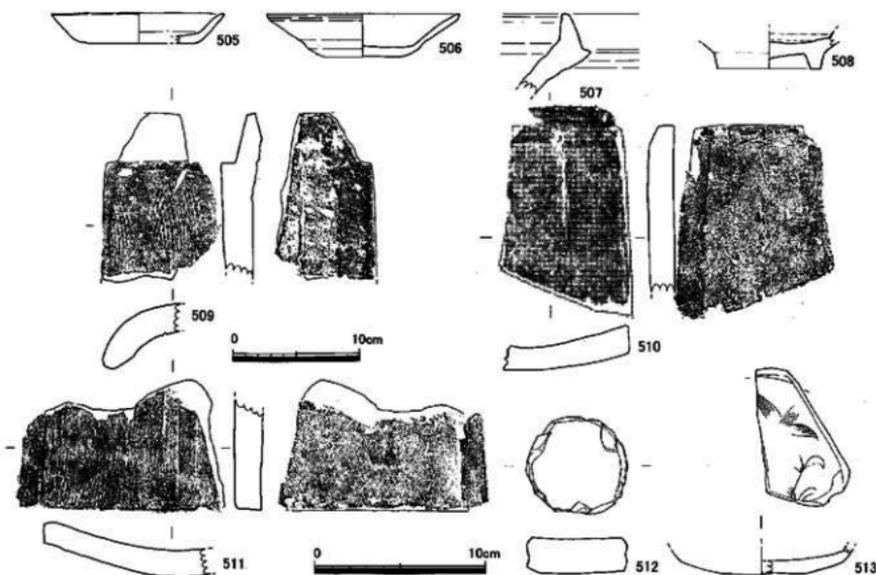
第66图 出土埴輪実測図 (1/3)

が検出できたものと思われる。茶褐色砂質土を覆土の主体とする周溝は現況で幅は約1.2~1.5m、深さは0.15~0.2mを測る。土層図(A-B)、(C-D)位置のくびれ部に近い後部周溝には周溝上層より掘り込こまれた隅丸長方形の土坑(いずれも1~2層)が確認できた。周溝に並行して配置されており、古墳に伴う小規模な埋葬遺構と推定される。墳丘規模は後部部の孤が僅かにしか遺存していないことや中軸線および前部部端部が不明なことから復元は困難であるが、全長20数m程度の小形の前方後円墳と推測される。周溝からの出土遺物には埴輪1点(第66図488)および細片の土師器、須恵器が数点あるのみであるが、第66図に示す様に攪乱、上面遺構および包含層に混入して埴輪片が30点以上出土している(ドットは攪乱・遺構出土分のみ)。

出土遺物(第66図) 上述した細片を除く埴輪片を同化したものである。いずれも無黒斑の円筒埴輪である。487は須恵質焼成、他は土師質の焼成で、赤橙色を呈するものが大半を占める。高さ約1cmを測るタガの断面形態は台形状を呈し、上面はヨコナデにより凹面を形成するものが多い。外面の調整は1次調整にタテハケ、2次調整の認められる個体にはヨコハケを施す。細片が多いため、詳細は不明であるが、B種ヨコハケと考えられる。489・503はBd種ヨコハケに細分されよう。内面の調整は多様で、ハケをそのまま残すものやナデ消すものが目立つ。また、口縁部片である484にはヨコナデを、底部片の504には指オサエを施している。なお、底部調整は認められない。スカシ孔が遺存するものは全て円形を呈する。径の復元可能な個体は少量で、484の復元口径は27.6cm、487・488の胴部復元径は則に19.0、20.6cmである。なお、484の外面には赤色



第67図 SX031・035・036・037・301実測図 (1/40)



第68図 SX031・301出土遺物実測図 (509～511は1/4、他は1/3)

顔料が塗布される。以上の埴輪は川西編年のIV期に位置付けられると考えられ、5世紀後半代に比定されよう。

SX234 (第64図) 3面B-2区で検出した東西方向の溝で、SX233を切る。このSX233と類似した覆土を有し、西端では北側に矩形に屈折する。ただし、延伸部分は上面遺構に切られるため、遺構の全容は不明である。出土遺物は土師器、須恵器の細片が数点あるのみで、積極的な根拠には欠けるが、方形周溝墓の可能性を示しておきたい。現況では幅0.9m、深さ0.1～0.2mを測り、断面は浅皿状をなす。

5) その他の遺構 (SX)

ここでは前項の埋葬関連遺構を除いたその他の遺構について報告する。

SX301 (第67図) 1面C-1区に位置する石積遺構である。長さ2.0m、幅1.7m、深さ0.3mを測る隅丸方形の掘り方に「コ」字形に10～15cm大の角礫を配するが、一部に瓦を用いている。南東側小口は比較的偏平な礫を1、2段立てて用い、内側面は2、3段にやや厚味のある礫を小口積みする。南西側側面は同規模の礫を主体として石積みを行なうが、北東側の上段はやや小振りな礫を混じえている。なお、石積の内法は幅1.2mを測り、炭化物を少量含む灰茶褐色のやや砂質の土が堆積する。

出土遺物(第68図505～512) 510は石積みの一部に用いられたもので、他は石積み内より出土した遺物である。505・506は土師器小皿である。505は復元口径10.0cm、器高1.8cmを測り、外底部は回転糸切りである。506は小振りな底部から体部が大きく開き、中位で鉤く湾曲する。復元口径は11.4cm、器高2.6cmを測り、回転糸切りの外底部には細かい板状圧痕が残る。507は備前焼播鉢片で、内傾気味に直立する口縁部を有する。端部は丸く収める。508は白磁Ⅷ類の碗で、見込みの軸を輪状にカキ取る。

509～511は瓦である。509は玉縁式の丸瓦で、凸面胴部は縄目叩きを粗くナデ消す。凹面には布目および縄紐の痕跡が見られる。510・511は平瓦で、両面をヘラナデ調整する。510の端部は面取りを施す。512は平瓦を整形した瓦玉で、径5.9cm、厚さ2.3cmを測る。図の上面が瓦凹面である。以上の出土遺物から15世紀後半に位置付けられる遺構と考えられる。

SX031 (第5・67図) 以下に報告するSX031・035・036・037は2面B-1・2区に位置し、根石と考えられる偏平な角礫を設置した遺構である。4遺構の主軸は北西-南東方向に直列し、覆土も類似した灰褐色砂質土を呈する。SX031はB-1区に位置し、長径2.1m、短径0.8m、深さ0.6mを測る不整な楕円形の平面プランを有する。北西側にはSX037が隣接する。底面は平埜で、北側の壁面際に礫が設置される。また、南東側壁面際には深さ0.15mのピットを有する。

出土遺物(第68図513) 白磁皿Ⅷ-2・b類である。見込みにはスタンプによる草花文が施される。やや濁った白色の釉がかけられるが、外底部の釉は削り取る。他の回転系切り底の土師器小皿・坏、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、青白磁合子等の細片が少量出土した。これらの遺物から13世紀前半の遺構に位置付けられる。

SX035 (第67図) 2面B-1・2区で検出した。楕円形プランを呈し、長さ1.15m、幅0.6m、深さ0.35mを測る。底面近くには偏平な礫が2個体据え置かれる。南東側の壁面際には深さ0.1mのピットを有する。北西側にはSX036が隣接する。出土遺物には回転系切り底の土師器小皿、同安窯系青磁、中国陶器等があるが、いずれも細片である。

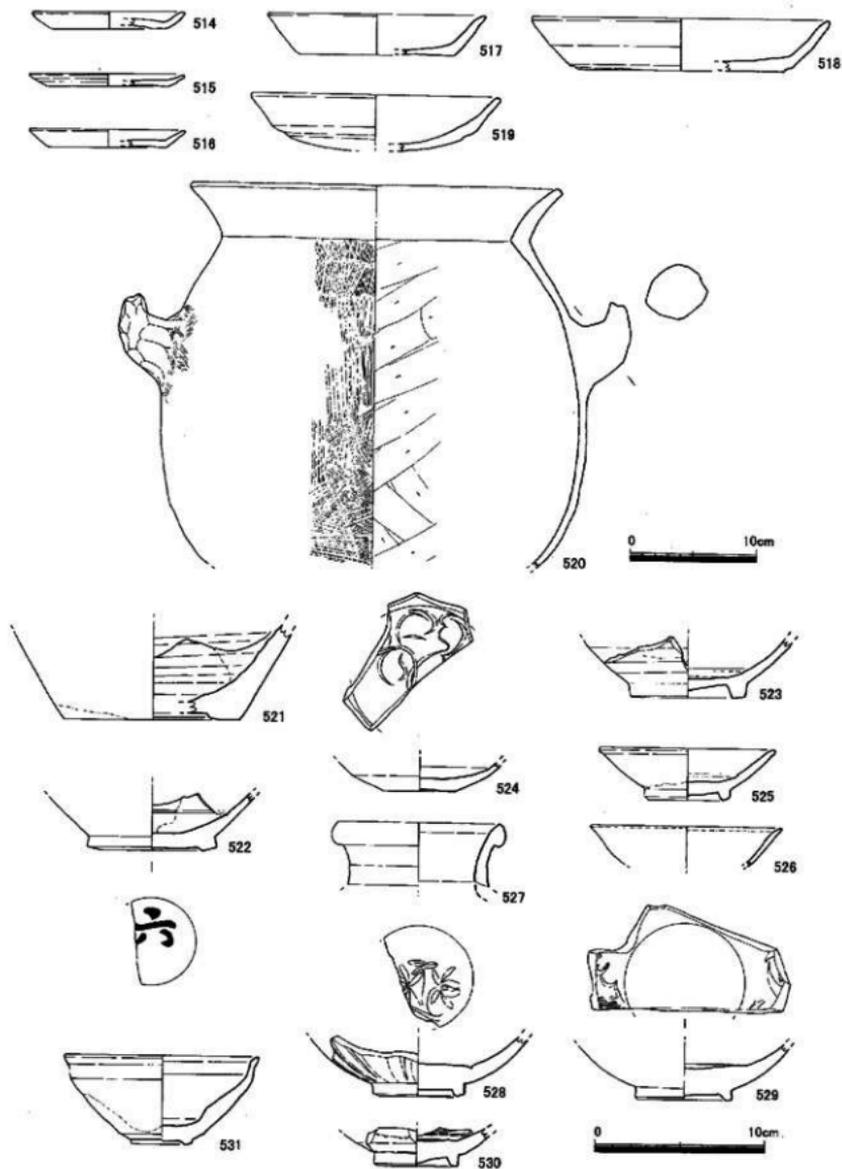
SX036 (第67図) 2面B-1区で、SX035に隣接する。上面の遺構に北西側を切られ、全容は不明であるが、現況では幅、深さ0.6mを測り、前2者同様に南東側壁面に掘り込みが認められる。角礫はほぼ中央に設置される。SX035の北西側および南東側の礫との距離はそれぞれ1.2m、1.5mを測る。また、SX031礫との距離は2.4mである。遺物は回転系切り底の土師器小皿、白磁碗Ⅶ類、中国陶器等が出土したが細片である。

SX037 (第67図) 2面B-1区で、SX031に隣接する。北西側を上面遺構に切られるため、遺存状況は良好でないものの、底面付近に偏平な礫が残る。また、前者同様にピット状の掘り込みを有し、深さは0.3mを測る。SX031の礫との距離は1.2mである。出土遺物には白磁、青磁、中国陶器、瓦等の細片が少量ある。

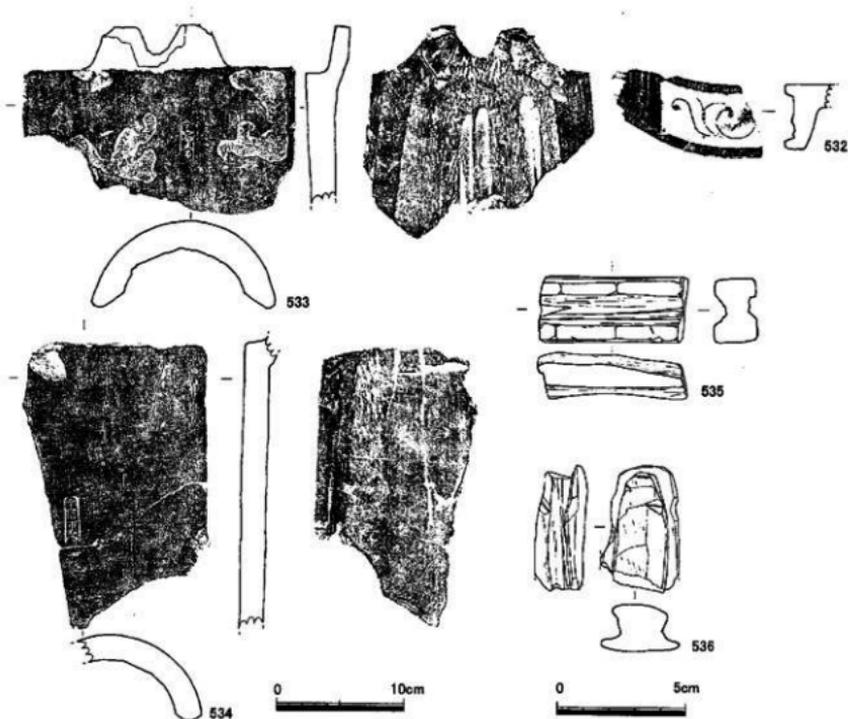
6) その他の遺物

本項では攪乱、ピット、包含層、検出面から出土した遺物の一部をとりまとめて報告する。

ピット・攪乱出土遺物 (第69・70図) 514～516は土師器小皿で、いずれも回転系切り底で、板状圧痕を有する。514・515は2面B-2区に位置するSP183から出土した。順に復元口径は9.1、8.9cm、器高は0.8、1.1cmである。後述する518・521・522も同一遺構出土である口径。516は3面C-2区のSP413からの出土で、復元口径9.1cm、器高1.1cmを測る。519・527・530も同一遺構出土である。517～519は土師器坏である。517は2面A-1区SP209出土で、外底部は回転系切りで、板状圧痕が認められる。口径12.9cm、器高2.5cmである。523～526も同一ピット出土遺物である。518大形の坏で復元口径17.7cm、器高3.1cmを測る。回転系切り底に板状圧痕を有する。519は回転ヘラ切りの丸底坏で、板状圧痕が認められる。復元口径14.7cm、器高は3.4cmである。520は3面C-2区の調査区西隣の壁面に位置するSP414から出土した土師器瓶である。「く」字状を呈する長めの口縁部に丸味のある体部を有し、上半には把手を有する。口縁部は器面が荒れるため調整は不明であるが、内面は斜方向のヘラ削り、外面には刷毛目を施し、上半は縦方向、下半は斜方向を主体とする。把手は指オサエで整形する。521は中国陶器壺である。黒色粒子の目立つ灰色の胎土に灰オリーブ色の釉がかけられる。外底部は露胎で、淡赤橙

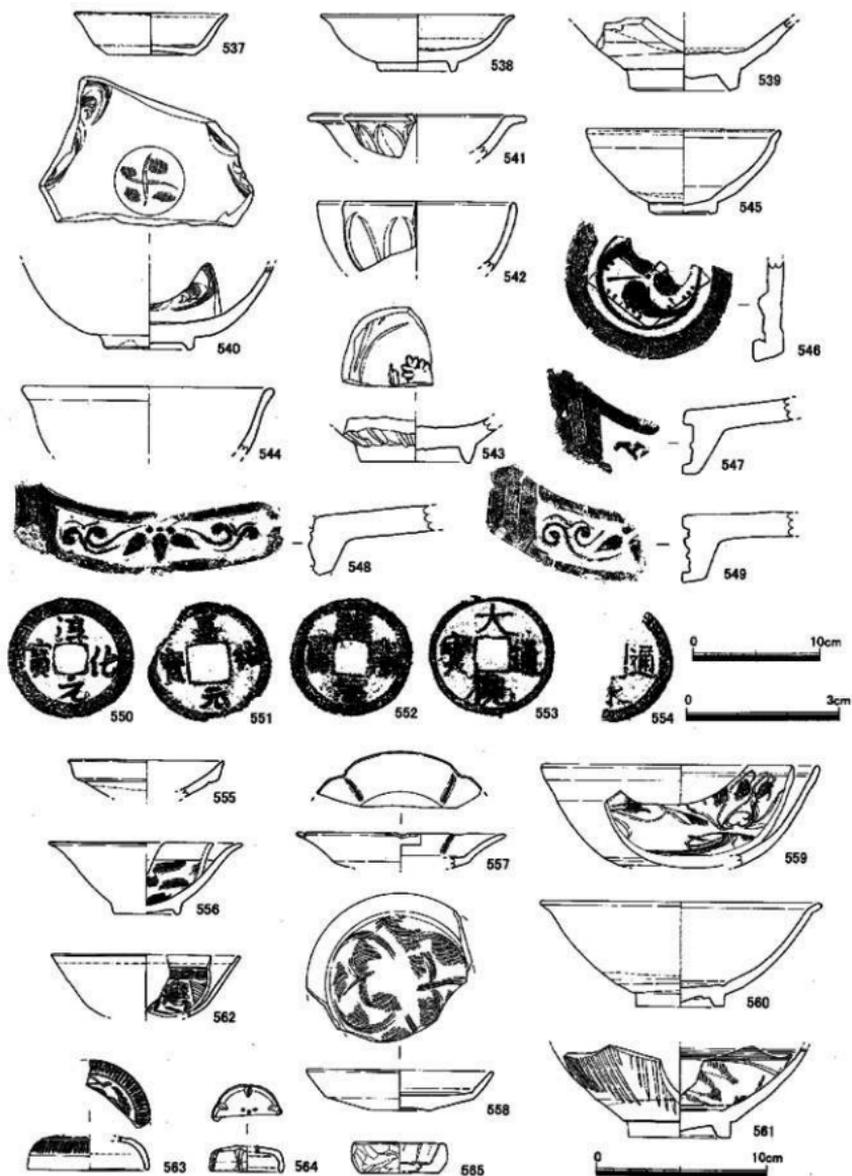


第69図 ビット・攪乱出土遺物 (1) (520は1/4、他は1/3)

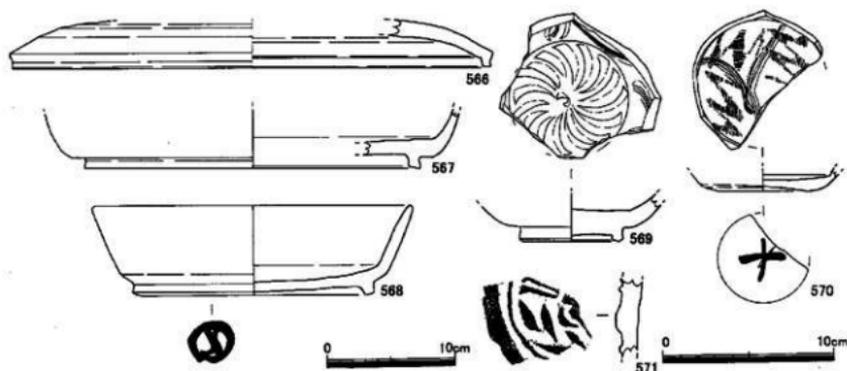


第70図 ビット・攪乱出土遺物(2) (535・536は1/2、他は1/4)

色に発色する。522~527は白磁である。522は碗IV-1・a類である。外底部には「六」が墨書される。523は碗VII-1類で、見込みの釉を輪状にカキ取っている。釉はオリブがかった白色を呈する。524~526は白磁皿である。524は皿VIII-1類で、見込みには片彫りによる花文を有する。外底部は釉の削り取りによって露胎となる。貫入が目立つ。525は皿III-1類で、見込みの釉をカキ取る。濁った白色の釉が施転されるが、外面下半は露胎である。526は口瓮の皿IX類である。口縁部は僅かに外反する。527は白磁壺の口縁部で、玉縁状を早する。528・529は龍泉窯系青磁碗である。528は2面B-2区のSP184から出土した碗I-5・c類である。外面には鏤蓮弁文を施し、見込みには草花文のスタンプを有する。529は2面B-1区のSP215出土の碗I-3類で、体部内面には櫛状工具および片彫りにより花文を描く。530は同安窯系青磁碗III-1類である。外面には沈線の端部が僅かに遺存し、内面には櫛状工具による施文を有する。531は黒釉磁器の天目碗で、内面および外面上半に薄く施転される。口縁部および軸尻は茶褐色を呈する。1面A-2区のSP058出土である。532~534は瓦である。532は1面B-1区SP074出土の軒平瓦で、燻しを施している。瓦当側縁部に楷書体で「新川益久」銘のスタンプが付される。533・534は玉縁式の丸瓦で、燻しを加える。共に攪乱出土である。533には「今宿又市」銘、534に



第71圖 包含層出土遺物 (1)。(550~554は1/1、546~549は1/4、他は1/3)



第72図 包含層出土遺物(2) (571は1/4、他は1/3)

は「今宿市右衛門」銘のスタンプを凸面胴部に有する。「衛門」は草書体としている。535・536は滑石製石鏡を転用した製品である。535は2面B-1区のSP163出土の有溝石鏡で、鋸引きにより溝を作出する。重量は52.15gを測る。536はコテ状製品で、筒みには孔が残存し、側線には鋸引き痕が残る。また、筒み上面には煤の付着が認められる。底面は磨滅がすすむ。1面B-1区SP073出土である。

包含層 検出出土遺物 (第71・72図) 537～554は1面包含層遺物(5ページ参照)である。537～539は白磁で、537は口禿の皿Ⅹ-2類である。外面体部下半から底部にかけては露胎である。538は端反りの皿で、見込みの釉を輪状に幅広くカキ取る。また、高台畳付きも露胎である。青味のある白色透明釉がかけられる。539は碗Ⅶ類で、見込みの釉は輪状にカキ取る。高台は比較的高く削り出す。540～543は青磁である。540は龍泉窯系碗Ⅰ-3類である。体部内面および見込みに片彫りと櫛状工具による施文が施される。541は龍泉窯系杯Ⅲ-4類で、罌形の口縁部を呈し、体部外面には銘蓮弁文を有する。542～544は明代の青磁碗である。542は外面に蓮弁文を配し、口縁部は内湾して取める。543は外面に蓮弁文を施し、見込みに印花文、体部内面には片彫りの施文が認められる。外底部は蛇の目状に軸ハギを行なう。544は口縁部を肥厚させ、緩く外反させる。545は黒釉天日碗である。釉尻および口縁端部は茶褐色を呈する。546～549は瓦である。546は軒丸瓦で、大内氏の家紋である四つ日菱文に三巴文が重複する。巴尾部によって界線を形成し、珠文は配されない。547～549は軒平瓦で、いずれも焼しが施され、瓦当側縁部にスタンプを有する。547は「博多金右衛門」銘、548は「今宿三〇」銘(三右衛門か)、549は「今宿又市」銘を草書体で印判する。548・549は中心飾りに肉厚な三葉文を用いる。550～554は銅銭である。551を除いて北宋代の銭貨で、550は「淳化元寶」(初鑄年:990年)、551は「嘉祐元寶」(同:1056年)、552は「熙寧元寶」(同:1068年)、553は「大觀通寶」(同:1107年)である。554は「寛永通宝」(同:1636年)である。

555～565は2面包含層出土遺物である。555・556は白磁で、555は皿Ⅱ-1・b類である。青味のある釉がかけられる。556は小碗Ⅴ-2・a類で、内面には櫛状工具による施文を有し、口縁下には沈線が1条巡る。外底部の高台畳付から内面は露胎である。557～559は龍泉窯系青磁である。557は皿もしくは杯で、体部下半で腰折れし、口縁部は外反して大きく開く。口縁部には輪花を有し、ヘラ状工具による分割線を配する。558は皿Ⅰ-2・c類である。櫛状工具により見込みに花文を施し、淡緑色の釉が施胎

されるが、外底部の軸は削り取る。559は碗Ⅰ-3類で、片彫りおよび櫛状工具により花文を描く。560・561は同安窯系青磁碗である。560は碗Ⅱ類で、内外面ともに無文である。オリーブ灰色の軸が体部外面下半を除いてかけられる。561は碗Ⅲ-1類で、外面には片彫りによる施文、内面には櫛およびヘラ状工具による文様を有する。560同様に体部下半は露胎である。562~564は青白磁である。562は口禿の碗で、型造りにより雷文、花文、鳳凰文を施す。563・564は合子蓋で、型押しによる施文がなされる。563は口縁部内面、564は内面が露胎である。565は滑石製の小形容器である。内外面に鑿による削痕が残る。

566~571は3面遺構検出時の採集遺物である。566~568は須志器である。566は復元口径27.8cmを測る坏蓋で、口縁部を屈曲させ、端部は断面方形形状を呈する。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整し、口縁部はヨコナデする。567・568は坏身で、567は底部のやや内側に断面台形状の高台を貼付する。568は底部端に高台が付き、外底部には墨書が記される。569は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、見込みには片彫りによって花文を描く。オリーブ黄色の軸が外底部を除いて施軸される。570は同安窯系青磁ⅢⅠ-2類で、櫛状工具および片彫りによる施文が施される。外底部の軸は削り取り、「」の墨書を有する。571は草花文を配する軒丸瓦片で、界線が巡る。

IV. 結 語

今回の調査で確認できた遺構は古墳時代中期(5世紀Ⅰ期)、中世前半(12世紀中頃から14世紀初頭:Ⅱ期)、中世後半(14世紀から16世紀:Ⅲ期)の3期に大別し得る。Ⅱ期は例言に掲げた山本信夫氏の編年に依拠し、土師器法量変遷および輸入磁器の組成をもとに龍泉窯系青磁Ⅰ類(Ⅰ-5類を除く)、同安窯系青磁、白磁碗Ⅳ類を主体に組成される12世紀後半(Ⅱ-1期)、龍泉窯系青磁Ⅰ-5類を主体とし、龍泉窯系青磁Ⅲ類および白磁碗・ⅢⅠⅡ類を含まない13世紀前半(Ⅱ-2期)、前述の龍泉窯系Ⅲ類、白磁Ⅰ類が主体となる13世紀後半から14世紀初頭(Ⅱ-3期)に細分する。また、14世紀以降のⅢ期については15世紀中頃を境界とし、その前半をⅢ-1期、後半をⅢ-2期とする。なお、Ⅰ期以降Ⅱ期に至る律令期から平安時代後半に属する遺物は散見するものの、時期が明確に比定できる遺構は検出できていない。また、Ⅱ期直前に該当する回転ヘラ切り底の上師器および白磁のみで組成される11世紀後半から12世紀前半代の遺構は皆無であった。

Ⅰ期 該期の遺構としては前方後円墳の可能性を有するSX233および方形周溝墓と考えられるSX234が挙げられる。SX233の山内円筒埴輪は無黒斑および外面2次調整法(B種ヨコハケ)の2属性から川西安幸氏による編年²¹⁾のⅣ期に位置付けられる。実年代では5世紀後半となろう。福岡平野における前方後円墳の系譜について吉留秀敏氏による詳述²²⁾があり、同氏は平野内をその分布状況から那珂川上流域、那珂川下流域、御笠川流域の3地域に区分した上で、更に5群の小地域を細分設定されている。地理的には那珂川下流域の博多グループに該当する古墳となり、時期的には「Ⅱ遺跡の立地と環境」で前述した博多1号墳に後出する系譜上に位置付けられる。博多1号墳が砂丘Ⅰの尾根上に並行して占地するのに対し、SX233は尾根からやや下った緩斜面上に尾根と直交方向に築造される。ただし、博多1号墳土上の円筒埴輪は有黒斑で、外面2次調整が行われず、タテハケによる1次調整のみであることから川西編年Ⅱ期に該当し、SX233とは1時期程度の時間差を考慮しなければならぬ。同氏が那珂川下流域那珂グループの5世紀中頃に位置付ける井尻B1号墳出土円筒埴輪は有黒斑、外面2次調整にA種ヨコハケを用いており、川西Ⅲ期に該当すると考えられることから、博多1号墳に後出し、SX233に先行する古墳と考えられる。また、SX233に後続する前方後円墳としては井尻B1号

墳と同一グループに含まれる剣塚北古墳が相当すると考えられ、同古墳出土の埴輪は無黒斑で、タテハケ1次調整のみの個体が多く認められる。また、タガの形態はSX233に比して低平な感があり、後出的要素を有する。以上の様に同流域内での系譜が連続することや大西智和氏による「前方後円墳から出土した円筒埴輪には、ほとんどの場合、外面二次調整のヨコハケが認められる…」という指摘¹⁾からもSX233は前方後円墳である蓋然性が高いと言える。

Ⅱ期 12世紀後半のⅡ-1期にはSB038・041・042・043・231の井戸や輸入陶磁器が一括廃棄されたSK352、SD017・034、SX217等が認められる。井戸の出現は該地がこの時期に居住地化したことを示すものである。次期のⅡ-2期は指標磁器ともなる龍泉窯系青磁Ⅰ-5類の出土例が極めて少量で、明確に該当する遺構は殆ど確認できていない。可能性のある遺構としてSK044・379を挙げ得る程度で、極端に遺構数が減少している。しかし、本調査区南側に位置する第37次では該期の井戸、土坑、溝等の生活遺構の検出例があり、集落域の僅かな移動に起因するものと考えられる。Ⅱ-3期には再び井戸を主体に生活遺構が認められ、SE039・046・048・049・357・358、SK118、SD019、SX050が該当する。井戸は調査区の南西側と北側に重複した掘削が行われており、一定期間の居住が看取される。また、該期の仁治3(1242)年には宋商人謝國明による承天寺の建立がなされているが、上述の井戸検出状況や整地層が認められないことから当期には寺域には取り込まれてはいないことが想定される。

Ⅲ期 Ⅲ-1期の遺構としてはSE353・354・355・356が該当し、これらの井戸が引き続き、調査区北側のB-1区に重複して設置されているが、Ⅲ-2期では井戸の掘削は認められず、SD016・304(032)・305・306に代表される瓦を多数出土する溝状遺構等の出現が顕著である。これらはほぼ並行もしくは直交方向に掘削され、同時期性は判然としないものの、方形の区画が意識されている。SD304の瓦出土状況やSD305の溝底で検出した等間隔に置かれた根石から瓦葺の建物の存在が窺える。中世末に描かれた「聖福寺占図」に記された承天寺には聖福寺と連続した築地塀が巡らされており、両側の南西側に設置された三門前面には築地塀と並行する道路が整備されていたものと考えられる。これは大庭康時氏による博多における街区復元²⁾で、幹線道路1とされているもので、現在のところ砂丘Ⅰでの南東端は第64次調査で検出されている。この調査区より北東に位置する本調査区は該期において寺域内に含まれるものと推定され、古岡の承天寺伽藍周囲に描かれている塔頭群が占地する位置に相当するものと思われる。Ⅲ-2期の遺構群をこれらの建物群に該当させることは早計かもしれないが、その可能性を有するものとして提示しておきたい。また、SD304出土の瓦質指鉢(第52図411)やSD032出土瓦(第59図454)および包含層出土の瓦(第71図546)は大内系の遺物として、博多派が同氏の支配下にあったことを端的に示す好資料であろう。なお、本期の時期細分が複雑なために、細かな動向や西期を指摘することができず、不十分な考察となった。今後の周辺調査成果を含めた上で、再考したい。

註

- 1)川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64・2・4 1978年
- 2)古留秀敏「福岡平野における首長墓系譜について」『那珂5』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集)1992年
- 3)大西智和「地域性の発現からみた円筒埴輪の導入と展開の再解釈 九州の事例」『九州考古学』第68号 1993年
- 4)大庭康時「聖福寺1丁目2番地-中世後期博多における街区の研究(1)-」『法吟』第2号 1993年
大庭康時「中世都市博多の成立-博多遺跡群の発掘調査から-」『福岡平野の古築地と追跡地』1998年他

図 版



調査作業風景



(1) 1面南西部全景(東から)



(2) 1面北東部全景(南東から)



(1) 2面南西部全景 (東から)



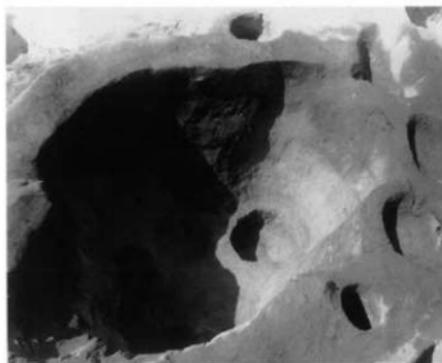
(2) 2面北東部全景 (南東から)



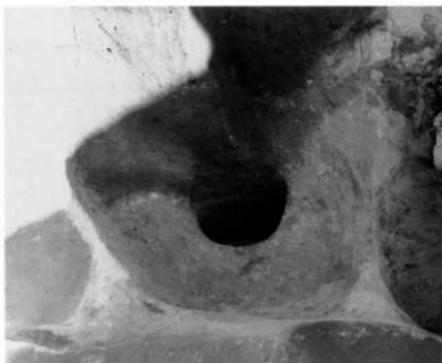
(1) 3面南西部全景(東から)



(2) 3面北東部全景(南東から)



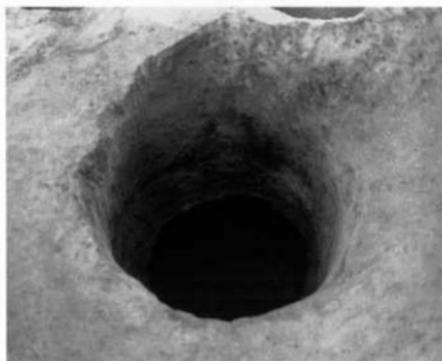
(1) SE039 (南西から)



(2) SE043 (北西から)



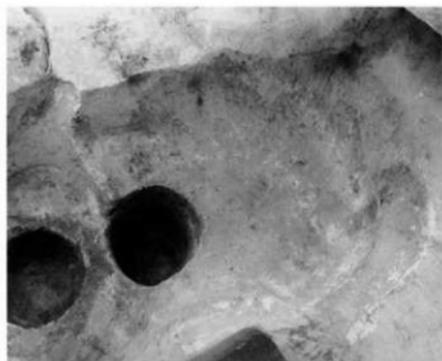
(3) SE049 (南西から)



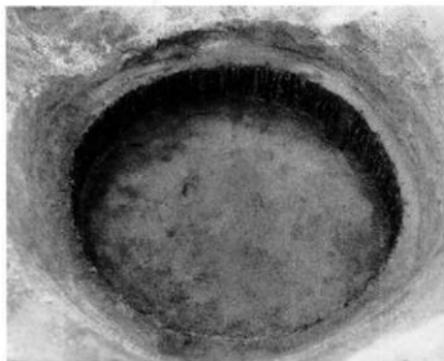
(4) SE049井筒 (南西から)



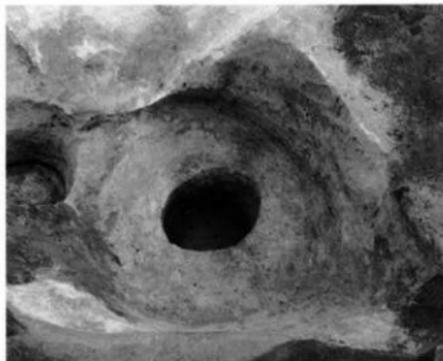
(5) SE046 (北東から)



(6) SE047 (北東から)



(1) SE353井筒 (南東から)



(2) SE356 (南東から)



(3) SE357 (南東から)



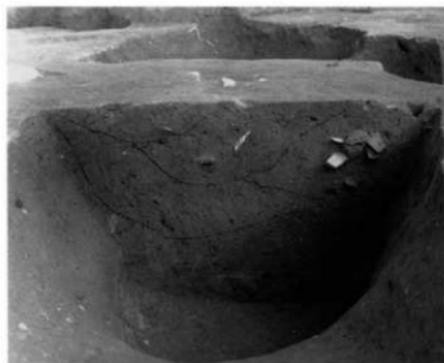
(4) SE231 (南東から)



(5) SK040 (東から)



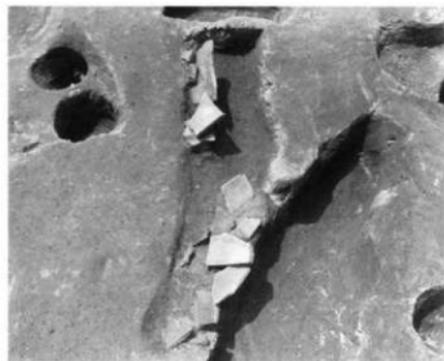
(6) SK214 (南東から)



(1) SK307土層 (西から)



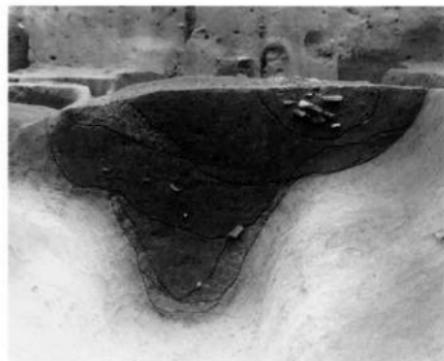
(2) SK352 (北東から)



(3) SD016 (北西から)



(4) SD019土層 (南西から)



(5) SD032・033土層 (南西から)



(6) SD045土層 (南西から)



(1) SD304 (北東から)



(2) SD306土層 (南西から)



(3) SD305 (南東から)



(4) SD305土層 (北西から)



(5) SX050 (南西から)



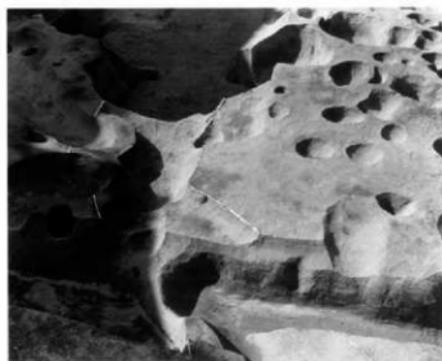
(6) SX050遺物出土状況 (北東から)



(1) SX217 (南東から)



(2) SX301 (北西から)



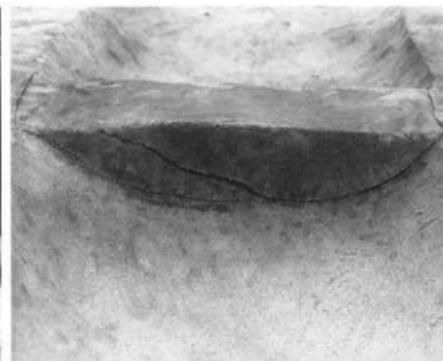
(3) SX233 (南東から)



(4) SX233土層 (北西から)



(5) SX234 (北東から)



(6) SX234土層 (東から)

はか
博

た
多

71

—博多遺跡群第109次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第629集

2000（平成12）年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 嶋井精華堂

福岡市博多区聖路4丁目1番12号
